

『職工は絶対に君の命令に服従して居る事は、私自身が工場にやつて来てよく知つて居る。結局君の技術が未熟であるからだ。私の考へる處に依れば、原料の製造が悪い、薬品の調合が宜しくないか、何れ他に原因があるだらうと思ふ。』

と遠慮なく責め付けた處が、米國人の技師も餘程困つたと見えて、

『私自身も其の原因は附に落ちぬけれども、何處かに手落ちがあるかも知れぬから、一週間だけお待ち願ひたい。其の期間内に旨く行かなかつたら、會社を放逐されても決して不服は申さぬ。』と言ふので、其後一週間の猶豫を與へたが、其間の心配と云ふものは普大抵ではなかつた。愈々紙が出来ぬと云ふ事になれば、私の責任問題は兎も角として、會社の運命に關する重大な問題である。新たに技師を備へば可い様なものゝ、そんな事をしてゐる間に株主側から苦情が出て、初聲を擧げたばかりで潰れてしまふ様な事にならぬとも限らぬ。さて困つた事だと思つてゐると、天佑と云はうか、技師の熱心な研究の結果か、兎も角紙が漸く延び出す様になつた。尤も完全なものではないが、製品として賣り出す事を得る様な物が出る様になつたので、明治八年の頃から本式に其の製造に取り掛つたのである。處で其の出来上がった洋紙はどう云ふ物であるかと云ふに、漸く荷包みをするに足る様な粗悪な品で、苦心して製造しては見たものゝ、値段が安いから、とても算盤が

取れる筈がない。毎日々々損失を重ねて株主からは叱言が来る、事業は一向に振はない。私は其の將來には希望を有つて居つたものゝ、當面の維持經營には全く以て困つてしまつた。さう云ふやうな譯で會社當局者の苦心といふものは、全く想像以上だつたものである。

——何しろ明治初期のわが國は、大河の決するが如き勢ひで、歐米の制度文物を輸入した時代だから、官民ともに新知識の吸収に努めたので、色々な新事業が起つた。製紙事業の如きもその一つで、『維新以來人文日に開け、百般の事業争つて泰西の長をとり、以て邦家の富強を謀るの秋に際し、文化表彰の機關たる抄紙事業の起らぬは、國家の恥辱である』とは、大藏省三等出仕であつた澁澤さんの當時の持論。それもその筈、明治五年に大藏省紙幣寮では、公債證書、紙幣、諸印紙の發行があり、文書局の創置があつて、洋紙の需要が増加したにも拘らず、全部輸入に仰ぐ始末であつた。そこで澁澤さんが音頭取りで、紙幣寮から三井組、小野組、島田組等に製紙事業開始を勸奨した結果、明治五年資本金十萬圓で、會社設立の認可申請の願書を紙幣寮に提出し、六年二月許可となり、抄紙會社と稱し、横濱亞米一商會の手を経てロンドンのイーストレス・エンド・アンダーソン會社に機械類一式を注文し、機械技師ノランス・チースメン(英人)、抄紙技師トーマ



ス・ポットムリー(米人)も同時に雇傭してもらつた。これが今日の王子製紙會社である。ところが、この製紙機械と一緒に歐文タイプと印刷機械が來たので、それを藏前の米倉に仕舞つて置いた。一方澁澤さんは折角抄紙機械を買入れて、洋紙を造つても紙が賣れねばならぬといふので、陽其二氏經營の印刷會社買収の交渉をはじめ、契約が出來て、明治七年其締社は王子製紙横濱分社といふことになつた。王子製紙の工場は七年九月起工、八年六月全部竣成したが、七年の暮に製紙の開業式を舉行したとき、印刷局の役人から『政府は明年六月から國庫の收入として訴訟用紙、裁許用紙を賣る計畫があるが、紙幣寮の能力では間に合はぬから心配して呉れぬか』といふ相談が、王子製紙の幹部にかけられた。王子製紙ではこの註文をきいて、早速藏前に仕舞つてあつた機械を引張り出し、澁澤さんの關係から第一銀行内の簿記講習所が空いてゐたのを借り受け印刷所を設ける事になつたが、此の工場が後に東京印刷會社となつたのである。(財界ロマンス)

## 二、經營の苦心と研究生の洋行

折角創立したけれども、前に申す様な有様でどうも收支償ふ迄に到らない。併し漸く新興した此の事業を今更中止する譯には行かぬ。勿論算盤勘定だけからすれば、損失ばかり重ねて居る事業で

あるから、大抵の處で見切りをつけるのが賢明な遣り方であるかも知れぬが、現在は垣をして居つても、將來は需要が進むのは判り切つて居るから、一時は經營困難でもそれを忍んで難局を突破したならば、必ず社運を隆盛ならしむる事が出來るだらうとの自信もあるし、殊に此の新興事業が中途で挫折する様な事があつては、我國の工業上に悪い手本を見せる様なもので、之れを大にしては我が産業の進歩を妨げ、國家的見地からするも甚だ遺憾千萬であるので、經營難に苦みながらも三年ばかり経過した。其中に眞に此の事業を盛り立てるには外國人計りを頼りにせず、日本人計りの手で事業をやつて行く様にしなければならぬと考へて、幸ひ外國人技師に就いて修業して居つた日本人の工場員も一通り技術を修得したので、明治十年頃に外國人技師を解雇して一切日本人だけで製造する事とした。

其頃の需要先といふものは印刷局が第一の御得意で、民間では一二の洋紙商と二三の新聞社だけであつたから、會社當局者は完全なる製紙の産出に苦心する一方に於いては、販路の擴張に就いて非常な苦心と努力を要した。且つ一面に於いてどうしても斯業を盛んならしむるには、歐米先進國に學んで其の長所を探り入れなければならぬと考へ、製紙研究の爲めに會社から人を派して親しく彼の地の状況を視察せしむると共に、實地の研究をなさしめて之れを會社に應用する爲め、明治



十二年の秋に社員大川平三郎君をアメリカに派遣した。大川君はアメリカのホリヨークの紙漉工場に入つて實地の研究をなし、其他の製紙工場をも視察して歸朝したが、歸朝以來其の修得せる技術を應用して、直ちに製品の改良を圖ると同時に、新たに藁を原料として紙を製造する新方法を採用し、一層事業の擴張をする事となつた。

——月並の文句だが、家貧しうして孝子現れ、國危うして忠臣出づで、會社でも經營難の時には思ひがけぬ人物が飛び出し、社運をたて直すことがある。洋紙界のオーソリチー大川平三郎氏もこの意味からロマンスの種になる。前に述べたやうに、王子製紙では七年のくれから、抄紙をはじめたが、米人技師の技術が下手であつたので、出來た紙は澁紙のやうなお粗末なもの、おまけに出たと思へば直ぐ切れるといふ有様。これには澁澤さんもホト／＼弱つて仕舞つた。偶然な仕合せといはうか、創業當時王子製紙へ註文されたのは、刻煙草の印紙代りに使ふ長帶紙や、地券用紙のやうな厚手な紙で、器械が不完全でも、技術が下手でも一番すきやすい紙であつたからどうやら出來たが、これとても永久につゞくものではないので、抄紙技術を研究した上、日本人の手で立派に洋紙が製造出來るやうにせねばならぬといふのが、焦眉の急となつた。そして此の目

的を達すべく白羽の矢は、ほかならぬ大川平三郎氏に立つた。大川氏は明治十二年の秋渡米して、ホリヨークの紙漉工場に入場し、いろ／＼研究した結果を内地へ報告し、この報告に基づいて王子製紙では改良を企て遂にわらを原料として紙を製造することを始めた。今日でこそ改良わら半紙などは、小學生徒でも知つてゐるが、その頃はキリシタンパレンの秘法でもあるかと思つてビックリしたものである。兎んや今日のやうに木材原質から盛んに洋紙が製造されやう杯とは、素より夢にも想はなかつた。わが國は古來紙の國と稱せられ、製紙事業は殆んど千年の昔に發生し、國民は紙に對して久しきにわたる經驗を持つて居り、此の經驗あるが爲めに我が固有の日本紙は現今世界到處に最上質の紙として獨壇的名聲を擡にしてゐるのであるが、洋紙に關しては實に斯くの如く幼稚極まるものだつたのである。(東京日日新聞)

### 三、美事難局に堪へて社礎確立す

抄紙會社は明治九年頃に製紙會社と改め、明治二十六年の商法實施に際し、王子製紙株式會社と改稱したのであるが、明治十二年頃の會社の苦境時代に、會社に取つて一つの幸福な事があつた。それは明治政府に於いて地券紙の製造を製紙會社に註文された事であつて、之れは至つて性質の良



い厚い紙であつたから、製法が進歩しない時代でも漉き出しが都合よく行き、而も其の製造には政府から特典があつたから、之れが爲め會社の損失も漸次償却することが出来たのであるが、大川君が米國から歸朝して、製品の改良を實行した當時には既に地券紙の製造は一段落を告げたので、普通印刷用紙に専ら主力を注がなければならぬ様な状態になつて居つた。處で會社の生産力は明治十五年頃から大いに増加したけれども、需要の方面が之れに伴はぬので、結局生産過剰と云ふ事になり、それに外國の製品とも競争しなければならぬから製品の値下げもしなければならぬ。それで今後會社の發達を期するには、何うしても生産費をもつと低減して廉價に供給する機にしなければならぬと考へ、明治十七年に再び大川平三郎君を海外に派遣して製紙事業の状況を視察せしめた。丁度其頃は歐米に於いては木材を製紙の原料とする新方法が發明され、製紙事業に一大革新を來たさうとする時期であつたが、其の方法は嚴重に秘密にされて容易に學ぶ事が出来なかつた。大川君は非常に苦心の結果、英國に於いて其の技術を修得し、歸朝後直ちに設備に改善を加へて木材原質の製紙事業を始め、又種々の製法を折衷して、王子製紙獨特の新装置を工夫し、生産費の低減を期すると同時に生産力の増加を圖つたが、幸ひに其の成績が良好であり又一面に於いては印刷事業の發達に伴うて洋紙の需要が激増し、遂に需要家に満足を與へることが出来ないう有様となつたので、明

治二十年に資本金を増資し、工場を増設を行ひ社業は漸く其の基礎を固むるに到つたが、之れに刺戟されて明治二十年頃から製紙會社が一時に勃興し、遽に製紙額を増加するに到つた。丁度明治二十三年頃から二十五年頃迄は非常な不景氣の襲來した時代であつたので、洋紙の需要も亦減少したけれども、製紙會社の勃興に依つて生産額が増加した爲め、同業者間に盛んな競争が行はれ、紙價は釣瓶落しに下落し、一時は製紙事業界に非常な打撃を與へたけれども幸ひに此の難關を切り抜けて、我が製紙事業界は今日の隆盛を見るに到つた。我國に於ける今日の製紙事業は異狀な發展を來たし、今や其の洋紙を外國に仰ぐ必要がない計りか、反つて之れを海外に輸出するの有様であるが、其の往時を回顧すれば全く夢の様である。尙製紙事業と同時に一面に於いては印刷製本の發達を期する爲め、明治七八年頃横濱及び東京に分社を設け、印刷製本の事業を經營したが、東京の分社は最初は製紙の販賣をも兼營して星野錫君等は其の販路擴張に非常に盡力されたものである。此の印刷製本の事業に就いては猶ほ歐米に學ぶ可き點が頗る多かつたので、十分の研究をなさしむる爲めに明治十九年に星野君を米國に派遣したが、同君は三年計り滞在して研究し、歸朝後此の方面に貢獻する處頗る多かつた。



——長崎で本木昌造翁と活版印刷の研究をして居つた陽其二氏は、明治四年に横濱へ出て来て、今井關盛良氏と日本で一番最初の日刊新聞である横濱毎日新聞を拵へた。そして新聞經營の傍ら横濱本町六丁目に景締社と云ふ印刷所を設けた。現に東京實業組合聯合會長である星野錫氏が此の景締社に月給拾五圓で事務員として入社し、初めて印刷業に携はつたのは明治五年の五月で年齢十九の春であつた。此の景締社にはポルトガル人のゴードと云ふ人が先生格で、仕事の傍ら歐文タイプの組方や、ケイスの扱方其他を教へてゐたので、氏は得意廻りの閑暇を利用して植字から印刷迄の一通りの技術を修得する事が出来た。此の景締社は明治七年に王子製紙會社に買収されて其の分社となつたが、王子製紙が訴訟用紙、裁判用紙等の注文を引受けて第一銀行内に印刷所を設ける事となつた際に、星野氏は東京分社誌として東京へ歸つて來たが、此の注文は仲々莫大な數量だつたので、到底印刷機械ばかりで刷つてゐたのでは納入の期限に間に合はない。そこで色々知恵を絞つた結果、星野氏は錦繪の馬連刷といふのを考へ付いた。其の頃は錦繪等は誰も觀る人の無い時代だつたから、馬連刷の職工も糊口に窮してゐたので、早速十二三人の應募者があつた。そこでブリキ板を切つて小さなインキ練台を拵へ、手刷のロールを即製して晝夜兼行で

印刷を急いだ。そんな譯だから社員も職工も社に宿り切りで、仕事に疲れたら寢床にもぐり込み夜が明けたら直ぐ仕事に取掛るといふ有様で、寢床からは虱が這ひ出す、工場内は蠟燭とカンテラの油煙で一時間もゐたら鼻の頭が黒くなるといふ有様、おまけに今迄姫糊と水繪具を使つてゐた職人が油とインキを使ふのだから堪らない。石鹼等も買へないで手や顔はインキで化物の様になつた。此の工場こそは現在の東京印刷會社の前身であつた。

明治十年の西南戦争は非常に新聞の發達を促したと同時に、洋紙の需要も増加し、東京には王子製紙の外に、三田製紙、有恒社等が洋紙を製造してゐたが、まだ新聞社で内地製の洋紙を使ふ所は無かつた。此の頃の新聞社の工場には、文選や植字は重に祿を離れた士族の子弟が入つて來たのが多いから、羽織袴で通勤したが、印刷の方は俱里加羅紋々の純職人肌の人のみで、頑固一天張りの者が多かつた。中でも成島柳北氏の經營してゐた朝野新聞社の源公といふ印刷工場長等は全身刺青だらけで、外人經營の横濱ヘラルド新聞社で叩き上げたのを自慢に、外人直傳を振り翳して威張つて居り、工場の事は一切他人の容喙を許さぬと云ふ權幕であつた。星野錫氏は是非新聞社に内地製の洋紙を使はせようと思へ、何度も朝野新聞社へ賣り込みに行つたが、何時も此の源公が反對するといふ譯で斷られてしまつた。或る日、窮餘の一策を案じて、工場の機械を見



せて呉れと申込み、そして朝野の工場を參觀してゐる中、インキの具合が悪いので印刷が不鮮明なのを發見し、撲られるのを覺悟の上で、散々仕事をコキ下してやつた所が、源公先生何と思つたか、平常の彼に似ず、少しも怒らぬ計りか、今晚俺の家へ来て呉れとの事なので、其晩源公宅に出掛けて行くこと、意外にも御馳走した上色々印刷の話をするので、王子製紙の洋紙が品質に於いて外國製に匹敵する計りでなく、値段も安いから使つて呉れと説明した所、源公は二つ返辭で承知し、早速朝野新聞に採用される事となつた。次いで曙新聞、日々新聞、報知新聞等も使ふ様になり、星野氏の計畫はマンマと圖に當つて、それ以來新聞用紙は殆んど内地製品に限らるゝ様になつた。大正十五年の今日では東京府下に於ける印刷關係の職工だけが、ざつと三萬五千人で、紡績、織物に次ぐ大工業となり、大正十五年二月中に於ける全國新聞の使用洋紙だけでも、三千萬封度に達してゐる。時運に筈さすとは云ひ乍ら、印刷用紙の普及も何と驚く可き發展振りはないか。(東京日日新聞)

#### 四、最近の王子製紙の盛觀

王子製紙會社が其後年と共に發達して遂に今日の盛大を見るに到るまでには、幾多の變遷がある

が、明治二十三年から五年までの財界不況時代の難局を切り抜けてからは、時に財界の變動によつて一張一弛は免れなかつたけれども、大體に於いて順調の發達を來たした。殊に日清、日露兩戰役の連勝によつて國運の發展愈々急速なるに伴ひ、洋紙の需要も亦それに正比例して旺盛となつて、殊に新聞用紙の需要が益々激増して、當時國內に於ける製紙産額は到底其の需要を充たすに足らなかつた。次いで歐洲戰亂の勃發は「バルブ」の輸入を殆んど杜絶せしめ、同社の大泊工場の製品のみを以てしては、到底其の需要に應ずる能はざるの盛況を呈するに到つたのである。四圍の狀況が斯くの如くであつたから、同社に於いては或ひは資本金を増加し、或ひは各所に工場を設置し又は他會社を買収或ひは合併して今日の盛大を見るに到つた。現在同社の公稱資本金は六千九十一萬餘圓であつて、王子、十條、龜戸、都島、淀川、岩淵、伏木、小倉、苦小牧、大泊、豊原、野田、新義州の十三箇所に工場を有し、全國的に營業網を張つて居るのである。

今その重なる工場の一に就いて事業の概要を觀るに、北海道の苦小牧工場は、明治三十七年二月、日露の國交斷絶するや新聞用紙の需要が頗る激増し、到底國內に於ける生産のみにては其の需要を充たすことが出來ず、外國洋紙の輸入が滔々たる状態であつた爲め、同社に於いては生産



能力を増加して輸入を防遏するの必要を感じ、三十九年資本金を六百萬圓に増加して、地を原料材に豊富にして且つ水力の便大なる北海道にトし、東洋無比の大工場を建設した。それが即ち苦小牧工場である。同工場は四十一年に起工し、四十三年八月竣工を告げて九月より操業を開始したが、天然の形勝を占め、不凍不渴なる支笏湖の水力を利用して電氣を起し、附近の森林より産出する針葉樹を以て製紙原料となすものであつて、規模宏大、諸般の設備頗る整頓し、其の製品の優良にして且つ産額の多大なる點に於いては、眞に世界有数の製紙工場だと稱せられて居る。即ち工場用地は四萬六千八百餘坪、附屬用地百五十九萬餘坪及び附屬苗圃、植栽地二百三十三萬餘坪の廣汎なるものであり、建坪二萬九千二百餘坪である。而して蝦夷松、椴松等の針葉樹を用ゐて、新聞用紙、印刷紙、包装紙等を製造し、その一箇年の生産額は無慮二億二千五百萬圓に達して居る。尙ほ同工場にはフオドリニア式百四十二インチの抄紙機械五台を初め合計十台の抄紙機械、齊木機四十二台、蒸解罐五基を設置し、此外マガジン・グラインダー一台をも増設してゐる。是等の諸機械を運轉する爲めに電力二萬馬力、汽力三萬馬力の原動力を有するが、更に原料運搬の爲めに苦小牧より日高國佐瑠太及び支笏湖畔に至る兩線此の延長五十哩に達する輕便鐵道を敷設し、佐瑠太線に於いては兼ねて一般貨客の輸送を取扱ふため、苦小牧輕便鐵道株式會社の名

に於いて經營して居る。

更に樺太に於ける王子製紙の事業を見るに、樺太には大泊工場と豊原工場とがあり、大泊工場は大正四年王子製紙の經營になつたものである。本工場は外國製バルブの輸入を防遏し、自産自給の目的を以て創立されたもので、我國に於ける化學的バルブ工場の嚆矢であるが、工場用地は十二萬千八百餘坪にして、工場及び附屬建物の坪数は五千七百餘坪に上り、蝦夷松、椴松等の針葉樹を専用しサルファイト・バルブ（蒸解作用に依り）を主として製造してゐるが、一箇年の生産額は一萬二千噸に達してゐる。一方豊原工場は歐洲戰爭勃發以來バルブの輸入殆んど杜絶し、先に建設せる大泊工場の製品のみを以ては到底其の需要に應ずる能はざる盛況を呈するに至つたので、大正四年十二月更に紙料工場として建設したものである。工場用地は大泊工場より廣く四十一萬八千六百餘坪に上り、工場及び附屬建物坪數九千三百八十八坪に達し、原料は大泊工場と同様である。次に野田工場は大正十一年二月より操業したが、敷地三十六萬九千六百餘坪で、前二工場と同じく針葉樹を専用し、サルファイト・バルブの製造に多忙を極めてゐる。以上三つの大工場を樺太の如き先年まで人跡稀なりし地に建設した事は、我國産業發展の爲め大いに意義あると共に、樺太開發に貢獻する所甚大であると謂ふ可きである。



以上は北海道及び樺太の工場に就いて云つたのであるが、其他の地方に點在するものに就き一括して云へば、先づ東京市外王子町に在る王子工場は三工場より成る最古の工場にして、明治八年七月より操業し、本邦洋紙製造事業の先驅をなせるものにして爾來五十有餘年、本邦文化の開發に寄與する事大なるものがある。十條工場は元印刷局に於いて専ら郵便書用紙製造の爲め建設せるものを大正五年に拂下げたもので、大阪の都島工場は元帝國製紙の工場であつたが、大正五年二月買収し、爾來幾度か擴張をなし、十一年五月には和紙の抄造を試み、成績優良なるを以て其後七十二吋抄紙機械二台を其の製造に充てゝゐる。此の外淀川工場、伏木工場、小倉工場及び朝鮮工場等があるが、中でも朝鮮工場は一箇年の生産高一萬五千餘噸に上り、原料は朝鮮の山林に無盡に藏されてゐる唐檜、樅等の針葉樹である。以上簡單に王子製紙の業態を述べたが、是等の一斑によつても分る様に、全國に亘り工場網を設け、國家的に製紙の需要に貢獻しつゝあるが、其の創業に邁れば同社の今日あるは實に澁澤子爵の賜であると謂はなければならぬ。(編者)

## 二八、交通運輸事業と損害保険

### 一、蜂須賀侯に獎めらる

我國に於ける鐵道事業は、東京横濱間の官設鐵道が其の嚆矢であつた。此の線路の開通したのは明治五年九月であるが、丁度私が大藏省に奉職中であつたので、當時の大藏卿大隈重信侯等と一緒に鐵道敷設に就いて直接關係し、殊に反對が盛んであつた際に於いて、之れに對する辯明や鐵道事業の有利である事を宣傳する爲めに少からず骨を折つたものである。處が私が民間に下つてから、圖らずも我國最初の私設鐵道に關係する様になつた。明治の初年の事であるが、蜂須賀侯爵が英國に留學して、鐵道の便利で且つ必要である事を痛感して、遙かに書を寄せて華族諸氏に鐵道敷設の業を起す事を勸めて來た。之れが動機となつて、池田、伊達、松平其他の諸華族が鐵道會社を起す計畫を立て、明治八年に東京鐵道會社といふものが組織せらるゝ事となつた。最初の計畫では、東京青森間の鐵道を敷設する目的であつたが、併し之れには非常に多額の資本を要し、實行が頗る困難であると云ふので、一時此の計畫は停頓の形ちとなつたが、更に東京福岡間に鐵道を敷設する事



に變更し、其後又區間を短少して東京宇都宮間と云ふ事になつた。

此の鐵道會社の計畫に當つて私は萬事の相談を受け、専門技師をして其間の調査等をさせたのであるが、井上馨侯が此の計畫に就いて種々配慮せられ、新たに鐵道を敷設する事は頗る結構であるけれども、利益を擧げる迄には相當の年限を要するであらうし、それよりは現在運轉して居る東京横濱間の官設鐵道を拂下げて經營し、漸次線路を延長する様にした方が宜しくはないかと云ふ忠告があつたので、急に最初の計畫を變更して、同八年の六月に官設鐵道の拂下げを受けて、之れを経營しようとする事に相談が纏つた。其際私は鐵道拂下、營業の事を萬事委託されたので、鐵道拂下組合といふものを組織し、私は其の總代として其衝に當つたのであるが、此の組合に加入した華族は二十一人であつたと記憶する。一切の事を委託されたのであるから、私は前島密氏其他の助力に依つて調査研究を進め、又將來の經營に關する具體的方法を案出し、政府に對して官設鐵道拂下げの願書を提出した處が、幸ひに其の願ひが聽届けられ、翌九年七月三十萬圓を以て拂下げらるる事となつた。而も政府に於いては華族の保護をなす意味で、七箇年賦で上納する事を聽届け、完納すると同時に鐵道の一切を引渡す代りに、其間の上納金に對しては一箇年七分の利息を附すると云ふ様な特典をも與へられた。

拂下げの事が都合よく進んだので、其年の暮に築地精養軒に於いて盛大な祝賀の會を催したが、明治九年に政府が華士族の金祿を公債として整理する爲め、金祿公債證書條例を制定し、其の結果華族の金祿は公債に變じた爲め、華族の收入に影響を及ぼし、それが直接の原因となつて、政府に上納する年賦金の支拂ひに困難を生じ、遂に拂下げ中止の議論を生ずるに到つた。私をして言はしむれば、拂下代金は三百十萬圓で七箇年賦の上納であるから、如何に進歩しない當時の經濟狀態でも之れを繼續する事が出来ない筈はないと考へ、更に「現在でも政府に於いて利益を擧げて居るのだから、民業に移して一層經營を合理的にすれば、より以上の利益を擧げる事が出来、頗る有望な事業である」と云うて華族諸氏に説いたけれども、結局私の意見は用ゐられずして組合解散説が有力となつた。それで私は更に鐵道拂下げを繼續する三つの方法を考案し、其中の何れか一つを實行して最初の目的を貫徹する様に熱心に勧めたけれども、遂に力及ばず明治十年の暮組合華族から京濱間の鐵道拂下契約を取消した。斯くて既に納めてある四十餘萬圓の年賦金の還付を出願し、翌年春に鐵道拂下組合を解散してしまつた。右のやうな次第で、折角初聲を擧げた日本最初の私設鐵道計畫も、煙の様に消えてしまつたのである。



澁澤子爵が政府當局と結ばれた鐵道拂下契約の取消を惜み、其の利害得失を切論された要旨が、青淵先生六十年史に掲載されてあるから、左に之れを摘録する。(編者)

此の鐵道の約束を履行すると否らざるとによりて、各位貴族の名聲に關する所は既に前回略陳し其際また池田從二位君の述ぶる所ありて、各位は既に之を了知せられたりと思惟するにつき、今更に之を喋々するを須ひず。然り而して此の鐵道將來の損益を按算するに、曩日卿の演説するが如く、其初官築に係るを以て構造素より壯大に過ぎ、其費途も亦工事に超ゆる所あるに似たり。是故に目下の工事の損益上より論するときは、十分の鴻利に當らずと雖も、各位創意の係由する青森迄の新築事業に反省し、而して其鴻利を謀慮するときは固より當時の按算よりは、其贏餘を見るを得べし。且つ夫れ今日より之を思想するに、鐵道事業の如きは決して人民社會に於て新創の舉あらんとするは、之を十年以内に期せざるべし。然る時は縱令新創の工事此の鐵道の價額よりは更に廉なるを得るあるも、其賃錢の低價に出でて相競ふの憂なかるべし。故に此の鐵道や依然獨殊の大業を執り以て賃錢も折すべからず、乗客も減すべからざること蓋し懸鏡の見たりと思はる。且此の鐵道に於て毎月収入の額は已に新聞紙上に徴する所あり、他日此の組合の有に歸

するときは、更に其費用を減じ却て物貨運輸の方法を増し、俊秀の人材を擧げ大に雄圖する所あれば、則元金に對して年一割の純益を得べきは蓋し容易の策と謂ふべくして、我邦無類の不動産を占有すべきことは又論を俟たざるべし。今夫れ資産の確實なるものは政府の公債證書を以て首唱とす。而して本年の當り關の如き、九月初旬に於て其金額を下付すべくして未だ之を拂はず。故に若し不幸にして將來政府會計の困難に際することあらば、其抽籤法に於ても、或は其期を延滞するの恐なきを保せず。是れ實に動産と不動産と異なる所以にして、而して泰西各國の重んずる所以なり。嗚呼各位は嘗て先見を有し以て長策に従事す。是榮一が公私の爲めに感激歎美して各位の委任を快諾し、昨春以來茲に努力を竭す所なりき。爾來各位は益々其英志を固くし、數回の會合を経、政府の特典を得て八月五日政府と約を修むるに到り、已に美名を内外に馳せ、専ら光榮を荷へり。而して未だ其墨汁の乾かざるに當り、家祿制度の公布によりて忽ち其素志を失し、未だ自家會計の已むを得ざる所あるに推算するに違あらずして、頓に訂盟の保毀に關係せんことを論柄に到らんとするは、榮一が深く痛惜する所なり。希くは今回動論の各位精を勵まし、力を養ひ前を鑑み後を慮り、而して事を中道に廢し名を内外に汚し、他日噬臍の悔なからんことを欲し敢て茲に忠告す。



私の力が足らなかつた爲めか、鐵道拂下組合は遂に解散するの止むなきに到つたが、其際政府から還付さる可き四十餘萬圓の金は、西南戦争の後を受けて財政が困難であつたのと、一面に於いて還付金を利用して華族に有益な事業を興さしめたいと云ふ考へがあつた爲めに、組合華族に對しては財政困難であるから直ちに納入金を還付する事が出来ない旨を答へ、併せて此金を還付した際には共同して一つの事業を興すが可いと勸告した。そこで組合華族は何んな事業に此金を使用したら可からうかと云ふので、又もや私に相談があつたので、私は保險事業其他二三の目論見を立て、之れに答へた處、政府に於いても保險會社の必要を認めて居つた際だつたので、組合華族の諸氏は海上保險會社を設立する事となり、其の一切の事務を私に委託せられた。保險の事に就いては別に申述べるが、謂はゞ鐵道會社變じて保險會社となつた譯で、而も此時生まれた東京海上保險會社は我國保險會社の發端であつた。

## 二、日本鐵道の創立と其後の發達

東京鐵道會社は到頭中途で解散してしまつたが、明治十四年に日本鐵道會社が生まれた。此の鐵

道會社は東京から青森に鐵道を敷設する目的で創立されたものであるが、私も亦發起人の一人として創立に従事し、創立後は其の經營に關與し、明治三十九年に鐵道が國有となる迄關係して居つた。政府に於いて京濱間の鐵道を敷設する際には沿線の住民が反對し、一揆騒動の様な騒ぎまで演じた程であるが、日本鐵道の事業創始時代には餘程時代が進んで來て居つたので、それほどの騒ぎを演ずる程の事はなかつたけれども、而も沿線住民の反對は到る所に起り、土地買収に就いては頗る頭腦を悩ましたものである。停車場の位置等に就いても會社の豫定した土地に反對が起つたり、猛烈な反對の爲めに豫定線路を變更しなければならぬ様な困難にも遭遇し、會社當局の苦心は一通りでなかつたが、幸ひに事業は着々として進行し、貨客運輸事業の外に車輛の製造工場を經營し、其後漸次事業を擴張して日本第一の鐵道會社となるに到つた。

鐵道事業に就いては此の會社を初めとし、其後北海道炭礦鐵道、九州鐵道、筑豊鐵道、日光鐵道等其他國內に於ける二十餘の鐵道會社の創立並びに經營に關係したが、日清戦後臺灣が我が領土に歸するや、臺灣鐵道會社を計畫して新領土の開發に資せんとした。之れは不幸にして財界不況の爲め成立するに到らず、結局官營で鐵道の敷設をなす事となり私共の計畫は失敗に歸した。併し其後朝鮮に於ける鐵道敷設を計畫し、之れに就いては既に述べた通り政府の保護もあり、豫期通り事業



を進行して朝鮮開發の上に多少の貢獻をした積りである。殊に此の鐵道が敷設せられた爲めに、日露戰爭の勃發に際しては、軍事上頗る重大な役目を演じた事は私の私に自ら慰めてゐる處である。

——濫澤子は明治初年に我が海運業の產婆役をやつたが、同時に鐵道業の發達に貢獻した點も大きい。明治初年に蜂須賀小六の末裔である舊徳島藩主蜂須賀茂韶氏が英國に留學し、すつかり向ふの鐵道發達に感心し、遠く故國の友人に書を寄せて鐵道企業の急務を勧めたものだ。折柄御領地を召し上げられて失職中の殿様連は、直ちに愆の皮をのべて之に賛成し、伊達從二位宗城を筆頭に二十一人の華族が東京鐵道會社なるものを興し、濫澤榮一子之が實務に當ることとなつた。初めは東京青森間の鐵道敷設の計畫であつたが、それよりも現在の横濱東京間の官設鐵道を拂下げて貰つた方が手取り早く儲かると云ふことになつて、明治九年に三百萬圓で拂下げの願ひが叶つた。斯く官設鐵道を拂下げたのは、失職中の殿様連を誘導し、我國殖産興業の發展に資せしめんといふ有難い御趣旨に基いたものである。次で明治十四年には日本鐵道を興し、四十一年の鐵道國有まで之に關與し、明治二十二年には徳川義禮、奈良原繁、森岡昌純、原六郎の連中と北海道炭礦鐵道を創立し、それから曰く九州鐵道、曰く筑豊鐵道、曰く水戸鐵道、曰く參宮鐵道と日本内

地の鐵道の大部分に關係したばかりでなく、遠く朝鮮に手を延ばして明治三十二年には京仁鐵道、次で京釜鐵道の創立に當つた。斯う數へ立てたら、濫澤子が創立に關係した鐵道は、右に擧げた外に二十近くもあつて、とても其の煩に堪へない程である。(時事新報)

京濱間に初めて鐵道が敷設せられた當時には、政府部内にも反對があり、殊に民間の反對は頗る盛んで無智な地主や、鐵道の敷設に依つて直接の影響を受ける舊街道の旅籠屋や馬車曳、人力車夫などの連中は、吾々の死活問題であるといふので最も猛烈に反對運動をなし、果ては無法千萬にも試験的に架けた京濱間の電線を切斷するやら、電柱を倒すやら、おまけに工事を妨害する爲めに監督の役人を襲ふといふ様な暴動騒ぎまで演じた程であるが、それでも是等の困難と闘ひつゝ鐵道工事は着々進められ、明治五年九月十二日に開通式が行はれた。此の開通式には長くも明治大帝陛下が御臨幸遊ばされたが、當日の市中は恰もお祭り騒ぎの様な股賑を呈した。何しろ鐵の重い道を重い火の車が恐ろしい速さで走るなどは人間業でないから、魔術を使ふに相違あるまいといふ汽車に對する好奇心と、之れまでは將軍様でさへ見ることが出来なかつたのに引換へ、當日は畏れ多くも一天萬乘の陛下の御顔が拜めるといふので、御道筋はいふに及ばず、驛の内外の雜沓はお話の外で



街中は繪行燈とはゞぎ提灯の不夜城を現はし、其中を山車や馬鹿囃で賑はしく練り廻り、見物の機噺が落ちて數多の怪我人を出した程である。それが今日では國有鐵道が七千數百哩、地方鐵道が約三千哩、此外軌道が約千五百哩合計一萬二千餘哩に達し、全國津々浦々に至るまで鐵道の通じてゐない地方がないと云ふまでに進んでゐるのであるから、全く隔世の感がある。往年四方八方から非難攻撃された鐵道事業が是程の發達を遂げやうとは、恐らく當時の人は誰しも想像だにしなければなかつた處であらう。

### 三、我國海上保險の第一聲

華族の有志に依つて計畫された東京鐵道會社が中途で解散する事となつてから、一轉して保險會社を興す事となつた事は前に申述べた如くであるが、明治十一年七月に海上保險會社設立並びに鐵道拂下代價上納金還付の事を出願し、一方三菱に交渉して此の計畫に賛成を求め、其年の暮に資本金六十萬圓を以て東京海上保險會社が設立せられた。之れが日本に於ける保險事業の嚆矢である。尤も此の以前に第一國立銀行に於いては、海上請合といふ制度を設け、丁度保險の様な仕事をやつて居つたのであるけれども、保險といふものは何ういふ性質のものであるか殆んど世間に知られな

かつたので、其の新規事業を興すに就いては聊か冒險の氣味がないでもなかつた。併し株金を一般から募集するといふ譯でなく、華族有志に對する償還金が主であり、之れに三菱其他少數の人が參加した丈けであるから、株金募集に對して腐心する様な事はなかつた。當時公にされた創立趣意書は左の如くである。

#### 海上保險會社創立要旨

夫れ保險とは他人に屬する危險を擔保するの義にして、體面より之を見れば頗る危道を趨るの業務たるが如しと雖も、實際に就て之を察すれば決して然らざる所以のものあり。凡そ類例によりて事物を推測せば中らずと云ふことも甚だ遠からず。而して其類例愈々多き時は其推測も亦愈々精しきを得べし。今夫れ一艘の船を以て一回の航海に當り、之が危險の有無を測るは決して爲し難き事なりと雖も、若し數十艘の船をして數百回の航海に就て其危險を推測せば何百分の幾何を按算し得べきなり。

故に此の保險の業は前の理由に據りて其推測を明にし、正確の規畫を設け適當の限度を定めて以て其保險料を收入するに於ては、縱令一時或は危險に遭遇して非常に損耗を來たす事あることも、持久の後は終に平準の計算に歸し、推測の按算に達するは亦疑を容れざる所なり。



然り而して此の保險の業たる、以て經濟の根理に適し、以て商賣の隆盛を贊するは固より喋々を俟たずと雖も、試に今一例を擧げんには今日東京にある三陸米の價值を壹石に付五圓七拾錢とし、三陸地方に於ては四圓八拾錢とせば、其間九拾錢の差を有す。而して其運搬の要費と資本と利息とを七拾五錢とせば、差引拾五錢の利益を得べきものとす。然れども其航海中の危険あるを以て、苟も確實を貴ぶの商估は多くは此等の販賣に従事せざるべし。是れ東京三陸共に其商業を凝滞せしむるものにして、而して各地の物價常に其平準を得ざるの原因は職として之に由れり。一旦此の保險の業を開設する者あるに於ては、其物貨の運搬に際して之が危険を顧慮するを要せざるを以て、各地の商況豁然として其面目を改め、價值相比しく有無相通じて更に其業務を増加し、運搬を頻繁ならしむるは、昭々乎として猶ほ火を暗るが如くなれば、今此の保險の業を以て經濟の根理に適し、商賣の隆盛を贊すると爲すは敢て誣言にあらざるなり。

論理實効夫れ斯の如くにして、而して此の保險の業の今日に至りて未だ其設立を得ざるは、是他なし其事務の常に法律に交渉し、其營業の規畫も亦尋常商會の如く然るを得ざるを以て之に訓練する者少きと、且我邦の商估は各其資本に乏しきと及び汽船會社の設立整理せざりしとに因つてなり。

今や郵船會社は既に三菱のあるありては規則は全く整頓し、其船舶は實に堅牢なり。而して汽船又は風帆船の航路も大抵其定限を設けて、緊要の諸港に達するを得、且官亦此の保險の業の創設を企圖し、以て其制規を調理せらると云へり。是れ乃ち千歳の一時にして、實に保險業を建創するの運に際せり。幸に華族各位に於て曾て鐵道組合の爲めに募集したる資本を以て、此の海上保險會社設立の事を決せば、前に所謂二三の難事は一朝併て之を除却し、以て眞成の商業を振作して各地の有無を通暢するを得べし。然らば則獨り該業の率先者として其名譽と利益とを併有するのみならずして、大に全國の公益を裨補するを得べし、豈愉快ならずや。云々

東京海上保險會社は、此のやうに華族有志が株主となつて創立せられたもので、十一年の暮に設立認可を得、資本金六十萬圓を以て開業した。何分新しい仕事であるから、之れを保護して發達を期する爲めに、其後若し會社が資本に缺損を生じた場合は、政府は四十萬圓まで其の損失を負擔するといふ大特典を與へられた。此の事業は幸ひに漸次發達し、明治二十三年頃には頗る隆盛となつたが、其後海外代理店に於いて巨額の損失を生じた爲め、一時會社は悲境に陥るに到つた。それで明治二十九年以來極力整理建直しに努めて營業方針を確立し、其後迂餘曲折があつたけれども、



兎も角蹉跌することなく、逐年發達して今日の大海上保險會社たるに到つた。東京海上に次いで二十六年に帝國、二十九年に日本、四十年に神戸海上といふ風に、海上保險會社が續出し、多數の中には半途で挫折したものも尠くないが、現在海上保險會社は三十六社を算し、毎年の保險料收入二千萬圓に達するに到つては、又盛んなりと謂ふ可きである。

——何がさて明治初年の創業時代には士族の商法と笑はれ、公卿の前垂と嘲けられたのは是非もなく、明治九年に京濱間を、のたり／＼とのたくつた汽車の、鐵道拂下げを目的の公卿大名二十人の鐵道拂下組合が出来たが、そこは俄か前垂の悲しさで、金祿公債値下がりのために、拂下げの年賦金が不拂ひとなつて、思惑が脱れたもの、金祿公債を運用するの途を知らないので、前垂をかけて途方に暮れた處へ、澁澤榮一などの發案で没落した鐵道拂下組合に持ちかけたのが海上保險事業で、之れが東京海上を産み出す動機だったのである。明治十一年五月に第一回協議會を開き、十二年八月一日から營業を始めたが、それまでは第一國立銀行で「海上請合」といふ名で保險の眞似ごとの様なことをしてゐたほど、左様に幼稚だったのであるから、三井の一番頭たる益田孝君の令弟で、判事から東京海上の支配人に乗り替へた益田克徳君が、苦心慘澹して翻

譯した術語も最初は「海商保險」と命名された程である。當時澁澤子の書き下した資本金五十萬圓の目論見を見ると、公債利子四萬五百圓、當座利子八百圓、保險收入三萬二千四百六十三圓計七萬三千七百六十三圓（以上利益）、月給雜費六千六百圓、代理店費用二千六百四十四圓、保險支拂一萬四千二百十二圓計二萬二千九百七十六圓（以上損失）となつて居るが、現在東京海上の株價が拂込金の二百倍にもなつてゐるのに想到すれば、同社の株主である蜂須賀、一條、伊達、山内、前田、久松、井伊、松平などの華族さん達は、大に澁澤子等に感謝しなければならぬだらう。

（東京日日新聞）

#### 四、火災保險業の創始時代

我國に生命保險の事業が營まれる様になつたのは、東京海上保險が創立されてから間もなくの事であつて、確か明治十四五年頃の事である。明治生命が即ちそれで、私は此の事業には關係しなかつたが、阿部泰藏氏が之れが經營の衝に當つた。火災保險會社の創立されたのはそれから餘程後のことで、明治二十四五年頃に之れも亦阿部氏によつて創始されたのであるが、此の火災保險に就いては私も其の相談に與つた。阿部氏は火災保險事業の必要を痛感して熱心に其の計畫を進めたのであ



るが、何分日本は歐米の如き耐火建築と異つて、大抵は木造であるから、其の危険率は到底歐米の比でない。従つて保険料も餘程高くしなければならぬし、且つ危険率が多いだけに資本金も巨額を要する。そんな譯で營利事業としては經營の見込みが困難で、謂はゞ非常な冒險と謂はなければならぬ。されば此の事業を計畫しても資本家を得ることは頗る困難であることは明かであつた。阿部氏は其の至難な事業である事を承知の上で計畫を進めたのであるが、最初から會社組織とする事は殆んど不可能であつたので、火災保險會といふものを興して會員を募り、會員中に火災に罹つた人がある際には、會員が共同して之れを負擔するといふ制度とした。私は至極結構な企てである考へたので、早速其の會員となつたのであるが、其後の實際を見るに存外成績がよかつたものであるから、遂に之れを株式組織に改むるの機運に到達した。之れが明治火災保險會社の濫觴であつて、私も前の緣故によつて亦株主となつたのである。生命保險や火災保險も今日では大いに進歩して、歐米先進國に比しても遜色なきまでに到つたが、それにつけても創業者の苦心を忘れてはならぬと思ふ。

——火災保險を日本に移入したのは、政府顧問のドイツ人故バウル・マイエツト氏であつたが、

明治二十一年十月に東京火災を皮切りに、二十四年に明治、二十六年に日本、三十年に横濱火災の順序で、形だけは兎も角出來上つた。其の時代の話であるが、横須賀の大火——大火といつても五百戸焼失したに過ぎぬが——で、火災保險の損害が五萬圓に上つたといふので、東京火災が破産に瀕した嘘のやうな事實がある。さうかと思ふと明治二十五年四月一日の神田の大火で、明治火災が二萬五千圓の保險金を支拂ふと、不思議な會社が出來たとあつて、神田ッ兒が膽ッ玉をひつくり返したり、阿部泰藏翁が火災保險宣傳のために關西に出かけた際、西宮の酒倉が焼け落ちたお蔭で、『保險は便利なものや』と感心させたのもその時代の事だ。是等の先覺の苦心は全くなみなみならぬものがあつた。之れも二十五年頃のことであるが、當時耐火式の煉瓦建てといへば、東京市街には指を屈する程であつたが、向島に鐘紡の煉瓦工場が出來て、明治火災に保險契約を申込んで來た。早速阿部泰藏、原錦吾の兩氏が建物検分に出かけて、朝吹、武藤、和田の三氏と交渉を開いたが、肝腎の火保側の兩氏はそこで初めて電燈なるものを拜見した始末だから、料率など見當がつかない。首をひねつた揚句、電氣技師のヒーリング氏といふのを探し出して來て検査をさせた處、電燈設備はゼロで、漏電の危険率は百分だとの話に、朝吹氏が青くなり、やつと電線を取り替へて保険料金千分の十七半で契約が出來たといふ珍事もある。(東京日日新聞)



## 二九、貿易の發達と機業

### 一、木棉物の輸入激增す

綿業が今日如何に盛んになつて居るか云ふことは、現況を心得ぬ私には述べることも出来ないが、私は日本に於いて紡績織布の事業が歐羅巴式に成立つた昔を聊か心得て居るのである。併し是れは所謂綿業中の一部であるけれども、而も重要な事柄であると考へるので、其の日本に起つた有様は斯様であつたと云ふ事を申上げて御参考に供したいと思ふ。

よく昔の政治家は儉約の貴さを知らせる時には必ず綿服と云ふことを言うて居る。是れはもう寛政の頃に白河樂翁(松平定信)もさう云ふ制度を布かれて居り、天保の頃に水野越前守もさう云ふ制度を布かれた。日本に木棉の衣服が特に重要である事は争へぬ事實であるが、日本に木棉の衣服の傳はつた次第は如何であつたかと云ふと、年を老つた方は多少記憶に残つてゐる通り、日本の從來の姿は随分いかゞはしい有様で、或ひは技術工藝とは言ひ兼ねる様な姿で木棉が衣服に供用されたのである。或ひは河内木棉とか、姫路晒とか幾多商品として取扱はれたものもあるけれども、大抵

の糸を紡出すのは、所謂糸車でお婆さんとか、子供とか大凡其家の婦人は多くは糸車でピン／＼と紡出して之れを織つて反物にし、或ひは黒いもの若しくは白いものなど好みに應じて拵へて供用された。即ち木棉の有様は先づ概してさう云ふ姿であつたが、これが昔の紡績に就いての全體の状況である。而して絹物を用ゐるのが贅澤だと云ふことから木棉物を用ゐやうと云ふので、日本の或る儉約を唱へた政治家が此の木棉物の使用を奨励して、絹物の使用を排斥したと云ふことは前に陳べた通りである。

大體に於いて斯う云ふ姿であつたから、此の木棉即ち棉の反物を造ると云ふことは、随分と億劫の風であつて、而も片手間に婆さん、娘さんが糸を紡出してやつて居るのであるから完全に行く筈はない。併し木棉は至つて安く賣買され、又其の木棉も極く簡易なる方法に依つて製作されたのである。遠州若くは大阪最寄、又關東では野州の古河などと云ふ所が棉を色々紡いだものであるが、何れの地方でも餘り棉が多く出來たとは言はれぬ様である。故に日本の木棉の範圍は實に小さいものだつた。併し私が當時木棉の商賣をした譯でないから私の知り方は一斑であつて、まだ其外に木棉物の範圍は廣かつたかも知れないが、先づ自身が聞取つた處は概略そんなものである。貿易が開けて以來追々に葡萄牙若くは印度から木棉が輸入されたのであるが、前に申上げた様に



日本では娘や年老のやつた紡出糸が割合に安く買はれた爲めに、大いに進んで来ると云ふ傾向は其の當時にはなかつた様である。私の記憶に依ると明治十二三年頃は木棉物の輸入が俄に長足の進歩をなしたやうである。併し是れも亦私が當業者でなかつたから、多少調査の届かぬ事もあるが、心覚えであるから、間違つた處もあるかも知れぬ。是れより先き歐羅巴の木棉製造法を日本に移したいと考へて、ゴング式木棉製造法を工夫した人は多少はあつた。鹿兒島藩主の島津齊彬と云ふ御維新の少し前に逝去された殿様が、大分此の事業に力を入れられ、鹿兒島藩で歐羅巴式紡績の方法を採用されたが、是れは何れの工場での位の仕組であつたか細かの事は知らないけれども、確に此の事業に寄與されたのである。それから東京に於いては鹿島萬兵衛と云ふ人が玉川の用水に依つて水車動力を以て小さい經營を始めた。私の存じて居る處では是等が歐羅巴の仕組の紡績に着手された濫觴だと思ふ。それは寧ろ明治十二年頃より前であつたと思はれる。明治十二三年頃に木棉が何故左様に多く輸入されたかと云ふと、それは簡單に木棉ばかりではなかつた様で、或ひはメリンスも、羅紗も總てさういふ織物が大いに輸入されたやうであるが其の輸入した原因は、明治十年の西南戦争が其の當時の經濟界に取つて大なる變動を來し、あの歐洲戰亂當時の如くさう烈しくはなかつたが、種々なる方面に於いて直接關係した事柄故に却々異常な狀況を起したのである。船舶に對

し若しくは普通の貨物に對して總て戦争の影響が甚だしく及んで來、且つ政府は別に澤山の準備を有つて居ると云ふ譯ではなかつたから、餘儀なく不換紙幣即ち太政官札を造り出したもので、それを以て漸く西南戦争の一時の急を凌いだ。そこで通貨がズツ膨脹した、而して經濟の法則上通貨が膨脹すれば、諸物價は高くなるのは當然である。兎に角明治十年頃の歴史では、此の物價の騰貴が總ての方面に影響を及ぼしたが、木棉に最も強く影響したのである。木棉物と申してもそれは單に金巾ばかりでなかつたらうと思ふ。従つて紡績糸も輸入されたらうし、更紗も輸入されたらうし其他種々なる木棉物が大分盛んに輸入せられたのである。

私がそれに氣の付いたのは、丁度其の當時第一銀行の頭取をして居つた頃であつたから、荷爲替の事を私が取扱つてゐたからである。後には貿易が多く神戸に移つたけれども、まだ其頃は神戸よりは横濱の方で多く取扱つたのであつた。横濱に入つた荷物が當時の所謂上方方面に行くのには、多く荷爲替であつたのである。而して此の取扱ひは總て第一銀行でやつたのではなかつたが、多く第一銀行が取扱つた爲めに、木棉の産額に就いて實際懸念せねばならぬ程度に見受けたのである。段々其の事情を調べて見ると日本の從來の姑息な手段で拵へる品物よりは、印度から來る品物は品がよくつて價格が安いから、是れは勢ひ段々入つて來るに相違ない。此處に於いて私は勿論其の當



時の經濟の心得ある人々は是れは由々しき大事だ、何うにかせねばならぬと云ふ感じを惹起したのである。

應て明治十四年に農商務省が出来、多分其年だつたと思ふが、品川彌二郎氏が農商務次官になつて、農商務省の事に就いては大分力を盡されたが、此人が段々貨物が輸入されて来るに就いて憂慮され、同時に松方公も其頃大藏卿をして居られて等しく木棉物輸入に付いて憂慮されたのである。民間に於いては私などが木棉に對して何とかせねばなるまいと憂慮した一人であるが、當時今の大倉喜八郎氏も同じ考へを持つてゐた。今日の如く木棉に就いて事情が明かになつて居なかつたから、『何でも歐羅巴では其の動力の仕組が違ふさうだ、蒸氣に依つて之れを働かせる方法があるさうだ、どうだ日本でもさう云ふ仕組をしようぢやないか』と云ふ考へを有つたが、如何したら宜からうかと云ふ事に就いては、唯何とかしなければならぬと云ふ漠然たる考へに止まつてゐたのである。確かそれは明治十三年から十四年に掛けてのことであつたと思ふ。

## 二、紡績事業發達の起點

前に申した通り、日本の名宰相達が皆儉約を論じて、木棉を以て衣服を作れと言つたのであるが、

其の木棉が斯くの如く海外から輸入されると云ふ有様では、どうも頗る危険な話である。どうかして日本で木棉の製造を爲し得る様にしたと考へた。けれども其時は棉が何處で出来るのか、棉はどう云ふ種類に如何にするかと云ふ研究は付いて居らず、先づ木棉だけは目に着くが其の原料に就いては、何人も是れを知つて居る人はなかつた。所謂鹿を追ふ獵師山を見ざる次第で誠に空漠たる考へであつたと申しても過言ではなからうと思ふ。

處で茲に大阪の三軒家に紡績會社を立てようと思ふことになつたのであるが、其頃は却々資本を集めるのに骨が折れたのである。此の取引關係の交際をしたのは、薩摩治兵衛、杉村甚兵衛、堀越角次郎と云ふ方々で、柿沼谷藏氏は商業會議所の關係で御目に掛つた。其時私はどうしても木棉の事業を日本に起して見たい、是れは會社にしなければならぬが、會社にする時貴方は株主になつて貰ひたいと云ふ事を交渉した處が、柿沼氏や薩摩治兵衛氏が承諾して始めたのである。是ればかりでなく一つの財源があつた。それは又變つた方面からであつて、昔の御大名即ち華族さんの資本が十數萬圓加はつたのである。なぜ華族さんから資本が出るやうになつたかは、前に鐵道の發達を述べた際に申した如く、東京鐵道會社が政府と契約して年賦金を納めて鐵道の拂下げを受けつゝあつた。而して明治七年から九年頃までズツと引續いて其金を納めたが、九年であつたか、十年であ



つたか、岩倉公が頻りに十五銀行の創立を主張せられたに就いて、此の鐵道問題が破れたのである。即ち十五銀行の資本を華族が出さなければならぬと云ふので、鐵道にも出し、十五銀行にも出すと云ふのでは金がない。岩倉公の説は鐵道の説よりも勢力が強かつたので、岩倉公の説が勝利を制して愈々十五銀行を造ることゝなつて、東京横濱の鐵道の方は破れたのである。丁度四年間七回拂込んで百四十幾萬圓かを政府に納めて其の契約は破れたので、此の拂込んだ金を政府から取戻すと云ふことになつた。

そこで私は『貴方は皇室の藩屏と云ふ處から、大いに事業を企て、やらうと云ふのであつたが、折角の横濱の鐵道が破れた以上は、何か皇室の藩屏たる事業に就いて、經濟界を援けて行く事があるではありませぬか』と云つて、明治十一年頃海上保險會社の設立を御勧めした處が、華族達は同意されて右の資本の一部を此方に入れられたので、其の残つた一部分を紡績に御入札を願つたのである。即ち大阪の三軒家の紡績會社に華族の資本が入つたと云ふのは是れがためである。柿沼さん達は之れに賛成されて紡績會社が成立つた。丁度資本金は二十八萬圓と記憶して居る。漸くそれに依つて一つの事業を起さうと云ふのであるが、是れからどうしたら宜いか途が付けば宜いので、動力は何を探るかと思ふ事になつた。そこで心配なのは此の事業を發起するのは宜いが、會社を造つ

ても紡績が出来ぬやうでは満足な仕事は出来ぬのであるから、今申し薩摩治兵衛氏や柿沼さんに色々鍾數などを伺つたのであるが、一萬鍾なければ計算が採れぬと云ふのであつた。然るに前に申した鹿島氏の經營に就いては、先きに倫敦に派遣された山邊丈夫氏の友達に津田と云ふ英語のよく出来る人があつたが、此人は海上保險會社の外國係の方に働いて居つた一人である。此の津田と云ふ人は、是れまで會社の事には經驗がなく、普通の學問でやつて来て居るけれども却々氣性のしつかりした人である。之れに勸めて紡績をやらせたら如何であらうかと山邊丈夫氏が薦められた。私は未だ會はない人ではあるけれども、學友の推薦に依つて同意して、少しは亂暴であつたが電報に依つて當人の意嚮を聞いて見た處が、異存はないと云ふことであつたから、英吉利に居て英人の當業者を雇入れて學ぶ研究費として千五百圓を出すことにした。其の當時千五百圓と云へば大したもので、清水の舞台から飛降りたやうに思はれたのであるが、束脩を百五十磅出して勉強して會社の方に歸つて來た。茲に於いて愈々本當に大阪の紡績會社が成立した譯である。

それから開業したのが十五、六年頃であつた。之れが日本に是迄なかつた會社組織の紡績事業が成立つた最初である。併し其前に政府で紡績事業を奨励すると云ふので、二千鍾づつ政府の費用で機業家にやらせた事がある。今は故人となつた四日市の伊藤傳七と云ふ人が川島に居つて、此人が



堺で一箇所、川島で三箇所會社を造つたが、是れはあまり小さいものであつたから、大きな事業にはならなかつたやうである。現に他の場所は私が關係しないが、合計二千鍾上げた伊藤傳七氏は其後それらを皆合併して三重紡績會社と云ふものにしたのである。其時に私が世話をして一萬四、五千鍾の會社に引直し、それが段々進んで其後に大阪紡績と三重紡績とは合併して東洋紡績となり、今日は五十萬鍾、織機台數も三萬台であるが、日本の紡績事業の最初の起りは大體以上の様な有様であつた。

——青淵先生は紡績業に就て大に着目する所あり。明治十二年の交、益田孝、大倉喜八郎と謀り、山邊丈夫を英國に派遣し紡績業を研究せしめたり。後ち終に大阪紡績會社、三重紡績會社を創設し事業の盛大を極めたり。此の二會社の工業を模範として全国各地數多の紡績會社の設立を見るに到れり。

先生の計畫は毫も政府の保護を仰がず、自營の計算を立て以て後進の會社に依るべきの範を示せり。而して最初何人も我邦の棉花は紡績の原料に適するものと信じ、其産地を目的地に工場を開設したるも、先生は速に内國産棉花の原料に適せざるを覺り、人を派して支那、印度其他東洋諸邦

の棉花を調査せしめ、之が輸入の途を開き、終には米國産棉花をも使用するに到れり。故に工場的位置の如き、なるべく職工募集、石炭及原料製品運搬の便を考へて撰定せり。又綿糸綿布の如き需要廣き物品は工場を大仕掛にして工費を省くを利ありとするを以て、我邦に於ては未だ經驗淺き事業たるにも拘らず、充分前途の見込を定め大膽に工場の装置を廣大にしたり。故に大阪紡績三重紡績の如き皆全國第一の工場を有せり。又紡績業は極めて利益に不同あり、又火災の虞多きを以て最初より配當の多きを貪らず、なるべく準備積立金を多くする方針を取りたり。故に其後大阪紡績、三重紡績何れも火災に罹り、工場の一部分を烏有に歸したるも、速に新機械を購入して復舊を得たるのみならず、一般金融逼迫、製品不捌の爲め他の紡績會社が極めて困難せる際にも、兩社は比較的困難を感ずること少なかりき。(青淵先生六十年史)

——大阪紡績會社創立後の成績良好にして、其利益多かりしかば、明治十九年の頃より漸く其企業は大阪其他各地に勃興し、三重紡績會社、攝津紡績會社、平野紡績會社、鐘淵紡績會社其他大小の諸會社前後相起り、大に盛況を呈したるが、既にして製品増加するに及びては、往々供給過多の患あるを免れざるに至れり。而して此患を除くは販路を海外に開くの外なくして、清國の如



きは最も有望なる市場なりと雖、從來英國及び印度綿糸の占領せる所にして、此勁敵と競争するは頗る困難の業ならざるを得ず。是に於てか紡績業者は綿糸輸出税並に棉花輸入税を免除するの必要を唱へ、其議幸に政府議院の容るゝ所となり、綿糸輸出税は明治二十七年を以て、棉花輸入税は二十九年を以て共に廢止せられたり。又是より先き輸入棉花運搬費の低廉を計るが爲に、明治二十六年紡績業者相聯合して日本郵船會社と交渉し、印度より輸入する棉花は總て之を郵船會社に託し、郵船會社は之に酬るて運賃を低廉にする條件を以て協約を締結し、終に孟買航路の開通を見るに至れり。抑々此事たるや孟買の商人ターター氏來朝し、彼阿會社航路獨占の弊害を慨し、日本に於て新に航路を開始せんことを希望したるに起因し、爾來紡績業者と郵船會社との交渉となり、予も亦初めより其協議に與りて聊か斡旋する所ありたり。(中略)蓋し斯の如く無賃に等しき運賃を定めたるものは、日本に對する積荷は特約に基き大抵郵船會社の取扱ふ所となり、實際之を彼阿會社に託するものなきを信じ、且つ此驚くべき聲言により、我紡績業者の聯合を瓦解せしめんと欲したるが爲なるべし。然れども此法外なる運賃は勿論一時の權略に過ぎずして、若し郵船會社にして航路を中止せば、再び非常に運賃を引上ぐべきや明かなり。故に我紡績業者は彼阿會社の詭謀を看破して、益々其聯合を鞏固にしたるを以て、彼阿會社は遂に其競争を中止

したり。而して之が爲めに棉花の運賃低廉となり。紡績事業に便益を與へたるのみならず、海運事業に於ても一層の進歩を來したるは大に喜ぶべきなり。(大隈重信撰、開國五十年史中の會社誌、濠澤榮一)



## 三〇、實業界の種蒔役

### 一、洋風建築と材料の研究

泰西文明の輸入に伴ひ、セメント及び煉瓦の需要が増加するのは當然の歸趨であるが、明治初年以來實業界の種蒔を以て任じてゐた私は、セメント及び煉瓦の製造事業にも亦密接な關係を有して居る。丁度明治十八年頃と記憶するが、政府に於いて論議の結果、我國を文明諸國と對峙せしめるには諸官衙、議事堂等の建築を完備しなければならぬと云ふ事になり、而も其の建築は總て洋式の構造にするのが適當であると云ふ事になつたが、洋風建築をするには大いに研究しなければならぬと云ふので、十九年に臨時建築局といふものが設置された。そして井上馨侯が總裁となり、ドイツの建築大家ビョックマン氏が顧問に任命された。ビョックマン氏は

『洋風建築をするには煉瓦の事業を發達せしめなければならぬが、東京附近の産出に係る煉瓦は品質が粗悪で、而も製法が不完全であるから到底永久的建築に耐へぬ事を發見した。それで私の意見として、建築材料の主要物である煉瓦の完備を期する爲めには、廣く良土を求め、西洋式の一

大機械的工場を新設しなければならぬ。』

と云ふ意見を建築した。併し斯かる事業は官營事業とす可き事業でないから、井上總裁は此の建築を採用して、民業として成功せしむる方策を探り、民間事業家に對して大いに勧誘する處あつた。而して其の獎勵條件としては、製品は年七朱の利益を加算した値段を以て建築局で買上げ、又機械煉瓦は本邦未曾有の事業であるから、相當の外國技師を政府が傭入れて、會社に貸與へると云ふ事であつた。

私の性分としては斯かる國家的意義を有する事業を無視して、傍觀する譯には行かない。そこで益田孝氏や其他と相談した上、明治二十年の十月に資本金二十萬圓を以て日本煉瓦製造會社を創立し、日本最初の機械煉瓦製造事業を營む事となつたのである。處で臨時建築局に於いては、ビョックマン氏に先立つて伯林に駐在してゐた品川公使を介して、ナスチエンス・チーゼと云ふ煉瓦技師を傭つて居つたので、煉瓦會社が創立される事となるや、ビョックマン氏と共に共力して専ら工場的位置選定に努力し、各地を踏査して土質を研究した結果、埼玉縣大里郡地方に土質の純良で而も豊富なる土地を發見したので、之れを最適地と認めて同地に工場を設ける事となつた。斯くて翌明治二十一年の春に建築工事を起し、同二十二年九月に到つて全部の竣工を見たが、設計は總てビ



ヨックマン氏が最善と信ずる方法に依つてしたものである。ドイツの最新式の煉瓦型機三台を据ゑ付けて、八十馬力の動力に依つて一日六萬個の生煉瓦を造り出し、同じくコール式乾燥室三棟（三千坪）を新築して、此處に於いて水分の乾燥に換氣作用を行ふ仕組で、又ホフマン式燒窯三個は石炭を燃料として一日五萬個の煉瓦を焼上げる事が出来る様な仕組であつた。即ち我國從來の製造方法と大いに異なる點は、手工に代ふるに機械力を以てし、日光の乾燥に代ふるに室内乾燥を以てし、薪に代ふるに石炭を以てする等の諸點であつて、殊にコール式乾燥法に依つて、日光の力を藉らずに室内乾燥を行ふ一事は、斯業上の一大進歩として最も深く望みを囑せる處であつた。

此の埼玉縣大里郡に工場を設けるに就いては、政府の保護金下付を當てにして工場敷地が選定されたのである。此間の事情は青淵先生六十年史に記載してあるから、之れを判り易くして左に摘載する。（編者）

煉瓦工場の位置は其の選定に當つて、土質が純良で且つ豊富である事を主眼とし、運輸の便否に就いては、之れを第二に置いたものである。何故かと云ふに政府の保證があるから、會社の性質上製品の優良といふ事を第一目的としたのであつて、露骨に言へば政府の保護を力にして算盤を

探つた様な譯である。であるから若し政府提供の條件が無かつたならば、營利的關係から云へば東京を離れた埼玉縣に工場を設けるなどといふ事は、營利事業としては出来得ない事であつた。従つて露骨に申せば政府の保護を力頼みにして運輸の不便を顧みず、大里郡に工場を設ける事としたのである。若し政府の保證が無かつたならば、恐らく初めから算盤の採れない此の會社などは出来やう筈がなかつた。處が意外千萬にも工場經營の途中で一番頼みの綱にして居つた政府の保護が突然廢止となり、最初の豫定は一場の夢と化してしまつた。政府が最初の方針を變更するに到つたに就いては種々の原因があるだらうけれども、直接の原因は當時の財政状態が一時に諸官衙及び議事堂等の新築若しくは改革を許さなかつたので、最初は全部洋風建築を目論んだのを變更するの止むなきに到り、總裁の井上馨侯が憤慨して總裁の位置を去つた爲めに、建築局の計畫は根柢から覆され、之れに伴つて會社に對する約束の條件も破棄される事となつたのである。煉瓦會社の立場としては政府の保護があるからこそ何うか斯うかやる見込があつたので、それが廢棄された曉には宛かも暗夜に灯を失つたと同じく、直ちに進退谷まる窮境に陥つたのである。此の新事業に對しては創立勿々から此様な難關に遭遇してしまつた。併しながら此時はもう既に工場の新築に着手し、機械類も購入し、設備の最中であつたのに加へて、運輸上から看れば非常に



不得策であるが、土質が優良で東京近傍に於いては他に求め難いといふ様な特色を有つて居り、若し其の經營宜しきを得さへすれば、政府の保護が無くとも二三年だけ損失を忍べば其後は必ずしも經營が出来ない譯でもないといふ状態だったので、今更放棄してしまふのも惜しい、又見す見す二三年は損失の覺悟で事業を進行させるといふのも餘程難しい事情があつたので、會社の出資者の連中は止めようか遣らうか其の判断に迷ひ、殆んど其の決する所を知らなかつた。其の際に於いて、濫澤子爵は敢然として事業經營を主張し、「此の事業は國家經濟上からお互ひに相談の上で經營する事としたものであつて、利益が主眼でない筈である。だから會社創立の目的は今更論する迄もなく明々白々である。今に到つて政府の保護の有無を論じ、損失するから止めやうぢやないかなごと云ふ様に、最初の目的を無視して利益本位では非を決するなどと云ふ事は甚だ當を得ない事である。政府が先の口約を破つて、保護條件を取消すと云ふ事は固より宜しく無い事であるが、此の事業を始める趣旨は國家的見地に立つて目論んだ筈であるから、僅の利害問題で今更變替する事を考へる事は甚だ當を得ない措置と思はれる。而も當分は損失を免れないだらうが、今後官營事業が中止されても、民間の洋風建築は一年毎に盛んとなるであらうから、數年間だけ損失を忍ぶ決心さへあれば、政府の保護なんか當てにしなくとも十分に營利會社として經營

する事が出来得るやうになる。斯う云ふ様な事業を經營するに政府の力なんかを當てにするのが抑々の間違ひであつて、眞の事業家の耻づ可き事ではなければならぬ。」と云ふ様な意見で、盛んに實業家の進む可き道を力説したので、他の出資者も理の當然な子爵の主張に一言も無く、中止説は其儘沙汰止みとなり、續々工事を進行して二十二年九月に到つて其の工事を竣工し、事業を開始するに到つたのである。

## 二、事業の頓挫と會社の窮乏

さて工場の諸設備の完成と共に、第一着手として煉瓦の試製をする事となつた。専門のドイツ人技師によつて設計され、本場のドイツ人煉瓦技師によつて製造されるのであるから、其の結果に就いては十分の信頼してゐたのであるが、それでも従來手工によつて製造してゐたところへ、初めて機械應用の最新式製法を採用したのであるから、品物が出来上る迄は矢張多少心配であつた。處が此の杞憂が不幸にも事實となり、型拔機械と燒窯は成績良好であつたけれども、乾燥室に缺點があつたと見えて、此點は頗る不結果であつた。五六十日も生煉瓦を棚の上に乾して置いても、白い黴を生ずる計りで水分は少しも除去されない。責任者であるドイツ人のナスチエンス・チーゼ技師も



此の結果を見て大いに面目を失し、非常に熱心になつて其の原因を研究したが、遂に明確な理由を  
発見する事が出来ない。御本人が困つた結果か何うかは知らぬが、之れはドイツと日本の氣象上の  
差異を氣付かず、ドイツ式其儘を採用した爲めであると辯解して居つたが、而もさう云ふ理由を言  
ひながら、日本の氣候に適切な方法を案じ出す事も出来ず、文句を言ひながら同じ失敗を繰返して  
數箇月を経過し、其中に約束の期限が経過してしまつたので、一つも立派な製品を出かさぬうちに  
ドイツに歸つてしまつた。此様に最初目論んだやうな製品は出来ず、而も會社の資本金は工場建設  
や煉瓦の試験の爲めに殆んど全部を費した計りでなく、數萬圓の負債を生じ、折角進まぬ連中を説  
伏して事業の進行を圖つた會社も、其の前途は殆んど豫測する事の出来ぬ様な悲運に遭遇した。

——之れ明治二十二年十二月のことなり。先是吾社の支配人として内外諸般の實務に當りし隅山  
尙徳氏も亦去れるあり。去りし原因に付ては今明言せざるも、兎に角吾社は氏の爲めに容易なら  
ざる創疾を被りしこと事實なり。(青淵先生六十年史中、諸井恒平述)

會社の立場は全く窮地に陥つたのであるが、幸ひに一道の光明を認めたといふのは、乾燥室の結

果が不良で會社の最初の豫期とは非常に反して居つたけれども、其の不完全な製品でさへも他の従  
來一式の煉瓦に比すれば數等勝つて居つたので、市場に於いては存外評判が良く、他の工場の製品  
を壓倒して販路が非常に廣袤に亘つた事である。尤も會社創立の重なる御得意先であつた建築局が  
方針一變した爲めに約束を破棄したので、此の方面に對しては會社創立當時の様な需要を見る事は  
出来なかつたけれども、既に着手中であつた司法省、海軍省、裁判所等の改築並びに新築工事は豫  
定通りに進行したので、不完全ではあるが在來の煉瓦よりは品質が良いといふのと、會社創立當時  
の緣故とに依つて、之れに要する煉瓦は會社一手で引受ける事となつた事である。何しろ乾燥室は  
不結果であるから、生産高も十分の能力を發揮する事が出来ないし、一面に於いて責任を以て煉瓦  
の供給をなさねばならないから、會社當事者の苦心といふものは全く想像以上であつたのである。  
會社に於いては先づ第一に乾燥室の改良に就いて研究すると同時に、在來通りの日光乾燥法を擴  
張して責任を果たす事に努めたのであるが、其の當時實務に當つた人々の苦心は全くお話にならぬ  
位である。而も最初豫期した通りの製品が出来ないので、會社は資金に缺乏し、それ以上建築局の  
約束を果たす様な生産額を持続する事が出来ない様になつてしまつたので、何處からか資本を求め  
なければならぬ立場になつた。折悪しき事には、丁度其頃は不景氣時代である明治二十三年頃の事



であつたので、其の資金の求めやうがない。併し其儘にして置けば會社の破滅を免れぬので、絶頂の不景氣時代にも拘らず、株主總會を招集して二萬圓の増資を行ふ事とした。今でこそ僅か二萬圓位は物の數ともしないけれども、我國空前の不景氣を現出した當時にあつては容易ならぬ難問題であつたのである。併し幸ひにも無事に株主總會を通過して會社もやつと一息吐いたが、不幸の時は止むを得ないもので、今度は愈々安心してやつて行けると思つてゐた矢先へ、此年の九月に大洪水があつて、利根川と小山川の氾濫の爲めに工場は全部浸水して、數十日間は全く事業を中止するの止むなきに立ち到つたのである。單に休業の損害ばかりでなく工場の被害が頗る多くて莫大な復舊費を要し、しかのみならず建築用煉瓦の納入期日は眼前に迫る、工場には生煉瓦が堆積して置き場所も無いといふ始末、幾ら日光乾燥をやつても追ひ付く筈がない。一難去つて又一難來るといふ事があるが、此時には流石に負けすぎらひの私も、嗚呼天道果して是非乎と歎いたものである。弱音を吐く様であるが、金ばかりで出来る仕事ではなく、煉瓦を納めなければ建築の方も差支へるのであるから、責任者の立場にある私としては全く此時ほど困つた事はない。併し此の場合弱音を吐いて居つては會社が潰れるばかりであるから、私は内心大いに悲觀したけれども、私がそんな顔色を見せては出来る事も出来なくなつてしまふから、少しも之れを顔に現はさず、資金の方は私が引受

けるから差當り日光乾燥の方に主力を注ぎ、約束の納期を間違はぬやうにしなければならぬと激勵し、一方に於いては乾燥室の復舊と改善に力を注ぎ、二十四年の春を迎へて兎も角豫定の製品を出し得るだけの設備を整へるに到つた。併し水害の損害や之れが復舊並びに設備改良の爲めに少なからぬ費用を要したので、折角増資した運轉資金も、工場の復舊した頃には既に費ひ果して、再び資本金缺乏の窮境に陥つたのである。

### 三、苦境を脱して目的を到達す

煉瓦製造事業は製品だけは漸く相當の物が出来る様になつて、此點だけは稍々安心されたけれども、前に申述べた様に運轉資金が缺乏を告げて、會社は非常な窮境に陥らざるを得なかつたので、何うしても之れを切り抜けなければならぬと、其の維持に就いて非常に苦心した。處が幸ひな事には、丁度其頃即ち明治二十四年の春から起工した碓氷峠の鐵道工事に多量の煉瓦を必要とし、之れを入札で購買する事となつたが、地の利を得た關係上、其の大部分を會社で引受ける事となつた。競争入札ではあるけれども、餘程の利益を擧げる事が出来る様な値段で落札したので、會社は之れに依つて漸く頹勢を挽回する見込がついた譯である。而も此の需要に應ずる爲めには更に設備を擴



張しなければならぬが、先年増資したところへ又増資すると云ふ事は、不景氣の絶頂時代に於いて殆んど不可能の事であつた。さりながら註文を引受けた以上は、其の現状の儘では到底責任を果たす事が出来ないの、二萬圓の増資を株主總會に諮つたが、創立以來損ばかりして居て注ぎ込む一方であるから、株主連中も見す／＼損をする會社に之れ以上資本を投ずる事は出来ないと云ふ様な譯合で、總會の承認を得る事が頗る難かつた。さればとて不景氣時代に損ばかりして信用のない會社の社債に應ずる人もありさうにない。周囲の事情から申せば之れは當然の事であるが、私としては會社の事情が事情であるし、事業其のものは國家的意義を有するものであるから、何うしても之れを盛り立てなければならぬと決心し、蜂須賀侯に衷情を訴へ其の内諾を得て、二萬圓社債募集の件を株主總會に付議したのである。株主總會では異議無く通過したけれども、株主で社債に應ずる者は一人もなかつた。併し豫め此の情勢は察知して居つたのであるから、蜂須賀家が一萬圓、私が一萬圓を引受ける事とし、漸く其の難局を切り抜ける事が出来たのである。

斯う云ふ様な次第で設備の擴張を行ひ、明治二十四年の春から約束通り煉瓦を納入し、二十五年の秋に確水用の煉瓦は完納するを得たが、此の一年餘の期間に於いて相當の収益を擧げる事が出来たので、會社は幾分愁眉を開いたのである。だが何しろ缺損續きの會社であるから、利益を擧げたと

云つても従來の損失を補填した程度で、利益配當をすると云ふ様な程度迄には行かなかつた。處が鐵道工事の納品を果たしてからは販路を新たに開拓しなければならぬので、又もや經營難に陥らねばならなかつた。煉瓦の需要の最も多いのは東京であるが、東京には在來の日本式煉瓦工場があつて、之れと競争するは運賃の關係で非常に不利である。そこへ持つて來て生産能力が大きいものであるから、折角造つた製品は山の様に積上げられて一向捌け口がなく、製法の改良や經費の節減に就いて出來得る限りの方法を探つたけれども、每期損失を免れずして遂には經營維持が絶望の破目に陥つた。株主からは苦情が出るし、會社としては差當つて挽回の策も發見されず、殆んど策の施すべき道がなかつた。種々善後策を考究した結果、運輸機關の不完全なのが最も重大な原因であるのを發見し、會社を活かすには此の缺點を補ふより外に策のない事を知るに到つた。それで二十七年の三月に深谷、上敷免間の鐵道敷設案及び其の建設資金三萬六千圓を株主から募集する議案を株主總會に提出したが、總會に於いては反對が多くて容易に決しなかつた。併し私が赤誠を披瀝し、今後の經營方針等に就いて詳細に説明した結果、辛うじて社債募集の事は總會を通過したけれども、さて應募者を募つて見ると創立以來缺損ばかりで一錢の配當もした事がないので、今度も亦誰も之れに應ずる者がなかつた。併し三井の代表者である益田孝氏や、蜂須賀家の代表者である藤本文策



氏等が私を信用し、私の計畫を援助される事となつたので、社債の大部分は三井、蜂須賀及び私とが引受け、直ちに政府の認可を得て深谷、上敷免間二哩四分の三の鐵道工事に着手し、二十八年六月竣工するに到つたのである。恰かも此頃日清戦争が終結を告げ、戦勝の結果事業界は遽かに殷盛を呈し、鐵道の建設、工業の勃興に伴ふ工場の新設、諸建築の新計畫等が續出し、煉瓦の需要も急激に増加し、而も永久的建築に堪へ得る煉瓦は此の會社で製造したもののみである。生産能力から云つても他には大口の需要に應ずる設備がなかつたので、煉瓦製造業は殆んど未曾有の盛況を呈し、會社も亦従來の窮境を脱して多額の収益を擧ぐるに到り、三十年頃には一割の配當をする事が出来る様になつた。斯うなつて來ると増資に反對した株主連中や、甚だしきは所有の株券を投げ出さうと迫した株主連中が、手の平を覆へす様に設備の擴張や増資を慫慂する始末で、明治三十年に増資計畫を株主總會に諮つた際の如きは、立所に之れを可決して其の拂込の如きも殆んど勞せずして之れを完了し、其後多少の盛衰あるは免れなかつたが、三十二年には負債の全部を償却して會社の基礎が漸く確立し、其後順調の發達を遂げて今日に到つた。私は創立以來同社の取締役會長として微力を盡し、幸ひに基礎の確立を見たので三十二年に辭職したが、日本に於ける西洋式の機械煉瓦が今日の様に發達したのを見れば、私の稱許き仕事は徒爾でなかつた事は實に嬉しい。

澁澤子爵が機械煉瓦製造の爲めに苦心して經營せられ、幾度か絶望の淵に沈みつゝも初志を貫徹せられたる状態が、青淵先生六十年史に見えてゐるから、次に之れを抄載しよう。(編者)

青淵先生が日本煉瓦株式會社に於ける關係は尋常一様でない。此の事業たるや先生の關係せられた他の諸事業に比すれば、殆んど問題にならぬ程小さいけれども、其の關係の密接な點に於いては他に其の比を見ないと思ふ。青淵先生が此の會社の爲めに投下された資本は殆んど總資本額の三分の一に當り、而も其の窮境時代數回に亘つて募集した社債の過半は、先生の投資せられたものである。殊に先生は創立以來會社主宰の重職に當られ、大小の勤務は多く其の親しく決裁せられたものに係るものであり、猶ほ工場の所在地たる埼玉縣大里郡上敷免村は、實に此の偉大なる青淵先生を生める血洗島と目眉の間にあつて、先生の墓參歸省と工場巡視とは必ず同時に其の足跡を印せられたものである。されば恐らく先生の所感も他と異なる所があるであらう、而も會社の事業は創立當初から困難に遭遇し、失敗又失敗、蹉跌又蹉跌、殆んど絶望の淵に沈んだ事が幾回なるを知らなかつたが、遂に萬難を排して社業を確立するに到つたのは、偏に青淵先生が熱誠を以て經營の衝に當られ、一身の利害を度外視して盛り立てられた結果に外ならぬ。若し先生が無か



つたならば、恐らく會社は中途挫折するの外なかつたであらう。

#### 四、セメント事業の沿革

機械煉瓦は此様な難局を経て漸く發達したのであるが、セメント事業の方は最初政府直營で其の製造を試みられたものである。元來我國に於けるセメント製造事業は、工部省が其の模範を示す爲めに、明治四年に深川の仙台堀に工場を設けて事業を開始したのが濫觴であるが、工部省直營時代に於いて製品は相當のものが出来る様にはなつたものの、經營が宜しきを得なかつた爲めか、事業成績は餘り香ばしくなかつた。即ち生産高は漸次増加したけれども、收支相償ふに到らなかつたのである。其中に政府に於いては官營事業は成るべく之れを廢止して民業に移す方針を採り、此のセメント事業も將來必ず事業を繼續して成功する見込みのある者に拂下げる事となつた。處が大川平三郎君が製紙研究を終へアメリカから歸朝して間もなく、同君を通じて淺野總一郎君からセメント事業を引受けて經營したいと云ふ相談を受けたのである。私は豫て淺野君の人爲も知つて居る事ではあり、事業も經營其の宜しきを得さへすれば前途頗る有望な仕事であるし、且つ國家的見地からして逐年需要の増加するセメントの大部分を海外より輸入するは、頗る不利益であると考へて居つ

た際であるから、私は及ばずながら淺野君の相談相手となり、私の代理といふ譯ではないが、大川平三郎君が其の經營に参加して、其の拂下げを受ける事となつたのである。

此のセメント工場拂下げに就いては、政府に於いても民業保護の趣旨で年賦償還の便宜を與へたので、淺野君は其後熱心に製法の改良と生産費の低下を圖り、漸次完全な製品を造り出す事が出来る様になつて、其の聲價を高め得意先も増加するに到つた爲め、工部省直營時代と違ひ相當の収益を擧げ得る様になつた。さうかうしてゐる中に需要が増加し、到底從來の設備では之れに應ずる事が出来ぬ程の盛況を呈するやうになつたので、工場の擴張を圖り、又分工場を新設して大いに事業の發達を期した。企業の組織も事業の發展に伴ひ合資會社組織に変更して、更に資本の増加と規模の擴張をなし、其後之れを株式組織に改めて社業の一大躍進を計畫し、遂に今日の如き日本一流の大セメント會社たるに到つたのである。私は直接經營の衝に當つた譯ではないが、斯ういふ様な次第でセメント事業も因縁淺からぬものがあるのである。

——維新後歐米の百貨潮の如く輸入し來り、殆んど底止する所を知らざる狀勢を看て、時の政府は大に之を憂へ、將來有望なる品物は成るべく内地に於て製出せんことを企圖し、其の事業としてセ



メント製造事業を工部省に於て創設する事となり、同省工作局大技師長宇都宮三郎氏が經營の任に當り、明治四年深川區清住町に工場を設置して製造に着手した。之れ本邦に於けるポートルアンド・セメント製造の嚆矢であつて、淺野セメント株式會社の前身である。最初は勿論試験的のものであつて、規模も亦小さかつたが、辛苦經營の甲斐あつて漸次製法に練達すると同時に規模も擴張され、十三年頃には創始當時の四倍位の生産を見るに至つた。併し其の經營宜しきを得なかつた爲め收支償はず、遂に廢業するの止むを得ざるに至つた。當時淺野總一郎氏は夙にセメント製造の國家的有利の事業である事に着眼して居つたが、恰かも此の際、澁澤榮一氏の懇篤なる勸奨があつたので意を決し、明治十四年四月、官に請ふて工場全部を借用し、其の製造を試みた。然るに炯眼なる氏は一年餘りの經營で早くも斯業の得失を究め、充分の成算を得るに至つたので、十六年再び官に請ふて工場全部の拂下げを受けた。爾來製法の改良に腐心苦慮した結果、十八年頃には事業が稍整頓するに至つたので、徐ろに歩を進めて月産二千樽以上に達する様になつた。そこで十九年に規模の擴張を圖り、技師二名を歐洲に派遣して具に其の製法を研究せしめ、二十一年に兩技師が最新知識を得て歸朝するに際して、斬新の器械を購入せしめて直ちに之れを應用して製造を試みたところ、成績頗る良好だつたので事業の面目を一新するに至り、年産額六萬樽

餘を産出する様になつた。爾來事業は益々發展し、供給不足を告ぐるに至つたので、門司に新工場を興し、日清戰役後、需要の大激増を見るに至るや、澁澤榮一、安田善次郎其他の諸氏に謀つて合資組織に改むると同時に規模の大擴張を斷行し、年産額約二十五萬樽を數ふるに至つた。茲に民間最初のセメント製造業である同會社は全く基礎確立するに至つたのである。其後數次に亘つて資本を増加し、大正元年には株式組織に變更したが、其間工場の新設、他會社の合併及び買収を行ひ、今日の盛觀を呈するに至つた。(日本産業發達史)



## 三一、拓地殖民と官業

### 一、北海道開拓使と事業家

黒田清隆伯が北海道開拓使を止めて、岩村通俊氏が其後を引受けてから間も無くの事であるから、明治十三年頃と記憶するが、芝の紅葉館に一流の實業家を二三十人招待して、北海道開拓に就いて政府の新方針披露旁々懇親の宴があつた。其時の挨拶では、『從來北海道の開拓事業は専ら官業主義を採つて来たのであるが、民間の事業も相當進んで来たし、北海道に於ける諸事業も一通りは手を染めて、今後は政府で直營しなくとも十分民間でやつて行ける見込みが立つたから、從來の官營事業を漸次民間に拂下げて經營する方針を探る事とした。就いては今夕お集りの諸君は孰れも實業界屈指の方々であるから、北海道開拓の爲めに進んで投資經營の衝に當りたい』といふ意味の挨拶があつた。其時の談に、

『今迄は諸事新しく始めなければならぬから、政治上の事が主で經濟方面の事は之れに附随するといふやり方であつたが、今後は事業本位で北海道の開拓を圖る方針であり、勢ひ各實業家は之

れが料理の任に當るが當然の責務である。』

といふ様な事を繰々申述べて民間實業家を激勵された。此の方針に對しては私も大いに賛成であつたのであるが、さりとて其席に於いて直ちに吾々實業家が引受けてやりますといふ責任ある挨拶は出来なかつたので、私は來賓側の實業家を代表して、謝辭を兼ねて一場の希望を述べたのである。

『只今のお話の趣旨を承るに至極結構な事であつて、私共の多年主張して居る意見とも合致するのであるから、大いに喜ばしい事と思はれる。元來政府の從來のやり方と云ふものは、宛も事業を玩具にしてゐる様な形ちで、朝三暮四其の歸趨する所を知らず、まるで駄々子のやり方に等しいものであつた。従つて民間實業家も政府の方針が猫の眼玉の様に變るから、安心して事業を開始する事が出来なかつた。幸ひに此度政府が根本方針を樹立して、經濟本位で北海道開拓の目的に進まれようといふ事に決定されたとの事であるから、此點は衷心より賛成する處であるが、さりとて大體の方針を承つた計りで、此席に於いて即時に諾否をお答する事は出来かねる。大體に於いて私共の意見を申述べるならば、北海道の開拓に就いては、根本方針として經濟家萬能と云ふ事にし、政策の方面は第二にしたいと思ふ。斯う申せば甚だ得手勝手な事を云ふ様であるが、未開地を開拓するに就いては、政府で幾ら勸めても全然算盤の取れない仕事には誰も着手する筈



がない。又政府の方針が従來の様にあつてもない、斯うでもない、其時の御都合主義で變更される様では、安心して仕事を起す事が出来ないから、是れ又開拓の目的を爲し遂げる所以ではない。されば政治的方面を第二として、經濟的方面を主とすると云ふ事が先決問題である。それから未開地の開拓には第一に交通の便を開く事が必要であるから、鐵道の便を開く事が最も急務である。若し民間に於いて今後鐵道敷設の計畫ある場合には、特に政府に於いて便宜を與へらるゝ様にして欲しい。又全部とは云はぬが、官營の諸工業は大部分民業に移して、相當の保護を與へる様にして欲しい。未開地に事業を興すに就いては、最初から利益を擧げる事は不可能で、或る年限の間は損失を覺悟の上で着手しなければならぬが、何年後に到つて算盤が取れるか分らぬ仕事に就いて進んで投資し、又經營する人はさうある可き筈がない。だから基礎の出來る迄は相當の保護を與へるのが、北海道を開拓するに必要なる所以である。更に北海道は漁業が盛んであるが、現在の様子ではまだ不振なるを免れない。されば漁業税を大いに引下げると同時に、此の方面に對してもより以上の保護を加へて、斯業を盛んならしむる様にはならぬ。斯くの如くすれば直接國税は大いに減少するであらうけれども、産業が盛んになれば間接税が澤山に徴收される譯であるから、國家的見地から見ても産業は盛んになる、國庫収入は増加する、詰り

一舉兩得の譯である。今後北海道の開拓に就いては、其の大方針を斯う云ふ風にせられたら宜しからうと信する。』

私の意見は大體以上の様な意味であつたが、政府に於いても豫ねて官業を漸次民業に移す方針を採つて居つたのであるから、其後の會見に於いても種々意見の交換をした結果、大體に於いて政府の方針と私共民間實業家の意見との一致を見、其後北海道に於ける官營事業は漸次民業に移る様になつた。而して其の事業の中私の關係したのも少くないが、北海道炭礦鐵道會社並びに札幌ビール會社の如きも、此の前後に於いて民間に拂下げられたものであつて、而も私とは密接な關係を有するに到つたものゝ一つである。

## 二、北海道炭礦鐵道會社の誕生

今の北海道炭礦汽船株式會社の前身である北海道炭礦鐵道株式會社は、分り易く申せば紅葉館に於ける招待會が産み出した會社の一つで、從來官營事業だつたのを引受けて民間の經營としたものである。元來北海道の統治に就いては、維新後北海道開拓使が置かれ、純然たる植民地の政策を採つたのであるが、其後農商務省の所管に移り、北海道事務管理局と云ふものが設けられた。それが



明治十八年に廢止されて、北海道廳と云ふものになり、内務省の所管に移る様になつたのであるが、開拓使時代には北海道に於ける大きな事業と云ふものは、殆んど大部分は官營であつた。處が政府の方針が諸事業を民間に移す事となり、而も相當の保護を與へられるので、北海道の開拓事業に注目する實業家も漸次現はれて來たが、明治二十一年頃になつて堀基其他の諸氏に依つて、北海道炭礦鐵道株式會社が目論まるゝに到つた。發起人中には舊尾張藩主徳川義禮侯、奈良原繁男、森岡昌純、原六郎等の諸氏があつたが、私も亦發起人の一人として會社創立に關與したのである。此の會社の創立の目的と云ふのは、北海道開拓使時代に官業で採掘を始めた幌内炭山や、夕張、空知等の炭坑を採掘すると同時に、石炭運搬の爲め鐵道を敷設して經營しよう云ふのであつて、明治二十一年に會社創立と同時に拂下げの手續も済み、又鐵道敷設の件も認可された。固より當時に於ける採炭額は僅々數萬噸に過ぎず、運輸の事業も極めて微々たるものであつたから、會社としては鐵道敷設其他に多額の企業費を要する一面に於いて、石炭採掘並びに運輸に依る収入は案外少いのであるから、最初の數年間は算盤の取りやうはなかつた。併し幸ひに政府から補助金を貰ふ事となつたので、運輸の便さへ付けば將來十分利益を擧げる事が出来る目論見であつた。

此の會社は最初堀基氏が社長となつて經營の任に當つたが、堀氏は仲々氣骨のある面白い男で、

殆んど專制的に會社の經營をして居つた。元來が維新の志士で實業方面には深い經驗も無く、卓越した經營の才があつた譯でもなく、事業方面に就いては全くの素人であつたから、實際の仕事と云ふものは殆んど部下任せであつた。併し維新當時は相當に羽振を利かした男だけに、政府要路の六官に知己が多く、對外的には相當に重きをなしたものである。仕事も幸ひに創立後順調に進み、石炭の採掘量も増加し、鐵道の敷設も大いに進捗し、會社の將來もどうか斯うか見込みの付き掛つた際、堀社長が餘りに鯁骨過ぎた關係から、會社が政府から壓迫を蒙り、政府の補助金は取消される、世間からは非難される、資金は缺乏すると云ふ様な窮境に陥り、明治二十五年頃には殆んど會社の存立が危うきを告げる様な有様となつたが、其間に處して私は種々斡旋盡力し、幹部の改造を行つて會社を建直した様な事もあつた。

——北海道炭礦鐵道は其名の如く、素と石炭を運ぶが爲に起り、其開道に依り石狩、幌内原野等の開發も大いに進み、年々乗客貨物の増進著しく、(中略)抑も政府初て炭坑の業を起せしは幌内、岩内、茶津内にして、明治十二年度の頃より採掘に着手し、四五年の後岩内、茶津内は廢坑し、其業を繼續せるは獨り幌内炭坑なり。故に十一年太政官に稟請して開採せし(岩内とも)資本百五十



萬圓を得、同年十月二十二日煤田開採事務係を札幌に置き、山内堤雲を事務長に任じ、松本莊一郎副長となり、米國土木工師クロフォールド、同礦山工師ゴージョーを初め、工夫頭、水利工師等漸次備聘し、尋で其石炭を搬出するには、水利工師フアンデントを石狩に派し、同坑に兩個の埠頭を設け、蒸氣浚渫機械を用ゐて河口を掘り、米國海軍大尉エム・エス・デーの測量により、幌内太より河口まで十餘里流木を除けば、優に十二尺以上の深さあるを發見し、幌内より幌内太まで七里の間鐵道を設け、川は曳船にて石炭を輸送するの計畫にて、政府は其費用百三萬圓の支出を許可せり。然るに土木工師クロフォールドの説にて、石狩川は冬期結氷して目的を達せざるのみならず、搬出する石炭は幌内太と小樽にて二回の船積を要し、破碎の害少なからざるこ小樽より採炭用其他の諸機械を運搬するにも、小樽札幌間旅客の交通にも共に便利なりとの故を以て小樽に棧橋及び工場を設け、幌内より直ちに小樽に鐵道を通するの義となり、十二年十二月前計畫を變じ、此費用を百五十二萬圓に改めたり。此に於て大に工事を急ぎ、手宮札幌間の鐵道は十三年一月八日より同年十一月二十四日までに成功し、札幌野幌間は十四年六月より十一月十五日までに成り、十五年六月江別に達せり。此年外國人は一切解雇し、山内堤雲手宮炭礦鐵道事務所長となり、山内德三郎幌内炭坑事務所長となれり。爾後江別幌内間は十五年十一月の竣工にし

て、幾春別支線十九年八月幌内太より一哩を延長して中止し、二十一年春北有社々長村田堤當時の鐵道全部を拜借し、其五月再び之を延長し、十一月に至り幾春別炭坑に達せり。二十二年中炭礦鐵道會社は線路並に炭山等村田の權利を譲り受くる約成り、又政府の拂下を受け、且室蘭港より空知太に達する鐵道、並に同線路より岐れて夕張炭坑、空知炭坑に達する兩支線の鐵道敷設、及空知、夕張の石炭採掘の許可を得て、株金總額六百五十萬圓を以て同社を成立せしめたるは、實に二十二年十一月十八日にして、堀基社長に上任せり。(青淵先生六十年史)

### 三、炭礦の沿革と事業の變遷

炭礦鐵道會社が採掘に従事した各炭山中二三の沿革を見るに、幌内炭山は石狩煤田中に於いて採掘に着手したる最も古い炭山である。其の開坑は明治十二年であるが、發見されたのは明治元年であつて、石狩驛の本村吉太郎なる者が、小樽本願寺の材木を幌内近傍で伐採してゐた際に、偶然炭層の露出してゐるのを發見したのである。處が本村はそれが何であるかを知らなかつたが、翌春山を下る時に其の塊を携へ歸つて他人に示した處、紺野松五郎といふ獵師が之れを見て石炭である事を知り、明治四年特に幌内に出掛けて炭塊數個を採取し、之れを開拓使札幌本廳に提出した。其



の當時開拓使廳に於いては諸事新たに創始する時代だったので、親しく之れを踏査する餘裕がなく、其儘に放置して置いたが、明治五年札幌の早川長十郎が之れを聞いて、直ちに實地踏査をなし、且つ炭塊を持ち歸つて具に開拓使廳に報告した。此時開拓使四等出仕であつた榎本武揚氏が親しく其の景況を質し、又其の炭塊を分析した結果、肥前の高島産の物と相匹敵する良炭である事が明かとなつた。そこで明治六年七月、開拓使はライマンといふ米國人の地質學者を派遣して幌内炭山を踏査せしめた處、數個所の礦坑を發見するに到つた。翌年再び同人をして岩内及び幌内の炭層位置及び炭量等を調査せしめ、又開拓使の雇である米國人モンローに命じて石炭の分拆をなさしめ、更に八年には又もやライマンをして幌内連炭線路を定むる計畫をなさしめ、同九年に到つて幌内炭山測量の業も完結を告げるに到つた。そこで愈々明治十二年から幌内炭山本礦大坑道の掘鑿に従事し、爾來事業を繼續して十四年末より十五年初めに掛けて、龍澤及び本澤に沿層坑を開き、此處に採炭事務の端緒を開いたが、實際採炭に従事したのは明治十六年であつた。其後明治二十二年迄は官業で採炭を繼續して居つたが、炭礦鐵道の創業に際して之れが拂下げを受けたものである。

幾春別炭山は明治十三年中、開拓使地質測量官吏島田純一、山際永の兩人が發見したもので、明治十八年に農商務省の直營で開拓に着手したが、工事の都合で一時中止したのを村田堤氏が之れを

借區し、更に會社が譲受けたものである。又空知炭山は安政年間松浦竹四郎が發見したものであるが、明治六年開拓使廳の榎本武揚氏が親しく實地踏査をなし、炭塊數個を採取して之れを分拆し、翌七年米國人ライマンが其の見取圖を製したが、其後殆んど顧られなかつた。然るに明治十九年に到つてから北海道廳が初めて空知煤田の測量に従事し、翌二十年に漸く其の一段落を告げ、二十二年には村田堤氏等が試掘に従事したけれども、漸く炭層調査をなしたに過ぎなかつた。之れを會社が譲受けて二十三年から開坑に着手したのである。更に夕張炭山は明治九年、米人ライマンが北海道地質測量の成績を報告し、其際夕張地方に石炭ある事を其の報告中に記載してあつたが、土地が峻峻であつて跋涉する事が出來ず、又夕張川を遡らんとしても中途に瀑布がある爲め舟を通ずる事が出來ず、之れが爲め親しく實地調査をなし遂げた者はなかつた。然るに明治二十一年の秋北海道廳技師阪一太郎氏が幌内より炭層の方向を追ひ、山谷を越えて夕張地方のシホルカベツの上流に出で、流れに沿うて數里を下り、初めて今の登川村に出た。そこで炭層壘々として露間に露出せるを見たのである。其後北海道廳は阪技師を派遣して精密なる調査をなさしめたが、會社の手に移つた翌年開坑に従事し、明治二十五年三月から採炭に従事するに到つたものである。



——炭礦汽船會社は其後事業の發展と飛躍を盡し、創立の當初は資本金六百五十萬圓であつたが、二十九年に五百五十萬圓の増資をなして總資本千二百萬圓となり、次いで三十四年には六百萬圓、三十九年には九百萬圓の増資をなし、事業方面に於いては三十三年に新たに回漕業を始め、三十五年には骸炭製造業を起し、三十九年に全國の鐵道が國有となると共に社有の鐵道も亦合併せられたので、此の年現在の如く北海道炭礦汽船會社と改稱せらるゝに到つたのである。而して明治四十年には煉瓦製造業並びに山林業、翌四十一年には電燈業、四十二年には製鐵業を開始し、社業の發展は實に素晴らしいものであつたが、餘りに事業を擴張し過ぎたのと、殊に日本製鋼所に對し七百五十萬圓を投資し、大資本の固定を來たした等が原因をなして、圖らずも事業は頗る困難となり、其の後社債整理問題が端なくも大波瀾を惹起して、同會社は遂に無配當の悲境に陥つた。茲に於いてか明治四十三年五月室田義文氏が新たに社長となり、六百萬圓の社債を募集して其の整理改革に着手したが、其の結果が面白くなかつた爲めに、遂に大正二年一月同社の大株主として殆んど其の死活の權を掌握して居つた三井家から、新たに團琢磨氏が入つて社長となり、更に磯村豊太郎氏が入つて専務取締役役に就任し、茲に全く三井家の間接事業たる色彩が明かとなつた。

斯くて一時資本金九百萬圓を減すると同時に同類郵船株を募集し、根本的に同社の改革を行つたが、後數年ならずして歐洲戰亂が勃發し、社業大いに隆盛を加へ、基礎頗る鞏固となり今日の盛況を見るに到つた。(日本産業發達史)

#### 四、麥酒釀造業發達の經路

大日本麥酒株式會社の前身である札幌麥酒會社も亦炭礦鐵道會社と同じく、開拓使廳の創始したのを引繼いで經營したものであつて、明治十九年に民營に移さるゝ際、大倉喜八郎氏が引受けて經營されたのである。併し獨力では思はしい發展を期する事も出來ず、又他に多くの事業を經營して居るから専心此の事業に努力する事も出來ぬ關係上、共同で經營しようぢやないかと云ふ相談を受け、淺野總一郎氏等とも相談の上、明治二十一年に札幌麥酒會社を起してビール釀造業を始めたのであつた。資本金は僅か七萬圓計りであつたが、丁度此年北海道廳に於いてマックス・ホルマンといふドイツ人の釀造家が北海道廳に雇傭せられたので、此の釀造技師を會社が借受けて釀造教師となし、二十七年頃迄同氏が指導者となつて、専ら釀造法の改良に力を盡された。會社で釀造するビールは普通のビールの外に輸出向の物と黒ビールとの三種であつたが、舶來品萬能の時代であつた



にも拘らず案外評判が良くて、需要も好況を呈したので、二十三年頃資本金を十萬圓に増加して設備を擴張し増産に努めたが、それでも一箇年の醸造石数は僅に一千石足らずであつた。私は創立當時から會社に關係し、其の社長となつたのであるけれども、素人であるから醸造の事に關しては知識がなかつたが、幸ひに適任者を得て會社の事業は漸次發達する様になつた。

丁度二十六年の秋頃と思ふが、北海道炭礦鐵道の關係で親しく相識る様になつた植村澄三郎氏が同會社の監査役に昇任し、比的較閑散な地位に就く事になつた。私は豫て植村氏の人物を識つて居り、經營的手腕にも富んで居る人であるから、閑地に就いたのを幸ひに或日植村氏と會見して、炭礦鐵道の仕事の餘暇を以て、札幌麥酒會社の仕事に力を添へて呉れぬかと頼んだ。植村氏も以前とは違つて毎日會社に出勤する譯ではないから、喜んで之れを承諾せられ、二十七年の春頃から麥酒會社の經營方面に力を注がれたが、恰かも日清戰爭の勃發に伴ひ、連戦連勝の勢ひは一般財界の活氣を振興し、ビールの需要は大いに増加するに到つた。従つて札幌麥酒に於いても販路が大いに擴大し、設備の擴張を斷行すると同時に社務も頗る繁忙を極む様になつたので、最初は炭礦鐵道と兼務であつた植村氏も掛持を許さぬやうな事情になり、明治二十七年の五月に氏は専務取締役として札幌麥酒會社の爲めに全力を注ぐ事となつた。爾來植村氏は同會社の經營一切を擔任し、醸造業

の發達に力を注がれ、幾多の困難にも遭遇したが巧みに之れを切抜けて、社業の基礎を固め、三十九年に麥酒會社の合同が行はれ、新たに大日本麥酒株式會社が創立されると同時に、常務取締役に任ぜられ、三十數年間斯業の爲め熱心に貢献されつゝある。

抑々我國に於けるビール醸造業の濫觴は、明治九年北海道開拓使廳が同道の農業の奨励旁々ビールの原料たる大麥及ホップを栽培し、ビールを醸造したるに始まつてゐる。開拓使廳はビールの醸造を計畫するや、久しくドイツに留學してビール醸造法に精通せる中川清兵衛を採用して仕事を擔任せしめ、明治九年九月に札幌區北二條東四丁目に醸造所を建築し、米國種麥を用ゐ、ドイツ法を以て醸造を開始し、翌十年から製品を東京に輸出した。其の成績が相當に良かったから、其の後屢々種子を獨米の兩國から輸入し、之れを官園に於いて栽培して材料に供すると同時に、又廣く一般農家にも配布して種子の改良を計り、ホップも亦明治十年四月に札幌に於いて之れを栽培し、原料全部を北海道産に依つて醸造するの計畫を立てた。斯くて年と共に技術も進み、又需要も増加し、最初は年額僅か二百石を産するに過ぎなかつたが、十三年頃には五百石を醸造する迄に至つた。其の後此の醸造所は物産局、工業局等の管轄を経て十九年北海道廳の所管に移つ



たが、同年暮に舊開拓使の遺業が悉く民間に移さるゝに當つて、一時大倉組の手に依つて、經營された。其後間もなく澁澤榮一、大倉喜八郎、淺野總一郎の諸氏が協議の上、株式組織を以て經營する事となり、明治二十一年資本金七萬圓を以て札幌麥酒株式會社が創立された。澁澤氏は其の委員長となり、大倉、淺野の兩氏が委員に就任し、鈴木恒吉氏は委員總代となつて、札幌に於いて業務を擔當する事となつた。之れより先き澁澤、淺野の諸氏はビール醸造の有望なる事を認め、且つ毎年外國より輸入さるゝビールが次第に増加するのを防遏する目的で、東京に一大麥酒醸造所を起す計畫があつたが、當時未だビールの需要は一般的に行はれて居らず、且つ北海道は麥作に適し、原料の麥芽を自給し得る便があるので、創立の困難を豫想さるゝ新計畫を見合せ、大倉氏と力を合せ此の歴史附の醸造所を經營し、之れを發達せしむる事となつたのである。之れと相前後して東京に惠比壽、大阪に朝日、横濱に麒麟の諸麥酒會社が起り、更に後年に至つて保土ヶ谷に東京麥酒、尾張半田にカプト麥酒の二會社が生れた。然るに一方、外國ビールの輸入は次第に増加し、明治二十四五年頃には一ヶ年の輸入高四十萬圓の多きに達するに至つたので、政府は之れを看過す可らざる問題なりとし、其の防遏策として極力國內のビール醸造業の獎勵に努めたけれども、當時は未だ我國の工業界は幼稚であつて經驗に乏しく、遽かに其の目的を達する

事は出来なかつたが、二十七年頃に至つて漸く内國製品の普及を見る様になり、三十年頃に至つて全く其の輸入を見ざる様になつた。當時に於ける麥酒會社の主なるものは、札幌、大阪、日本及び麒麟の四會社であつたが、醸造業の發達するに伴つて各國同業者間に激烈な競争が行はれ、果ては採算以上の値下を行ふ様な有様で、折角勃興した麥酒醸造業も寧ろ其の發達を阻害される様な傾きがあつた。各會社の當事者も此の無益なる競争の不得策である事を覺り、明治三十九年に至つては札幌、日本、大阪の三麥酒會社合併の議が持上り、數回に亘つて協議した結果、同年三月三社を合併して、新たに大日本麥酒株式會社を設立するに至つた。其の後の發達は世人熟知の如くであつて、或は東京麥酒其他の會社を買收し、工場を増設擴張を行ひ、現在に於いては大日本麥酒株式會社のみにも一ヶ年の醸造石数は六十萬石以上を算し（製造能力は七十餘萬石）、全國に於ける醸造石数は一ヶ年約百萬石を算するの盛況を呈して居る。明治二十五年頃、一ヶ年の醸造石數僅かに約一千石の札幌麥酒會社が日本第一の大麥酒會社であつた事を思へば、其の急速の發達振りは實に驚く可きものがあると言はなければならぬ。（日本産業發達史）



## 三二一、明治中年の財界恐慌時代

### 一、財界の混亂と善後策

明治二十三年から五年に掛けて、我國は非常な不景氣に陥り、金融が逼迫して金利は暴騰し、諸株式は下落して財界は非常な恐慌を呈した。どういふ譯で斯う云ふ現象を呈するに到つたかを説明するには勢ひ遡つて其の由來を述べなければならぬ。元來我國の商業上の趨勢を見るに、明治七八年頃には金融は頗る澁滞し、商業も亦従つて不活潑であつた。然るに明治九年に銀行條例が改正され、公債證書を抵當として銀行紙幣の發行を許されたのと、西南戦争の後國庫財政の危急を救ふ爲めに政府が不換紙幣の發行を増加した爲め、一時商業は活氣を呈し、十二年頃は最も好景氣を齎した。處で通貨が増加すれば物價が騰貴するのは當然の事であつて、景氣の昂騰と共に本位たる銀の相場が騰貴した爲め、明治十三年頃には銀貨と紙幣の相場に少なからぬ差を生ずるに到つた。之れは勿論不換紙幣を増發した爲めであつて、識者の間に之れを救ふ爲めには不換紙幣の銷却をしなければならぬと云ふ論が盛んとなり、政府に於いても亦十四年頃から紙幣兌換の方針を採る様になつた。

なつた。其の影響に依つて明治十五年から十七年頃迄の二三年間は急激に不景氣が招來し、我が經濟界は宛も火の消えた様な状態となつた。併しながら通貨を減少した爲め物價も漸次舊に復し、明治十八年頃には銀紙の差が殆んど無い様になつた。政府當局に於いては此の状態を見て、日本の通貨も漸く落着いたものと認め、明治十九年に兌換の制度を實施する事となつた。處で其の當時は不景氣續きの後を受けた故、金利は非常に低落してゐるし、一面に於いては紙幣が銀貨と兌換せらるる事となつたので、流通は安心であるのみならず、金利は安いものだから二十年の春頃から急に事業熱が勃興し、新規事業の計畫、在來の各種事業の擴張等が續出し、曾つて見ざる事業熱の高潮時代を現出し、株式の如きも僅かの間に驚く可き騰貴を來たしたのである。

斯くて二十二年頃は其の頂上に達したが、明治二十二年には風水害の爲めに米作が非常な不作で米價が騰貴し、且つ之れに關聯して當時に在りては非常に巨額なる二千五百餘萬圓の輸入超過を來たした。従つて正貨の海外輸出を見たので、市場の金融は急激に逼迫を告げ、其の反動として株券類は下落の勢ひを呈し、此儘に放任する時は我が商工業の前途に多大の障害を來たす可き危険の状態に陥つた。詰り分り易く申せば此時の金融逼迫と云ふものは、事業熱が餘り盛んになつた爲め十の力しか無い者が、十三、十五の力を用ゐようとした結果であつて、本當の實力よりも上走りし



た景氣に災ひされたものであり、中には事業を中止する者も出で、會社の破産せんとする窮境に陥つた者も少なからずあつたのである。私は銀行業者として直接金融界の仕事に携つて居る關係上、何とかして此の危急を救はなければならぬと考へて種々と盡力したのであるが、一口に救済と云つても實行問題となると仲々容易に行はるゝ譯のものではない。殊に當時大阪方面は最も金融逼迫を極め、之れを放置して置く場合には財界に大混亂を來たす形勢が顯著であつたので、時の大藏大臣松方公も善後策攻究の爲め大阪に赴いたが、日本銀行總裁河田小一郎氏も急遽大阪に駆せ參じ、私と安田善次郎氏も亦善後策の相談に與つて大阪に赴き、救済方法に就いて頭を悩ましたものである。併し事は緊急を要するので、手取り早く緊急策を講じなければならぬから、研究の結果新たに見返品擔保の制度を實行して日本銀行が融通の道を開く事とし、一時の危急を救つたのである。此の見返品擔保の制度は應急策として一時的に採用したものであつたが、此の便法は金融界の圓滑を期するには頗る適切な方法であるので、明治三十年頃に日本銀行條例の改正に際しては、見返品擔保の制度が確立して、手形割引の保證に供せられる事となつた。

此の當時の事業熱の勃興と云ふものは、全く想像以上であつて、其数は殆んど數ふるに遑ない程であつたが、確實な計畫の下に萬全を期して着手されたものは比較的少なく、多くは株式の賣買を

目的として起つた所謂泡沫的の會社が多かつた。景氣の好い時代には何時でも斯う云ふ傾向があつて、歐洲戰亂當時にも此種の事業計畫が少なくなかつた様に思はれるが、それでも其の當時は海外に對する販路が急進的に増加したのであるから、製品のハケ口は非常に激増した譯である。處が明治二十三年當時の海外貿易の状態は頗る微々たるもので、殊に輸出方面は頗る不振であつたから、株式の賣買を目的とする山師連の事業が圖に當る筈がない。而も財界の恐慌と同時に善良な會社も泡沫會社と同一視せらるゝ様になり、一般世間では其の拂込みを躊躇する有様で、健全な發達をなすべき事業會社にして不良會社の捲添を喰つて、窮地に陥つたものが少なくなかつた。併しながら此の金融逼迫と云ふ大洪水の爲めに、不良なる會社は大抵洗ひ出されて、潰れるものは潰れ、健全にして將來有望なものだけが篩にかけられて残つた譯であるから、當時の難關を切り抜けたものは、其後大抵順調な發達を見ることが出來たのである。

## 二、戰後經營に就いて警告

日清戰役後我國の財政經濟は非常な膨脹を來たしたが、民間に於ける各種事業も亦大いに勃興し、之れが爲め明治三十年頃には物價は、戰前に比し三割位から六割位の騰貴を來たし、金利は漸次昂



騰して金融の逼迫時代が再び全國に亘り現出され、殊に大阪方面は甚だしかつた。之れは要するに戦後過度の膨脹を來たした結果であつて、勢ひの然らしむる處實に止むを得ざる次第であるが、此の不自然なる膨脹は決して國家の前途に益のあるものではない。戦後經營と云ふ事は却々難しい事であるが、其の方策を過れば禍根を後日に残す事となる。それで私は戦後經營に關しては屢々不自然なる膨脹を戒め、機會ある毎に之れを論じた。

當時子爵が戦後經營策に就き抱懷せられてゐた意見の大體を、龍門雜誌より左に抄録して參考に資する。(編者)

『日本の商工業が既往二十年の間に大いに進んで來たと云ふ事は、政府當局が商工業の繁盛を希望して、政治上相當の保護を與へた事が有力の原因であらう。併し商工業界の人々も自ら孜孜として勉強した事が主なる原因である事は申す迄もない事であつて、其外に偶然に僥倖を得たと云ふ事も幾分含まれて居る。處で此の二十年間の進み方と云ふものは、假令非常に進んだとは云ふものの、詰り相當の順序を追うての進み方ではあるが、さて今日(明治二十九年)以後即ち將來の經濟と云ふものは一躍して大いに進まなければならぬ重大責任を齎した。それは申す迄も無く日清

戦役の齎した結果である。此點を考へると喜ばしいには違ひないが、一面何うしたら適切な進み方をなし得るか考へれば、殆んど寢ても寢付かれない程の心配である。何となれば過去に於いては、相當の順序を追うて我が商工業が進んで來たのであるが、今後急激な進歩を望んで、若し一步を過る事があれば忽ち大なる頓挫を來たして、却つて不幸を將來する事になるのである。此點は國民舉つて大いに考へなければならぬと思ふ。元來私は今日の經濟の發達に就いては、政府はもう少し力を緩かにする様であつて欲しいと思ふのである。兎角急激なる發達を期する場合に、急激なる變化を生ずるのが常であるから、政府が進み過ぎた積極政策を取つては、或ひは中途に跌きはしまいかと云ふ様な心配が無いでもない。日本の商工業は自身の力もあるけれども、多くは政府の指導獎勵が原動力となり、之れに導かれて進んで來た有様であつて、謂はゞ政治方面のお供をして之迄育つて來た様な實狀である。従つて不羈獨立の氣力に乏しい。國として眞に隆盛を期するには商工業の發達を助長し、海外貿易を盛んならしむるにあるが、申さば一國の盛衰は商業の振不振に依つて定まるものであつて、言葉を換へて言へば一國の商工業を盛んならしむる爲めに、卓越せる政治家も必要であり、之れを保護する軍人も必要であると言ひたい。然るに今日迄の商工業の進歩と云ふものは、政治に追隨して今日に到つたのであつて、現在も亦それ



と同様の立場にあるのである。然るに支那と戦争をした結果、軍備を擴張しなければならぬから、それが爲め租税を増すと云ふ方針で餘りに急進に過ぐる時は、若しも一步を過らば大なる損害を惹起しはせぬかと懸念せらるゝのである。現に此儘で進んで行けば、今後紙幣兌換に差支へを生ずる迄に到りはせぬかと心配して居る人も多数あるし、又現在企て、居る鐵道或ひは工業が中途で蹉跌し、丁度明治二十三年頃不換紙幣増發の爲め紙幣が下落し、銀貨の騰貴を來たし、諸物價沸騰の大騒ぎをやつた様な恐慌時代を繰返しはせぬかを恐れてゐる人もある。其の證據には明治二十九年の三箇月間の貿易は、七八百萬圓であるが、輸入が多く輸出が少いから、今後紙幣が増すに従つて段々物價が高くなり、且つ通貨が殖える爲めに企業熱が無暗に進んで、さらでだに殖えた通貨を猶膨脹させる様になる。斯く物價が高くなれば安い品物が他國からどしどし輸入される事は當然の勢であつて、既に其の傾向が見え初めて居ると主張して居る者もある。併しながら私自身は必ずしも之等の説に賛成するものではない。今日着手されて居る鐵道事業なり或ひは其他の事業にしても、頗る多数の事であるから、玉石混淆たる事を免れず、其中には失敗に歸するものもあらうし、正當な道を辿つて發達するものもあらう。たゞ其の不良な素質を帯びて居る企業が多い場合には、それが經濟界に直接悪影響を及ぼして、明治二十三年の如き恐慌時代を出

現せぬとも限らぬ。而かも若し此の懸念が不幸にして的中するに於いては、以前よりも二倍三倍の手強い反動を現出するであらうから、政府當局も國民自身も此點に關して大いに戒心する所あらねばならぬ。今日の經濟界が大いに喜ぶべきものと同時に、甚だ憂ふべきものがあること云ふのは實に此の意味である。されば政府當局に對しては、積極政策を取らるゝに就いても、餘り進み過ぎたやり方をされて當業者を過らしむる様な事が無い事を希望すると同時に、國民に對しては上調子な時の勢ひに迷はされる事なく、事業の經營並びに計畫に就いては世の進みと云ふものをよく考へ、時機を取り逃がさぬやうにすると同時に、熱に浮かされると云ふ事を絶対に避け慎重に精査した上で萬々間違ひないと云ふ成算ある仕事でなければ、之れに手を染めないと云ふ方針を以て進みたいと思ふ。先年普佛戰爭の結果戰勝國のドイツは戰勝氣分に酔ひ、無暗に企業熱が勃興した爲めに、貨幣が大いに膨脹して勢ひ物價が騰貴した。それが爲めに輸入が増加し商賣上の競争に於いてフランスの爲めに打負かされ、數年の間にフランスから取つた償金の半分は取り戻されたと云ふ實例もあり、又當時ドイツの各會社は株式の相場を大いに引上げたけれども、直ちに下落してしまつた實例もある。今日の日本は恰かも戰後のドイツと同様な立場に置かれて居るのであるから、其の轍を踏まぬ様に十分の用心をする事は、朝野舉つて心掛けなければ



ならぬ重要な問題である。國庫の歳入出の豫算に就いては、私一個の考へでは些か度を過ぎて居ると思はるゝけれども、既に定まつた事であるから今更論すべきではない。併しながら政治なり軍備のみが進んでも、一國の商工業が進まなければ、富國強兵の實を擧げる事は不可能であるから、お互ひ國民は此の重大なる責任を覺り、今日の時世に處する適當の措置を過らぬ様に心掛けられん事を切望する次第である。」

### 三、幣制改革尙早論を主張す

日清戦役が我國の勝利に終つて、我が戦後經營が頗る大問題であつたと同時に、一面に於いては幣制改革といふ大問題が起つて朝野の間に盛んに論議された。幣制改革の問題に就いては、松方正義公の追憶談に其の大體を述べることとして、茲には重複を避けて極く概略を申すと、日本に於いては金本位制を採用するがよいか、或ひは銀本位制を採用するがよいかといふ事は、抑々明治初年以來の懸案であつた。而して一番最初には歐米先進國の制に則り金本位制を採用したのであるが、我國の貿易の相手は當時にあつては主として支那であり、支那は銀貨國であるから、之れと貿易するにはどうしても銀本位制を布かなければ巧く行かぬので、其後我國に於いては銀を以て兌換する

制度に改めた。處が一方がよければ他方が悪くて、發展途上にある日本としては、どうしても確固たる幣制を樹立して海外の信用を確保しなければならぬといふので、政府の大官及び學者、民間有力者を網羅した貨幣制度調査會といふものが設けられた。此の調査會で議論が區々に岐れ、金本位制を主張する者もあれば、銀本位制を支持する論者もあり、又金銀複本位制をとるが最もよいと云す者もあつて殆んど其の歸結する處を知らなかつた。處が我國は日清戦役の結果、支那から二億數千萬兩の償金を得る事となつたので、時の總理大臣兼大藏大臣松方公は、此の償金を以て金本位制を斷行する事に肚を決められたのである。

金本位制の採用は理論上から言へば至極適當な事である。併し實際問題として之れを見るに私共は時期尙早を叫ばざるを得なかつた。何しろ我國の貿易は殆んど支那相手と云つてよい位の時代であるから、金本位制が實施されるとなれば、第一に打撃を受けるのは此の方面である。従つて折角勃興の機運にある紡績事業の如きは最も打撃を蒙らなければならぬ。此の紡績事業を始めとして我國の産業界の蒙むる不利益といふものは、實に非常なものである事は明かである。それで私共は同志と共に盛んに反對の論陣を張つて、金本位制即時採用の不可である事を主張し、假すに今後數年を以てし、周圍の事情が金本位制採用に適當するに到る時機まで、之れを延期するがよいと説いた



のである。私共の説に共鳴して金本位制採用に反対する論者は頗る多く、政府大官中にも亦時期尚早を強硬に唱へる人が尠くなかつたので、幣制改革問題も一時は反対論に壓せられて、中止の運命に立ち到るらしい傾向を呈したが、松方公は斷乎として尙早論を斥け、議會の協賛を経て大英斷を以て金本位制を實施された。それは明治三十年春の事である。

果して私共が憂慮した如く紡績業者は窮況に陥り、對支貿易は火の消えた様になつた。政府は之れを保護する爲めに低資融通其他の救済策を講じたけれども、其の影響が大きいだけに急に立ち直る筈がなく、其他の事業も殆んど打撃を受けて、其の影響の及ぶ處は實に莫大であつた。併しながら諸制度の改革に當りては、程度に大小こそあれ、動搖の伴ふのは自然の勢ひである。幣制改革に就いては私も熱心に時期尙早を主張し反対した一人であるが、後日に至つて熱慮するに反対を唱へたのは全く私の短見であつた。そして猛烈な反対を排して幣制改革を斷行すべく大英斷に出でられた松方公の先見の明に敬服したのである。何故かといふに、事新らしく申すまでもなく、日露戦争は我が國運を賭したる大國難であつたが、先立つものは軍費である。如何に軍隊が勇敢であつても、軍費が續かなければ唯敗北あるのみである。而も日本は軍費の大部分を外債に俟たなければならぬ苦しい立場にあつた。此際に於いて若し日本が金本位制を採用して幣制を確立して居らなかつたな

らば果して何うであつたらうか？思ふだに肌を粟を生ずるの感がある。

澁澤子爵は嘗て貨幣制度調査會が設けられた時、我國當時の貨幣制度を改正すべき必要は尙後年に屬すること、貨幣制度改革尙早論を主張せられたのである。處が明治三十年二月政府が愈々幣制改革を斷行し、金本位制を採用せんとするに當つて、子爵は大要左の如き意見を當時の中外商業新報紙上に發表せられてゐる。(編者)

『余の意見は貨幣制度調査會の當時に於けるものと敢て異なる所なし、尤も方今我經濟社會の情勢其當時と異なるものあり、又政府の財政計畫大に其事情を異にするものあり、隨て財政上の必要に應ずるが爲め勢已を得ず現行の貨幣制度を改正して金貨本位を採用せんとするものなれば、余は敢て絶對的反対を主張せんとするものにあらずと雖も、抑々一國の貨幣制度を動かすが如きことは最も慎重を要せざるべからず、若し之れを改正するに就いて一步を誤ることあらんか、幣害顯著なるものあるが故に輕々之を實施すべきものにあらざるを信ず、曩に英國政府は印度幣制調査委員の建議を容れて輕々幣制の改革に着手したりしが、其政略は殆んど失敗に歸して當局大臣亦議院に對して失策を公言するに至れり、殷鑑遠からず現に印度に在り、若し我國にして今日の



貨幣制度を改正せんか、或は踵を回らさずしてこの悔あらんも亦未だ知るべからず、故に余は可成的現行の貨幣制度を改正せず、他日歐米金貨國其制度を墨守する能はずして、終に金銀複本位制を採用する時に當り、我國も亦こゝに始めて之に同盟して現行の制度を改正決行せんことを欲するものなり。(中略)

若夫事情已を得ずんば之を改正する又可なり、而してこの際之を改正する、或は好時機なるやも知るべからずと雖も、金貨本位を採用せんとするに就て余が最も懸念に堪へざるは、日本銀行正貨準備充實の一事なりとす、世には現今同銀行の所有金額若くは今後收容すべき償金等を以て充分なりとするものあるが如くなれども、焉ぞ知らんこの收容償金の大半は仕途既に定り、而して其最も多くは臨時費として海外に反出せらるゝものなり、若しこの時に當り其準備之しきを告ぐるが如きことある時はそれ將た何を以てか其充實を計らん、是れ余が正貨準備に就て懸念するの一なり、又世には海外貿易大に好望を抱くに足るものあり、將來輸出は輸入に超過して其結果正貨我國に輸入し、而して其準備金増加の傾向を有し、若しくは其欠乏を補給するものあるに至るべしと雖も、焉んぞ知らん彼の保護税に等しき銀價下落の後援あるに拘はらず、昨年我海外貿易は假令米國商業の沈滞と戦勝後輸入品の需要多きに由りしとは雖も、常に我に逆にして輸入

大に輸出に超過したるにあらずや、又見ずや印度幣制改革後同國に於ける海外貿易の情況果して如何なりしかを、輸入は常に輸出に超過し大に困難苦楚を感じつゝあるにあらずや、果して然らば我國貨幣制度改正後の海外貿易或は輸入益々輸出に超過するものあるやも未だ知るべからず。而して其結果正貨の流入すべき望なきのみならず、正貨滔々として流出するが如きことある時に當り、それ將た何を以て其充實を計らん、是れ余が正貨準備に就いて懸念するの二なり、而してこの際金貨本位を採用するが如きことあらんか、こゝに貨幣制度は則ち完備するを得べしと雖も、兌換を望む者も自然多きを加ふべき事情あるが故に、之に備ふる金貨の準備に至りては益々基礎の鞏固を計り又其額多くを要すべきなり、假令ば現行の制度にして其準備兌換券發行額の三分一を以て足れりとするものは或は二分の一若しくは其以上の多きを要せんとす、然るに之に要する正貨準備それ將た何に求めんか、是れ余が正貨準備に就いて懸念するの三なり、故に若し正貨準備毫も懸念するに足らざるが如き良方法あらんか、余は必ずしも金貨本位を採用するに就て反對するものにあらざるなり。(中略)

『正貨準備充實の方法回收償金のみを求むるを得べからず、又海外貿易上輸出超過の結果に求むるを得べからずとする時は、想ふに公債に依て外資の輸入に求むるの外なかるべきなり、果して



然らば今回の金貨本位を採用せんとするの眞意は、公債に依りて今の財政計畫を完成せんとするにあるが如くなれども、若し特に之が爲めに現行の貨幣制度を改正するが如き要あるに就ては、之と共に後患を貽すに就ても亦大に考ふるの要あるを知るなり。』

——不換紙幣を一掃して、貨制の基礎は鞏固となり、産業勃興し、貿易増進したる點に就きて最も注意すべきは、金本位の金銀複本位に變じたる、貨幣が不換紙幣改良の結果にて事實銀本位となりたることなり、此銀本位が事業に於ける再び日本の外國貿易に大困難の原因とはなれり。一千八百七十三年（明治六年）獨逸が金本位制を定めてより、銀價下落に次いで爲替相場動搖し、金貨國と銀貨國との貿易間々阻害するに至りたる事情は、此に絮說せず。日本は元來東洋銀貨國の中に位置し、明治の初め金本位の時すら貿易銀を制定したる程なれば、不換紙幣の末に銀貨國となりしは便利を感すべきに似たれども、貿易の大約三分の二は金貨國との間に行はれ、清國其他銀貨國との貿易は三分の一に過ぎざるが故に、爲替相場の動搖に苦痛を感する大ならざるを得ず。産業者は考慮の大部分を爲替相場に注ぐを餘儀なくせられ、貿易は投機事業の如くなれり。明治二十七年金に對する銀の比價三十餘となりてより、産業及び貿易は爲めに打撃を蒙り、銀貨

の下落は三十年には最低三九・七に達せり。

此際に日清戦争は破裂したれど、幸に戦期長からず、日本の全勝に歸して産業に大なる刺戟を與へたり。先見ある當局者は償金三億五千萬圓を金貨にて受取る條項を設け、此の一部は幣制改革の用に供したり。即ち國會の協賛を経て、貨幣法は三十年三月を以て公布せられ、實際施設の宜しきを得て金本位制は此に確立せり。

此確立は各方面に良好なる結果を及ぼし、依つて物價の平準を有ち一般の取引を安全ならしめ、爲替相場の亂調を正し、貿易を圓滑ならしめたるは無論なり。其最大効果は日本の公債を海外市場に取引するに至りたるにて證明され、日本を世界經濟社會の一員たらしめたるにあり。是に於て日本の貿易發達史を回顧せば、第十九世紀の中葉に於ける開國は、其末年に於ける金本位制の確立に依りて完成し、其確立は戦後事業の勃興と共に、日本の貿易に一大進展をなさしめたり。

（開國五十年史中の外國貿易、益田孝）

貨幣制度改革に對する意見は、問題が重要であつたゞけ當時の朝野の喧囂を極めたところであつた。依つて當時政治家實業家の意見の二三を左に掲げる。（編者）



「金貨本位を採用するの國家に利益なるは世既に定論あり、今更余が辯明を待たずして知るを得べし、既に本邦の如き最初金貨本位を採用し之を實行しつゝある時に當り、恰も去る明治七八年の頃かと覺ゆ、正貨の交換を求むるもの頻繁にして、遂に銀貨を併用するの已を得ざるに至り、爾後不幸にして金銀複本位を採るに至りしは轉々余をして遺憾に堪へざらしめたりき、然るに日清戦争の結果圖らずも金貨一時に流入し、今や愈々金貨本位を採用するに就いて好時機に際會したるのみならず、方今我國に於ける經濟上及財政上亦金貨本位を採用し、以て内外の資本を共通し而して圓滑に其融通を計らざるべからざるの已を得ざるものあり、若夫この時に當り現今の軍備擴張を中廢して財政計畫を變更するが如きことあらば、或は現行の貨幣制度を改正せずして荏苒歲月を移し得べきやも知るべからざれども、財政計畫の完成を期して而して我が經濟社會の發達を計らんと欲するに於ては、斷然この好機會に乗じて金貨本位を採用するにあらずんばそれ將た何れの日にか之を求むることを得べけんや、是余が多年の冀望を實にして金貨本位を採用せんと欲する所以なり。

昨今世に傳ふる政府案なるものを見るに、金一に對し直ちに銀三二・三四六の割合を以て本位を

定めんとするに在るが如くなれども、余の意見に依れば其割合は須く現時の市價を標準として其割合を定め可成的金銀兩貨の間に差異を生ぜしめず、而してこの差異の爲めに物價に變動を與へしめず、又債權者及負債者等に對し利益を與奪するが如き弊害なからしめんことを欲す、又世の所謂政府案なるものには金銀兩貨を併用せんとするに在るが如くなれども、苟も金貨本位を採用する以上は彼のグレシム法の行はるゝが如きことは努めて之を避けざるべからざるの要あり、而して余が金貨本位を採用せんとするに當りて之を實施する方法は、可成的左の如くならんことを冀望するものなり。

(一) 金銀の比例は市價を標準として其割合を定め、金銀兩貨の間に可成的較差を生ぜしめず、本位は金貨一圓を以てし貨幣の種類は五圓、十圓及二十圓の三種に改鑄する事

(二) 補助銀貨は一圓、五十錢、二十錢、十錢の四種とし十圓までを法貨とする事、但補助銀貨は現今の品位(八百位)を改めて七百位若しくは七百五十位として可成的之を劣等ならしむべし

(三) 従來の一圓銀貨は直に自由鑄造を停止し、既に通用せるものは可成的速に之を引揚げ若しくは補助銀貨に改鑄する事

(四) 従來發行せる政府紙幣、銀行紙幣及兌換銀券は可成的速に新鑄金貨若しくは兌換券と交換する



事。

(五) 兌換金券は五圓、十圓、二十圓、五十圓及百圓の五種を發行通用せしむる事

(六) 改正法律施行期限は各般の準備成るを期し可成的一ヶ年の後に定むる事

正貨準備に就いては昨今世人の懸念せるが如き巨額の充實を計るが如き要なきを知る、勿論兌換の基礎を更に鞏固にし又愈々金貨本位を採用する時は、自然兌換を求むるもの頻繁なるに至るべきは避くべからざる事なるが故に、可成的其充實を計らざるべからずと雖も、若夫俄に昨今の通貨額より更に多きを要するが如きことなからんには、現今日本銀行の所有金額若くは今後回収すべき償金等の金額を以て其準備に充つ、蓋し充分なるも不足を感ずるが如きことなからんか、假令ば現今政府紙幣及兌換銀券等其通用額二億圓と見るも、之に對する正貨準備は金貨一億圓を以て足れるにあらずや、果して然らば既に發行せる一圓銀貨にして金貨本位を採用すると同時に直に其交換を求め來るも、此正貨準備一億圓以外の金貨を以て其交換に應ずることは敢て難きにあらず、况んや其交換すべき銀貨は直に改鑄して補助貨幣とし以て世の流通に供せしむるに於ておや、世には正貨準備の充實を計るに就いて甚だ之を憂ふるが如きものあり、勿論歐米各國と其貨幣制度を同するに於ては内外資金の共通を計るの便を生ずると同時に、正貨の流出急激を加ふ

るの危険なきにあらずと雖も、之を豫防するの策敢て至難の業にあらず、他なし日本銀行この時に際し須らく通貨の收縮策を採るの一事なり、同銀行正貨の流出急なりと認むるや之と同時に通貨の收縮を計る時は其結果物價下落し、物價下落する時は自然輸入減少して輸出増加し之が爲めに正貨の流出を防止し又其流入を促す効果あるべきなり、而して爲換の作用上假令不利なるも之を忍んで特に正貨を輸入せんとするが如きことは殆んど爲し得べからざることにして、現に余が倫敦に在りし當時動もすれば同市場の正貨を奪はんとするものは佛國なりしと雖も、爲換の作用に依りて佛國之を吸收するの結果英蘭銀行の正貨準備の減少を示すや同銀行直ちに之が防止の計を施し、而して之が爲めに其爲換に取りて不利(アンフェボラブル)となるや忽にして倫敦の正貨流出止んで再び其正貨の額舊に復し、其多寡増減二三百萬磅を超ゆることなきを認めたり、故に正貨の流出を防止し若しくは其流入を促すべき一事は専ら日本銀行の如き當局者の手腕如何に存し、機に臨み變に應じて其計を施す否やに依るのみ、正貨準備の事又世人の憂るが如きことあらんや。』

田口卯吉氏の改革反對論

田口卯吉氏は嘗て貨幣制度調査會に於て萬國複本位説を主張し、直に實行の準備に着手すべし



と主張せられたるが、財政を整理せんと欲せば必ず地租増徴若しくは銀貨自由鑄造廢止を行はざるべからざることを主張し、昨年(明治二九年)十月其意見を發表せられたり。金貨本位問題に關する氏の意見は左の如し。

『金の銀に比して變動多きは貨幣制度調査會の調査既に之を證明せり、故に金貨本位を採用するは余の欲せざる所なれども、財政整理上銀貨自由鑄造廢止を行はざるべからざるの必要に會せり、地租の増徴にして行はれずんば銀貨自由鑄造廢止を行はざるべからず、此事たる余の素論に反するも財政の紊亂は余をして已むを得ず之を唱へざるを得ざらしむるに至れり、然れども余の聞く所を以てすれば、今日金貨本位を採用せんとするの理由は、公債を海外に賣るに便ならしめんが爲なりといへり、金貨本位採用の理由果して斯の如くんば余は斷じて反對せざるべからず。

余は我國に金貨本位を採用して海外に公債を賣らんとするに付いては、其却て賣れざらんことを希望せざるべからず、現に加奈陀の如きは三朱半の公債を發行せんとし、倫敦市場に於て土耳其埃及等の四分利附公債が百磅内外の價格を保ち居れば、若し五分利附公債を賣出さんか必ず百三十圓位の市價を保つことゝなるべし、果して然らば今後低利公債借換を行はざるべからざる場合に於て、之を決行するは公債所持の外國人が不承知を唱ふべくして内國同様に之を行ふを期すべ

からざるなり、是れ余が其却て賣れざらんことを希望する所なり。……』(中略)而して從來の一圓金貨二分一を以て一圓とし、之を標準本位として銀貨の自由鑄造を廢止し、現行の一圓銀貨は新金貨と同一の割合を以て通用する方法に就いての意見如何と云ふ間に對して『夫れ銀貨自由鑄造廢止とは銀貨の價格をして金貨と同一の價格を保たしめんとする所以にあらずや、然るに從來の一圓金貨二分の一を以て一圓とするは、是れ金一に付き銀三二とするものなるが故に、現今の金貨相場百九十二圓五十錢即金一に付き銀三一・一三三をして直に金一に對して銀三二とするものにして、百圓に付三圓七十五錢だけ銀價を下すものなり、是れ豈矛盾の甚しきものにあらずや、斯の如くんば寧ろ金貨の自由鑄造を廢止するを以て當を得たるものとなすなり、夫れ斯の如く銀價を下す自由鑄造を廢止せざるも誰か之を貨幣に鑄造し自ら求めて百圓に付き三圓七十五錢の損失をなすものあらんや、是れ余が右の方案に於ける銀貨自由鑄造廢止を無意味とする所以なり、斯の如くんば我國の銀貨は直に海外に流出し我國は全く金貨のみとなるべく、而して百圓に付き三圓七十五錢の差額は全く政府の損失に歸すべきなり。

斯の如き方案を以て金貨本位を採用したる結果、直に經濟界に及ぼすべき影響は明瞭なり、前に云ふ如く我國は全く金貨のみとなり、百圓に付き三圓七十五錢の差額だけは物價直に騰貴すべく



唯我國が銀を排却して金を採用する結果として、銀價下落し金貨騰貴することなからんも到底物價騰貴は免かるべからざるの謂にして經濟社會は愈々混亂すべきなり。之を要するに右の方案を以て金貨本位を採用するものとせば、政府損失を爲し經濟社會混亂して、而して財政の整理上寸効なきのみならず却て其紊亂を甚だしくすべきなり、故に余は果して政府が右の方案を以て金貨本位を採用せんとするに於ては、斷じて之に反對せざるべからず。』

大倉喜八郎氏の幣制改革論

『……抑々現今の幣制を改革するの要ありや否やは實に我經濟界の一大疑問にして余の見る所を以てすれば、成程今日銀貨國たる我邦が金貨國に對する商賣は、金銀比價變動の爲に多少困難する場合もあらん、多少の不利ある事は到底免れざるべきも、寧ろ銀貨國たるの故を以て銀價下落の影響を利用して得たる利益の更に大なるものあるに若かんや、試に見よ銀價下落の爲め金貨國との貿易上生糸、製茶、石炭等重要品の輸出は勿論尙ほ進んでは歐米の諸製造品と競争し得る迄に殖産工業を發達せしめ、其結果我邦の富力を以て増大せしめたるものは是豈銀貨國たる故にあらざるなきを得んや。』

果して然らば我邦の爲に圖るに此利益を繼續し得る限は繼續して益々海外へ輸出を獎勵し、金に

もせよ銀にもせよ本邦に取込み得らるゝ丈を吸収したる後、最早銀貨國たる利益を享有し得られざるに至らば此時に及んで幣制を改革して金貨本位となすも敢て晚しとなさざるなり、何ぞ俄に今更當然享有すべき利益を棄て、金貨本位を採るの要あらんや、幣制を改革するの日は必ずしも今日に限らざるなり。

且つ夫或は財政の計畫上其不足を補はんが爲め金本位として外資輸入に便利を與ふべしといふものもあるも、財政計畫上外資輸入の間に金本位を採ることならば是に不同意を表せざるを得ず、若し財政上果して不足する所あらば經濟界に國境なし外資輸入亦妙ならんも、是即金貨公債を募集して事足るべし、何ぞ殊更に幣制を改革し銀貨國の利益を犠牲に供する迄の手續に及ばんや。

若し一人一己の利害上より觀察するならば金本位は勿論利益ある點もあらん、然るに一國の經濟上より深く其利害を考究する時は今日俄に幣制を改革するの必要なべきを信ず、唯夫戦後財政計畫の善後を圖らんとならば、外資輸入の爲めに金本位を採らんより寧ろ一方には現今の儘に銀價下落を利用して殖産工業を發達せしめながら、一方には地租を増徴して政府の財源を充すべし、蓋し我邦農民の利益は此年銀價下落し物價騰貴したる爲め次第に増大し來りたるにも係らず政府徴收する所の地租稅率は依然として變更せられざるを以て、政府と農民とは利害其處を異に



し政府は収入變更せずして経費の増大(物價騰貴の爲めに)に苦み、農民は地租は變更せられずして収入の多々益々多きに謳歌するの今日、農民は其懐具合の暖なるに従ひ次第に其購買力を増加し、其結果輸入殊に消費品及奢侈品等の輸入を奨励することとなりたるものなれば、此際農民利益の一部を移して政府の財源を充すこととなさば、一面には消費及奢侈品の輸入を幾分か防禦することを得べく、他の一面には因て以て財政計畫の基礎を確立するを得べし、之を要するに銀貨利用の繼續し得らるゝ間は其利益を享有し、政府の財政は地租の増徴を以て補充し行かば是我邦現今の經濟上最も萬全の策にあらずや、然るに今日俄然幣制を改革して金貨本位と爲すが如き早計は余の採らざる所なり。』

### 三三二、事多歲月促

既に數々繰返したやうに、私が官途を辭して實業界に入ったのは御一新の初めであつた。實業界に入ったと言つても、財産を蓄積することが目的でなく、新しく事業を起すと云ふことが私の主意であつたのである。而して當時を顧みると、我國の政治とか、教育とか、軍事とかは日に月に海外の新知識を輸入して進歩して行くにも拘らず、獨り商工業のみは始終政治の奴隸となつて居る傾きがあつたので、私は此の點を非常に遺憾に思つて、どうかして我が商工業の位置を高め度いこの祈念を持つて居たのである。其故に私は爾來政治といふ事の觀念を全然打ち捨て、政府關係の事は成るべく近寄らず、自立で成功し度い意念を持つて居たのであるから、其の爲した事業の迹も實に微々たるものであつた。然るに私の念慮は今申す通り、我國の商工業が共に俱に進歩發達して、商工業者の位置が世の中に重んぜられ、其力の強盛になると云ふ事に繋つて居たのであるから、此點に就いてだけは、微力淺學と雖も私は十分なる心を以て盡力した積りである。

三十年の間孜々として經營したが、已に去年と暮れ今年と明けて夢中に六十年の歲月を經過して



しまつた。古人の所謂「事多歲月促」と云ふ感慨は、常に身邊を離れなかつたのである。既に此の老境に達しては、私も此後の自己の一身の歸趨に就いて考慮しなければならぬ。日本古來の風習から考ふれば、最早還曆に達したる老人は世の煩を避け、悠悠として風月を賞して以て閑日月を樂しむべき處であるから、之れも亦一つの思案だと思つたのである。それに功勞は薄くとも三十年の間實業に従事して、昔に較べて見ると我が實業界も大いに進んだと言ひ得る以上、此邊で自分は社會から身を退いたが可いことはないかとの念慮も生じたのである。

然れども退いて熟々我國當時の情勢を顧みた時、未だ以て心を安んじて退隱を許すべき時ではないと云ふ觀念を惹起さざるを得なかつた。即ち三十年の昔に較べると商賣の程度も進んで來るし、商賣人の力も充實して來た、又私自身も大なる過失なしに經過して來た、而して生活上に於いても一身を維持する丈けの事は出來たであらうが、併し我國當時の商工業は未だ動もすれば政治の爲めに蹂躪せらるゝ形跡があり、而して商業上の道德は日を逐うて衰頽せんとする有様であつた。しかのみならず我が隣邦の形勢は日に益々急にして、延いて商工業に及ぼす影響は測り知るべからざるものがあつた。斯かる多事多端なる時に當つて徒らに一身の逸樂を希ひ、國家の責務を逃るゝ事は出來ないと信じて、私は尙進んで所謂斃れて後已むまで商賣に従事しなければならぬと云ふ決心

を定めた譯である。

唯私は既に六十有餘の老人であつたから、老朽とか老衰とかの誹りは逃れまい、人間が年を取れば筋骨がそれだけ衰へて來るから、必ず其の舉動座作に幾分鈍い所が生ずるに相違ないと思つた。けれども人間たる動物が智慧と云ふものを度外視して此の世の中を經過する事が出来るならば、筋骨座作の悪くなつたゞけそれだけ弱いと云ふ事にはなる、之れは野蠻世界の人間に於いて見る所である。穂積博士の隱居論と云ふ書物の中に、文明が進んで來る程隱居と云ふものが減じて來る、眞の文明の域に至れば終に隱居といふものはなくなつて來ると云ふ様な意味の事が述べてあるが、此事は即ち智慧と云ふものが進むから、段々年を取つたものゝ效能が餘計になると解釋してよからうと私は思ふ。果して然らば私一身に就いても、貴い智慧と云ふものゝ働きが年を取るに従つて進んで來るものならば、年齢の長する程經驗の増すと云ふことは争ふべからざる事實であらうと考へたのである。且つ學問と云ふものに就いて考へて見るのに、學問の壽命と云ふものが何時まで盡きるか、幾歳までが學問の時代であるかと云ふ事は確定し得られない様である。學校が濟んでしまつたからと言つて、それで學問が終つたと云ふ譯ではあるまい。私は學問と云ふものは其人の生命と共に何時までも存續すべきものであるといふ解釋を下して居る。例へば孔子は「十有五而志于學



三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」と教へて居られる。學に志すのは十五であつても、七十までの間に文字の上には學ぶと云ふことはないが、併し平生學んで居るといふ意味は此中に含蓄されてある。畢竟するに老耄とか老耄とか云ふのも、新知識の欠乏を意味するに外ならないと考へた。夫故に私も老耄とか老耄とかの誹名を被らぬ様に、常に學び常に新知識の注入に意を用ゐる、更に斃れて後已むの決心を以て進んだならば、國家の爲めに微力を盡すことは困難な業ではあるまいと還曆を迎へて考へたのであつた。

澁澤子爵の還曆に際して、中外商業新報紙上に見えてゐる、野崎廣太氏の祝辭の一部を抄録すれば次ぎの如くである。(編者)

——往時封建の世に在りては社會的階級の障壁牢として破るべからず、然るに翁は身を敵歩の間に起して以て幕府を倒さんとせり勇に非ずや、一たび過つて徳川氏の祿を食むや初志鶴勃禁するに勝へざるも、而かも徳川氏の擁護を忘るゝことなし信に非ずや、維新の當時官權最も強く吏員の地位は四民の羨望する處たりしにも拘らず、翁は自ら顯要の地位を一抛して顧みず廉に非ずや。抑々政界に於ける翁の生活は翁が處世の初陣なりしに、當時既に固有の徳性を發揮せるや實に斯

の如し、翁は同時に政治家なり、理財家なり、實業家なり、而して假令末技に屬すと雖も翁が優に書家たり、詩人たり、又文章家たるの技能は全く前記の三大能に掩はれて世に稱せらるゝに至らず、翁が實業社會に於ても圓滿玲瓏の生活を以て今日まで經過し來り、將來益々其高風を發揚せんとするもの、畢竟翁の智能が多面多角なるの致す處たるべしと雖も、抑々又良心の指導に悖らざる先天的の徳性能く其鋭敏なる知能の運用を箝制して、毫も愆らざるに因らずむばあらず。翁が本邦實業界に向つて寄與せし功勞は兒童走卒と雖も記憶する所、即大は鐵道、銀行、鑛山、航海等より、小はホテルの建造、養魚場等の設置に至るまで苟も萬般の商工業皆翁の盡力に俟たざるものなく、維新以來の我商工發達史は眞に翁の履歷と相離れて記述せらるゝこと能はず、翁や身實業界に在りと雖も愛國忠君常に公に奉ずるを忘れず、財政非なる日は樞機に參じて救済を圖り、内治外交急なるの秋は、東奔西走圓滿の終局を見ずむば則ち止まず、彼の法典特に商法の調査に關し翁は政府及學者の選む所、頗る我國情に適應せるを慨し一方には當路に建言し、他方には輿論を喚起して能く其目的を貫徹し政府をして新商法の實施を延期せしめ、自ら委員として之れに列席し縱横論議終に今日の完璧を得せしめたるは誠に記すべきの功績なりとす、翁は獨り國家の公事に止らず、社會若くは團體は勿論一箇人の私事と雖も與て力を致せること誠に算す



べからず、即ち風俗衛生等の改良、公共團體の組織、紛議の仲裁、親戚故舊の匡救等に至るまで毫も遺漏ある事なし、其家庭の如き嚴正なる家法を經とし、懲到なる家訓を緯として組織し、躬ら先づ實踐して破らず、率ある所斯くの如きを以て秩序井然亂るゝの憂なし、抑々皆翁が言、忠信行、篤敬の致す所にして、進んで社會に立てば其敏快なる手腕を振ふも身に敵を受くることなくして凡百の事業悉く舉り、退て家庭に入ては歡語嬉々親しんで狎るものあるなし。

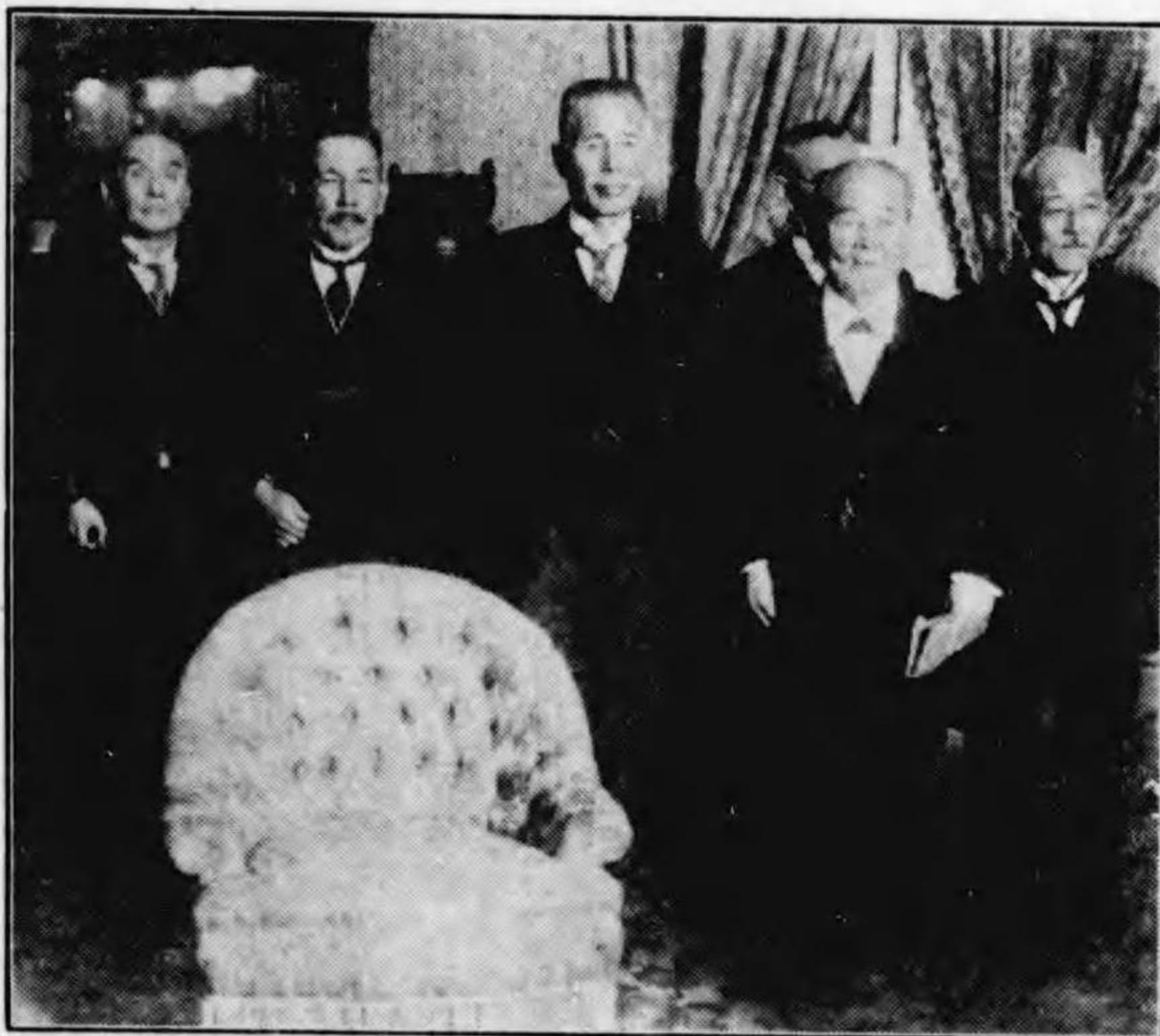
日本人として翁が其本國に盡す所の功勞夫れ斯の如し、然れども翁は獨り本國のみに非ず又實に隣邦に對するの功勞者なり、見よ京城學堂の設置、清國饑饉の救濟等は如何に隣人を愛するの念に厚きか、見よ京仁鐵道及京釜鐵道の計畫、日韓通商協會の設立、清國貸付金の交渉、韓國中央銀行の創立等は如何に過去及現在に於いて翁の腦漿を惱まし、如何に隣國の經濟に資する所多きか、翁は政治上、經濟上及社會上に於いて國の内外を論ぜず、能く其功勞を致せること斯の如く誠に大なり。(明治三十三年六月十七日)

### 三四、還曆に男爵を授けらる

私の還曆に當たる明治三十三年五月、先帝の御婚儀の御盛典が舉行あらせられた際に、私は授爵の恩命を拜したのであるが、これは實に思ひがけない事であつた。

私は度々申した如く明治の初年官途に在つたが、深く列國の形勢に稽ふる處あつて、我國をして將來列國と對峙せしむるには、我が商工業を發達熾盛ならしむるに若かずと信じて、明治元年官を辭して民間に下つた。素より資力も學問も足らぬからして、果してどの程度に進むかは分らぬけれども、當時の商賣の景況からは國の富、國の強さを他國に對比する事も出来なかつた。詰り政治と云ふものは實業から生まれて來なければ可かぬものである、政治は實業を助ける機關である、實業は主にして政治は客である。政治の爲めに實業で金を儲けて、其金で政治を擴張すると云ふが如き自他相反してゐる精神では、日本は逆も發達はしないと云ふことを、私は餘程強く覺悟したものである。故に私は政治界に關する經歷は全然打捨て、向後を一向に商工業に従事し、決して政界に係はることに就いては總て物も言はず、身體も其間に交へぬと云ふ事を深く期念したのである。斯様に覺悟を堅く定めた爲めに、政治に對する名譽と云ふものは私の身體には來るものでもなし





田中首相ノ實業家招待會ニ於ケル澁澤千鶴(八十八歳)  
右カウ 阪谷芳郎男、澁澤千鶴、田中首相、望月選相、大川  
平三郎氏

又受くべきものでもないと思念したのである。故に爾來三十年の間商工業以外の事柄に就いては力めて之れを避け、又嚴に之れを防ぐといふことにしてゐたから、日本の其間の有様では勳章とか爵位とかいふものは總て政治に關する名譽であつて商賣に關する名譽ではないと了解して居つた。夫故に授爵の恩命は實に豫期せぬ事柄であつたから之れを拜受するにも餘程躊躇したやうな譯であつたのである。どういふ御意から斯かる恩命が出たかといふことを全く理解し得なかつたので、一布衣の身を以て授爵の恩命を拜したのには實に意外の感を抱き、恐懼措く所を知らなかつた。商業會議所、銀行集會所、商工業諸會社の人達が、私を招待して授爵祝賀の宴を催して下されたのである

が、私は其の祝賀を忝うして喜ぶよりは寧ろ恐縮と稱する外なく、却つて心苦しく感じたのである。然るに其の人達が私の授爵の恩命は商工業に力を盡し、實業の發達に勉勵した爲めに、其事が天聽に達したのであると云ふ解釋をされてから、初めて聊か心に安んずる事が出來た。而も私に對する授爵の祝宴は、唯單り私の光榮を祝せられる計りでなく、我國の商工業の地位と信用とを高くした證據であるから、商工業の爲めに祝すべしとの趣意に出でられたものである事を知つて、初めて宴に列し、祝賀を受くることを満足し且つ歡喜を得たのである。臣子の分を以て妄りに聖意を付度するは甚だ畏多い事ではあるけれども、私に男爵を授けられたのも、我が商工業をして歐米列國と對峙せしめんとの大御心より、商工業者の地位と信用とを高むる爲め、此恩命を下されたものであらうと拜した。而して私は當時商工業會社の諸君の主催になる宴席に於て、次の様な事を申述べて天恩の有難さに感泣した次第である。

「……顧みれば我が商工業は大いに進歩發達したとは云へ、歐米に比すれば尙非常の相違あるを見る。此際に於いて死馬の骨を千金に購ひ給ひたるは、前途商工業界に良馬の顯れんことを望ませられしに依るであらう。予は實に千金の死馬の骨に過ぎざれば、諸君は今後益々我が商工業界に盡す所あり、萬金十萬金の良馬となり、以て我が商工業を益々隆昌ならしめ、歐米の列國と駢



馳するに至らしめられん事は、予の深く希望して已まない處である。』

子爵が明治三十三年男爵授爵の恩命を受けらるゝや、商工業者は何れも祝意を表する爲めに祝賀會を開いたが、銀行集會所に於ける祝賀會にて故豊川良平氏の述べた祝辭を次ぎに掲げる。(編者)

東京銀行集會所會長、東京交換所委員長、東京興信所評議員會長、銀行俱樂部委員長從四位勳四等男爵澁澤榮一君足下、東京銀行集會所、東京交換所、東京興信所及銀行俱樂部は君が男爵を授けられたるを榮とし、相謀て此會を開き、君及君が令嗣の光臨を辱うし、聊か茲に表祝の典を擧ぐ、願ふに明治初年君の朝を退き野に下て以來茲に凡そ三十年、其間君が銀行の事業に關する功績は某等の特に長く銘記して忘る可らざる所にして、銀行法規の制定は君が在朝當時最も其力を効せる所、銀行事業の經營は君が退朝以後専ら其身を委ねたる所なり、君夙に銀行業者合同の必要を首唱し、明治十年擇善會を起して其牛耳を執り、明治十三年擇善會一變して東京銀行集會所となるや、同業者の推戴に依て會長の重任に當り、爾來二十有餘年間財政經濟に關し、君の首唱に依りて銀行集會所の經營せる事業數ふるに違あらず、而して明治二十年に至りては東京手形交換所の組織成て手形取引の利便大に開け、明治二十九年に至りては東京興信所の創立成て信用調査

の機關始めて備はり、明治三十二年に至りては銀行俱樂部の設備成つて、同業者間親和の關係愈愈密ならんとす、而して是等の事業たる皆君が盡力に依らざるものなく、交換所に於ては委員長として、興信所に於ては評議員として、當初より今日に至るまで各其任に當り、是等の事業皆時運の進歩に従ひ愈々其發達を見るに至れり、君の銀行事業に於ける功績斯の如し、之を要するに君が一身の經歷は我國銀行の史乘と離る可らざる關係を有せり、若し夫れ其他一般商工業の上に於ける君の功績に至ては復茲に某等の讃揚を俟たず、君の名聲は既に天下に高く更に加ふるに授爵の榮を以てす、某等君の爲に之を賀し又我銀行業者の爲めに之を榮とせざるを得ず、是れ某等が特に此會を開き君の光臨を辱うして恭しく茲に祝辭を呈する所以なり。

明治三十三年五月廿八日

東京銀行集會所、東京交換所、東京興信所、銀行俱樂部會員總代

豊川良平

同年五月十八日議決の上澁澤男爵に贈進したる東京商業會議所の祝賀文は左の如くである。(編者)  
東京商業會議所會頭澁澤榮一君に白す本會議所は今回君が授爵の朝命を拜せられたるを慶し茲に全會一致の議決に依り恭で君に對して祝意を表す。



惟ふに維新以降君が主ら我邦商工業界の指導者たる位置を占め、百般事業の經營に就て直接又は間接に力を致し、多大の功勞あるは天下輿衆の公認する所、而かも其顯著なるものを擧ぐれば銀行業、鐵道業、海運業、製造業の如き概して今日の進歩發達を見る、一に君の協翼に由ると云ふも敢て溢美にあらざるを信す、特に明治十一年甫めて東京商法會議所の設立ありし以來組織一たび更まりて東京商工會となり、再び變じて東京商業會議所となる、其の間世況の遷移會員の迭替頻繁なりしに拘らず、之が會頭の椅子は毎に君に向て供せられたり、而して君の此の職に在るや、始終勤勉懈らず銳意以て商工業の發達の爲め貢獻せられたるの功勞は本會議所の偉なりとして永く銘記する所なり。

頃日帝室御慶典を擧げらるゝに先ち國家に功勞あるもの若干名に對し、男爵を授與せらるゝ、而して君亦此の選に膺れり、顧みるに從來授爵の榮典を辱ふするもの多く、皆官界の勳績に由るにあらざれば則ち先世又は父祖の餘蔭に由らすんばあらず、専ら商工業に従事する人にして特に其功績を録せられ爵を授けられたるものに至ては眞に寥寥晨星のみ、而して今君は一商工業者として其盛名、天聞に達し此の不次の寵命を受く、是れ豈に世上一般男爵を授けられたるものと同日の談ならんや、本會議所が君の爲めに祝するの微意寔に茲に在り、蓋し君の如きは素と天爵を樂む

もの、授爵の一事敢て其本領品價を輕重するに足らずと雖も、抑も亦天日赫赫私照なきの盛意に奉對し、君たるもの中心必ず當さに感喜する所あるべし、本會議所亦君が此殊典に接するに於て與て餘榮あり、乃ち所懷を述べて以て祝す。

明治三十三年五月十八日

#### 東京商業會議所

明治三十三年五月十八日澁澤榮一氏の授爵を祝する爲め、東京商業會議所臨時總會席上に於て同會議所より贈進したる賀表に對する澁澤男爵の答辭。(編者)

本日は當會議所に於て臨時總會を開かれ、不肖が今回測らすも授爵の恩命に浴したるに對し、町重なる祝辭を贈與ありしに就ては、一言不肖が以往六十年間に於て經歷せる概略を述べて諸君の御厚意に答へんと欲す。

不肖はもと東京在榛澤の農家に生れ此處に列席せられ居れる同姓喜作氏とは竹馬の友なり、齡二十を過ぐる頃より世事に就て憂ふる所あり、郷里を出で、京都に趨き今の徳川從一公即ち當時の一橋公に仕へ、公が入て宗家を繼がるゝに及び從て徳川家に仕へしが、兎角する中海外を巡遊することとなり、維新の歳を以て歸朝したるに、此時は維新の大業全く成り、不肖等は殆ど喪家



の狗と一般の境遇に立しより、其後は徳川公に従ふて静岡に赴き一切世事を放擲する考なり、測らずも大藏省より召されて官に入りしが、其後熟世態の實相を通觀するに、政治其他の事物は日に月に着々として進歩し居れるも、商工業は依然として舊態を改めず、殊には當時の商工業者は品位甚だ低くして、三間位も隔てざれば役人に面會するを許されざる如き實況なりしが、商工業者の品位此の如く低きに於ては、我國の商工業を發達せしめんこと甚だ難きを以て、身不肖ながら商工業に投じて聊か盡す所あらんとし、明治六年五月三日時の大藏卿井上伯の掛冠せらるゝと同時に官を辭して銀行業に着手したるが、獨り銀行事業のみにては當初の希望を達するに由なきを以て獨り銀行事業のみならず、各種の事業に従事して遂に今日あるに至りしが、爾來世運の進歩と共に商工業亦大に進歩し、商工業者の位地亦比較的大に進歩するに至りしは敢て不肖が盡力したる結果とは言はざるも、不肖が掛冠の當時に於て心竊に期したりし所亦強ち無稽の妄想ならざりしを見るなり。

不肖は商工業界に入るの當初に於て此の如きの所期を懷きて官を辭し、又士籍をも返上し政治方面の事の如き又は人爵の如きは、一切斷念したる上にて、商工業界に投じたるものなるが故に今回の恩命の如きは眞に望外の事にして、光榮身に餘りありて心中竊に忸怩たるものあるなり。

一身の經歷談は之にて擱き、更に翻て我商工業界の前途を觀るに、商工業者は比較的進歩し居れりと雖も、政治界に比すれば尙ほ及ばざること遠く、現に此程も某伯爵は、商業會議所は尙ほ註釋を借らざれば世間に公示すること能はず云々と批評せられたることさへあり、品位の低きこと斯の如きは、我國商工業界の爲め眞個に悲しむべきことにして、君吾は自今益々智識を養成し、行動を慎重にして、吾々商工業者の位置を高むるに努力せざる可からず云々。

東京府下の商工業者から成る澁澤氏授爵祝賀會に於いて、加藤正義氏が朗讀せる祝辭は左の如くである。(編者)

男爵澁澤榮一君、閣下今回授爵の恩命を拜せらる。是れ獨り閣下の光榮のみにあらず、實に我邦商工業界の一大光榮たるを信するなり、茲に某等相謀り、會を開きて聊か祝意を表せんことを、幸に高門學て光臨の榮を辱うせるは某等の深く感謝する處なり、蓋し世の華貴に列するもの多しと雖も概ね文武の勳功に依らざるは少なし、獨り閣下は則ち然らず、王政維新以降、閣下が我邦商工業界に率先して百年經營國家の爲めに多大の功勞を致されたるは天下萬衆の已に認識する所たり抑も我邦銀行、保險、鐵道、海運、造船、採鑛、紡績、製紙、瓦斯、肥料等の諸業にして今日の隆昌發達を見るもの概ね閣下の指導誘掖に依らざるは稀れなり、又多年東京商業會議所に會頭と



して商工業の進歩を謀り、或は高等商業學校の創設に力めて斯業の爲めに育英の道を講じ、或は養育院の成立を賛けて無告の窮民を救ふ、乃ち邦民の直接若くは間接に閣下の恵みに頼る事實に深くして且つ大なりと云ふべし、而して閣下の事業を経営するや始めあり必ず終りあり、銳意勤勉倦まず懈らず半世役々一日の如し、其功豈文勳武績の下に出でんや、幸に聖明上にあり、閣下の勤勞を嘉納し給ひ、茲に授爵の恩命を下さる、閣下の光榮洵に大にして某等商工業に従事する者亦與りて餘榮ありと謂ふべし、謹んで閣下の爲に賀し併せて我邦家の爲に慶す。

明治三十三年五月

祝賀會員一同謹白

明治三十三年五月三日府下商工業者の帝國ホテルに於ける澁澤榮一氏授爵祝賀會席上にてなしたる澁澤男爵の答辭。(編者)

府下商工業者諸君より余の叙爵を祝する爲め、本日此鄭重にして懇篤なる盛宴を張り唯に余のみならず、余の一門を招待せられたるは余の實に光榮とする所にして、殆ど謝するの辭なきに苦む所なりとす、余や才拙く學淺く自ら三十年來の經歷に鑑むるに格別國家に裨益する所なかりしは自ら赧然たるものあるを知るに、却て祝辭を以て過賞を受けたるは余の深く慚愧の至りに堪え

ざる所なりとす。

余や明治の初年官途に在りしも深く列國の形勢に稽ふる所あり、我邦をして將來列國と對峙せしむるには我商工業を發達熾盛ならしむるに若かずと信じ、揮つて民間に下り一意商工業の開發に従事し、爾來政治に携はるの念慮を斷ち、又再三政界に誘入せられんとするの機ありしも、斷然之が關係を斷ちて、唯我商工業の地位を進め信用を加へ、以て勳章爵位以外遙に之に優るの聲譽を得んことを希望せるのみ、然るに今回圖らずも叙爵の恩命に接したるに就ては、東京商業會議所を始め、銀行家各位並に余の郷里の諸君は、交々祝宴を開きて余の光榮を祝せられたり、余は此祝賀を忝ふして喜ぶよりは寧ろ恐縮と稱するの外なく常に却て心苦しく感じて居たりしに、本日此盛宴を張り祝典を擧げらるゝに際し、唯今加藤君より朗讀せられたる祝辭を受け、始めて余は余の叙爵の祝宴は唯に余の光榮を祝せらるゝものにあらずして、余の叙爵は即ち商工業の地位と信用とを高ふしたる證なれば、商工業の爲めに祝すべしとの主意に出でられたるを知り、余も亦此に出席して諸君の祝賀を受くるを満足し且歡喜するに至れり、臣子の分を以て妄りに聖意を忝度するは甚だ畏きことなれど、今回不肖榮一に男爵を授けられたるも、我商工業をして歐米列國と對峙せしめんとの大御心より、商工業の地位と信用とを高むる爲め此恩命を下されたるも



のならんか、顧みれば我商工業は大に進歩發達したりとは云へ、歐米に比すれば尙非常の相違あるを見る、此際に於て死馬の骨を千金に購ひ給ひたるは、前途商工業界に良馬の顯れんことを望ませられしに依るものなるべし、余は實に千金の死馬の骨に過ぎざれば、諸君は今後益々我商工業界に盡す所あり、萬金十萬金の良馬となり以て我商工業を益々隆昌ならしめ、歐米の列國と駢馳するに至らしめんことは、余の深く希望して已まざる所なりとす、一言蕪辭を陳して謝辭に代ふと云爾。

### 三五、世界各國を視察して

#### 一、舶來萬能主義排除の決心

私は歐米を漫遊して來た。

明治三十五年の五月より十月までの約半年間文字通りの漫遊であつて、別に之れと言つて特殊な目的があつた譯では無かつたが、其中に一つ私の任務とも言ふべきものは、全國商業會議所の委託に係る我が商工業界の實情をよく歐米の地に徹底せしめ、彼我の意思疏通を計ると云ふことであつた。此事は完全に其の目的を達せんとするには頗る困難に屬する事であつたけれども、之れに就いては私も多少の考へを持つてゐた。當時まで我が商工業界の發達して來た跡を尋ねるに、商工業者自らの自働的發達に依るにあらずして、寧ろ政治、軍事、教育等から他働的に啓發せられたものが多い様に感ぜられて、此點を私は常に遺憾とし、更に我が商工業の發達隆昌を計らんと欲するならば、必ず吾々自らが主働となつて之れが經營に當らなければならぬと考へて居た。故に私は既に老齡ではあつたけれども、此の一事に至つては出來る丈け力を盡し度いとの所信を以て出發した



のである。

私は嘗て民部公子に従つて歐羅巴に渡航し、聊か見聞する所もあつたのであるが、其の結果は殆んど何等得る所もなかつた。處が此度歐米を漫遊するに就いては、前回に比すれば幾分か見聞するに就き便宜を有する地位にもあり、且つ年齢も社會的經驗も重ねて居たにも拘らず、矢張り何等得る處もなく歸つて來たと云ふ譯である。尤も此度は僅かの日數で長い途を旅行し、諸所方々を少しも休みなしに歩いたのであつたから、逆も緩りと觀察の出來やう筈がなかつたのは寧ろ當然であつたかも知れぬ。

當時歐米を見聞して歸朝した人々の中には、何か非常に得る處あつたかの如く云うて、早い話が斯う云ふ大きな建物を見た、斯う云ふ廣い道路を歩いた、斯う云ふ立派な鐵道に乗つた、斯う云ふ大きな船に乗つた、斯う云ふ綺麗な着物を見た、さうして其處に住んでゐる人間は斯様な大いなる仕事をしてゐる、是非日本も此の眞似をして、鐵道も立派にしなければならぬ、家屋も建築を歐米風にしなければならぬ、船も大きなのを造らなければならぬ、其他衣食のことに至るまで、彼に劣らぬやうに進めなければならぬと云ふやうなことを、頻りに説くものもあつた。随分立派な見識のある人でも、往々さう云ふことを云うてゐたのである。で、斯う云ふ説を述べると、矢張り自然と一

般に之れが感化を受けて、成程さうである、さうしなければならぬと云ふ事になつて、其の結果はどうかと云へば結局奢侈と云ふことになり、凡てを歐米風にし従つて外國品を用ゐる處から輸入を大ならしめ、終に經濟界に恐るべき不利益を與へると云ふことになる。處が又一方にはさう云ふ主義とは全く反對に、至つて悲觀的の觀察をして、いやどうも逆も日本杯の企て及ぶ處でない、日本杯が何をしようとしても到底彼れに及ぶものでない、と云つて唯我の力の及ばざる事を歎じて、凡て失望して仕舞ふものもある。處が之れが又どう云ふ結果を與へたかと云ふに、決して宜い結果は與へないのであつた。斯様に宜過ぎて困るのと、悪る過ぎて困るのとの兩方があつたから、そこで私も自分が見聞して來た事に就いて、世間の人々に向つてどう云ふ風に話をしたら宜いか、いろいろ尋ねられたなら何と答へたら宜いか、之れは随分考へた譯であつた。

## 二、活氣溢るゝ新興米國

先づ私が日本を出發して桑港に到着したのは五月卅日で、それより一箇月間亞米利加の各所を視察したのである。私の亞米利加旅行は此時が初めてで、豫ねて新聞紙又は友人の見聞談に依つて盛んなる國である、實に烈しい進歩を爲して居ると聽いてゐたが、成程百聞は一見に若かずで、縦令



専門的に學んだことでない爲め、見たこと聞いたことを十分に會得せられぬにせよ、其の現状を見ると唯々驚き入るの外なかつたのである。先づ鋭敏なる人間が澤山ゐて、一般の氣運は物質的事業に對して全力を注入されてゐる。殊に驚くべきは彼の國は種々なる人種が相集つて、一國を爲してゐるに拘らず、其の各種の人々が彼處に一團此處に一團と云ふ有様では無く、よく相融和して所謂亞米利加化して事業を進め、國運の宣揚に勉め、他國に對して商工業の擴張を謀ることに就いては共に相協力してゐる。彼のモルガン氏の商工業同盟も、無論モルガン氏の力の強く信用の厚いと云ふことにもよるが、夫れは亞米利加だから出來たのだと言はなければならぬ。モルガン氏が如何に力が強く信用が厚くとも、日本等に於いては斯かる大同盟は到底行らうとしても出來ない事であつたらう。

殊に亞米利加の農業は却々盛んなもので、私の行路はサンフランシスコを出發してロッキーマウンテンを越え、デンバーを通過して市俄古に向つたのであるが、あの邊は亞米利加で最も盛んな農業地と云つて宜かうと思ふ。中にネバタ地方の如き瘠土もないではないが、一體に見渡す限りは茫漠たる原野ばかりで、而も其の地味も富饒であるやうに見受けられた。元來私は農家の生れであるから、一見して土質の肥えて居るか居ないか位は解るのである。即ち雜草の生育状態から見て、如何にも

地味が豊沃であるやうに思つた。さうして全體に高低がなく、見渡す限り平々坦々たる曠原で、何れを見ても目を遮る何ものもないと云ふ土地である。斯様に廣大無邊なる土地であるにも拘らず、人家を見受けることは至つて稀である。夫故に大農の方法によつて簡便に耕作が出來、運搬の方法は總て鐵道を利用して容易に行つて居る。日本で農業に鐵道を使ふと云ふことは、私の見聞する處では未だ甚だ乏しいやうに思はれるが、私は農業に鐵道を使用する事は必要であらうと思ふ。瑞穂の國だ、農は國の本だと威張つて居る我國で、農業に對して運搬の便を計ると云ふことは今少し深く考へたら宜からうと思ふ。亞米利加の農業に對して鐵道の設備が周密に届いてゐるのは實際に見て感服の外なかつた。従つて農民が餘り骨を折らないで、棉花でも麥でも玉蜀黍でも何んでも好く出來る。勿論亞米利加は商業も工業も盛んであるが、併し農業のために凡てが非常に盛んであると云ふことは、我々旅人が通過して見ても直ちに解つた。シカゴの繁昌は實に非常なものであるが、畢竟農産物が盛んに集散する爲めである。此のシカゴの繁昌を見ても農産物の爲めに、亞米利加が如何に盛大であるかと云ふことの一端を想像することが出來たのである。

商工業の盛大なる事は驚く計りでナイアガラの水力電氣であるとか、ピッツボルの鐵工場であるとか、或ひはフィラデルフィアの汽車製造所であるとか、市俄古の鐵道客車貨車等の製造所であ



るごか、ボストンの木綿織物、パタソンの絹織物、紐育の煙草製造業杯は實に盛大なるものであつた。絹織物の工場は同盟罷工中で見る事が出来なかつたが、其他の各所は親切なる案内を得たから、熟知するまでとは行かないが、眼に見耳に聴く事は稍々理解し得た積りである。殊に私が意外に感じたのは、夫等工場の事務所は極めて使用人を減じて小さくし、工場の方が大きい事であつた。日本では之れに反して事務所が大きく工場が小さいものが多くて、遠慮なく謂へば、事務所だけであつて外に何も無いと云ふ様な有様である。恰も粗末な果物見たやうで、皮と核ばかりで中實は少しも無い。此の果物的のものは外面を見た丈では佳味さうであるが、中には何も無いから喰べるにも喰べられぬ。處が亞米利加の工場は殆んど事務所と云ふものは無いと同様で、有名なカーネギーの創設したホームステッドの鐵工場などでも、私等一行六人許り行くと事務所にはもう坐る所がなく、三人は立つて居て話をしなければならなかつた。又従事して居る處の事務員も僅かの人數であり、而も極く壯年で、壯年と謂はんよりは寧ろ青年であつた。尤もピッツボルグ市にも一つの事務所があると云ふことであつたが、俗事を扱ふ場所と云ふものは僅かであつた、私等の訪問した所が本局であつたのである。之れに反して此の工場の壯大なることは、皮の薄い中實の豊富にして、幾ら食べても食べ切れぬ果物のやうで、而も其の果物は甘味と云ふやうであつた。此の鐵工場一つで以て

亞米利加の工場全般を批評する譯には行かぬが、其他のものも同様であらうと推測したのである。

商業に就いて紐育の状況を見ると、保險事業の發達と云ひ、銀行の設備と云ひ、海運業にしても陸運業にしても、總てよく發達して居つて、英國若しくは歐羅巴の大陸を壓倒するの力を十分に備へて居る様であつた。元來亞米利加は從來の主義に據り、飽くまでも保護政策を以て常に外部に張り出さうと云ふ考へを有つて居る。殊に東洋には大いに注目して居たやうであつたから、此の亞米利加の東洋に對する働きは、將來に於いて大いに吾々の注意を要すると考へたのである。

私の歐米漫遊の唯一の任務とも云ふべきは、全國商業會議所の委託の件であつたから、私は亞米利加各所の商業會議所を歴訪したのである。手始めに桑港の商業會議所を訪問して會頭のニューホル氏に面會して來意を告げると、同氏は大いに喜んで其意を諒し、案内して會場を一覽せしめ、其他の方面に就いても案内された。商業會議所に於いて其の事務の扱振り其他の手續を見て最も感心した事は非常に人手を省略して居る點であつた。而も用が左まで辨せられて居らぬとは思はれなかつたのである。併し如何に亞米利加と雖も、商業會議所の事務を我が商業會議所の如く取扱はしめたならば、あれ程の節約では行かぬが、蓋し相集まつて議すると云ふ趣意が要務で、種々な調査若くは報告杯といふやうなことに就いては、吾々の取扱つて居たよりは餘程簡略にやる様に見受け



られた。書記長も書記一人で、其他には手傳人が一人居たに過ぎなかつた。次に市俄古に行つたのであるが、此處には別に商業會議所と云ふものはなく、ポールド・オヴ・ツレードと云ふのがあつた。此のポールド・オヴ・ツレードに於いては、穀物取引の事を管理して居たから、取引に關する要務を聞かせて見度いと思つて兩度訪問した。次のフライデルフイヤにも商業會議所と云ふものはなく、商品陳列館があつた。此處の建築は頗る立派でまた相當の人があつて、殆んど世界萬國の品物を備へて置き、貿易事業の事に便益を與へる爲め、種々の仕向が設けられてあつたが、どうも其の備へてある品物が、始終商業者に利用されて居ると云ふ程にも見えなかつた。或る新しい商賣でも開かうといふ人が、其處へ行つて様子を聞けば、是れは南洋へ向いて居るものとか、あれは東洋に向いて居るものとかいふて、多少の利益はあらうけれども、詰り多く備へて諸人の參考に供すると云ふに過ぎないので、日常働く商賣人の必要機關にはなつて居らぬ様に思はれたのである。併し其の家屋といひ、其の蒐集して居る諸物品といひ、夫れは中々立派なもので、我が東京邊りの陳列館の企て及ぶものではない。第一に家屋といふものは餘程の構造であつて、國と州とで巨額の金を出して建築したものであると云ふことであつた。續いて紐育に行つたのであるが、同地の商業會議所の會頭はジュエサツプと云ふ人であつた。また其時は會頭はして居なかつたが、チャーレス・スミスと云

ふ人があつた。此人は以前日本に遊び、東京商業會議所に於いても此人を歓迎して園遊會などを開いた事があつた關係上、私も知合であつたし、日本の事もよく記憶して居つた。私が到着すると早速先方でも來て呉れたし、私の方も訪問したのである。そして六月の廿四日にスミス氏の案内を受けて、紐育の商業會議所に於いて一日の宴を受けた。其時集つた主なる人達は、前大藏長官、ゲージ氏、前内務長官ブリツス氏、市長セスロー氏其他銀行業者、又は保險業者、トラスト・コムパニイの人々及び商業會議所議員も餘程の多人數が來られたのである。此方から豫ねて委託された趣意を丁寧述べるに、日本とは甚だ縁の近い間柄であるから、何處までも日本商業會議所の意思に同意して、將來十分に情意を貫徹し、握手して仕事をやる様にせねばならぬ、茲に列席して居る者が思ふのみならず、米國一般に推し及ぼし度いと云ふ事まで考へて居るとの挨拶を先方から受けたのである。

六月十六日、華盛頓に於いて大統領に謁見するを得た。また國務長官ヘー氏、大藏長官シヨイ氏にも面會した。私が訪米の趣意を詳しく申し述べると、大統領は日本に對して厚く好意を寄せられ種々と意見を交換したのであつた。



### 三、落着いた氣分の英國

次に英吉利に渡つて見ると、之れは又亞米利加に比べてスツカリ變つて居て古風が實に多く、舊態を改めない云ふ風であつた。勿論長い間には漸次變つて行くことは行くやうであつたが、殆んど此事が斯うと非常に進化したと云ふ様なこともなく、矢張り古い事を宜いとしてゐる有様であつた。併し夫れと同時に人間は随分高尚であつたが、只頑固なことはどうも争へぬやうであつた。世界の人を見るにチャンと自分から高く止まつて、マア一寸云へば「お前でも商賣をすることが出来るか」、「お前でも銀行の仕事をする事が出来るか」と云ふ風に見越つてゐる處があるらしく見受けられたのである。それならさう云ふ當人はどう云ふ人かと云へば、アノ大きなエライ仕事をする銀行會社の頭取若くは社長であつても、左程高く止まる人間とも思はれぬやうな、ヨボ／＼した老人が多いのである。さう云ふ人間が仕事をしてゐるのであるから、どうも目覺ましい亞米利加、若しくは獨逸の如き盛んな大仕掛なものを見ることは出来ない様であつた。

併しながら何と云つても古い進取の國丈あつて、商品の集散する實況杯を見ると、其の商賣が廣く且つ大きいと云ふことは解つたので、未だ世界に冠たる位地を占めてゐることは十分認め得られ

たのである。けれども凡ての商工業が著しく進歩すると云ふことは、どうも亞米利加、獨逸に比べて稍遅れて居りはせぬかと感ぜられる點が往々ある様に思はれた。譬へて云つて見ると、一國の商賣に大關係を持つて居る港に就いて見ても、亞米利加又は獨逸の港の如くに進んで居らぬ所がなかなか多かつた様に思はれた。元來港の設計に就いては、其の當時各國共に競つて船の大きいのを造り、從來は六千噸とか八千噸とか云ふ船は最も大きいものとせられて居つたのであるが、一萬噸、一萬五千噸とか云ふ様な、非常に大きな船がズ／＼出來て來たから、従つて古い設計の港ではさう云ふ大きな船を入れることが出來ないと云ふ事になつたのである。夫故各國共に競つて港の改築をして、成るべくさう云ふ大きな船を自國の港に引き付けよう／＼と、汲々として努めてゐる有様であるが、英吉利の港はどうも遅れて居る、特に倫敦の港の如き既に獨逸の漢堡、若しくは白耳義のアントワープの如くに進んで居らぬのみならず、英吉利内地の他の港に比しても遜色があると云ふ譯であつた。吾々が倫敦の港を見ても、之れではいかぬ、改築の必要に迫られてゐると云ふ狀況が見えた位であつた。夫故自國の人は一層其の必要を感ずる譯であるが、英吉利人はやつと其頃になつて港灣が不完全だと云つて、其の改良が一問題となり、終に委員會が成立して委員が選定され、其の委員長にはベヤリング銀行のロード・レブルストツクと云ふ人がなつた。此人は私が倫敦滞在



中再三會見した人であつた。

斯う云ふ具合で、英吉利人はどうも觀察が多少時代に遅れると云ふ嫌ひは免れない。併し個人としての英吉利人は、操行の堅實な、氣性の剛邁な、正直な點に於いて、他に比して最も勝れてゐるやうに思つたのである。特に各々己れの責任を重んずることは、最も敬慕すべき性質を持つてゐる様に思ふ。而して數百年來の商工業の先進國であつて、他の國からも餘り競争抵抗と云ふものゝ無い中に、俗に云ふ獨舞臺で世界中に計畫したのであるから、其の國富と云ふものも、吾々の俄かに想像し能はぬ位であらうと思ふ。一面から觀察すると亞米利加は大いに進歩し且つ富裕になつて英吉利から入つて居た多額の資本を返却して、却て英國へ輸出すると云ふ勢ひになつた。依つて或ひは世界の金融市場の中心は動きはせぬかと云ふ説もあつたが、一應の觀察ではさう云ふ點がないでもなかつたが、併し未だ倫敦は左様に他國の資本に侵略せられては居なかつた。若し實力を持つて定めんとしたならば、世界の中心たる倫敦が動くと思ふことは、少しく早計の觀察であらうと考へたのである。殊に亞米利加と英吉利とを比較して見ると、此の資本を他へ供給すると云ふ働きに於いて、大いに其差があつたらうと思ふ。何となれば亞米利加には未だ自國內になさねばならぬ仕事が多かつた、而して事々物々を發達せしめつゝある國にして、資本の必要が甚だ多かつたの

である。之れに反して、全然とは言はないが英吉利では資本の多い割合には最早さう云ふ餘地が少いやうであつたから、自國の仕事に對する金融は第二に置いて、他の方面に向つて大いに金融上の働きを爲すと云ふ點から見たならば、未だ亞米利加が英吉利から金融上の中心を奪ふと云ふ譯には行かなかつたであらうと思ふ。

私は英吉利に於いて、倫敦、マンチエスター、グラスゴー、其他ニューカッスル、シエフィールド等の市街を経由したのであるが、自ら親しく商業會議所を訪問したのは倫敦だけであつた。倫敦の商業會議所に於いては、丁度開會中の席で、私は斯く／＼の趣旨で當國に參つたと云ふことを丁寧に述べた。先方も來會者の全體の一致を以て、來意を領諾すると云ふ議決をして、其の序でに商業取引に關する德義問題などに就いて種々の説が出た。此時集まつた會員は丁度四十四五名で、當日の會長はウイリヤム・ケスウィック氏であつた。元來倫敦は紐育や日本の如く、商業會議所議員の人数を制限してないから其數は甚だ多いのであるが、普通多數の議員が參會せぬので、其の會場も甚だ狭いものであつた。

私が接したのは小部分の人で、而も短時間であつたので、之れを以て直ちに判斷することは出來ないけれども、英米何れの國に於いても、私の接した範圍内では、當時日本に對して好感を持つ



て居た様に觀察したのである。前にも申した通り亞米利加の進歩は實に非常なものであつたが、英吉利の方はさうは行つて居なかつた。併し乍ら、若し日本邊りから資本の相談でも持ちかけようと思ふ方は、矢張り英吉利の方であつたらう。どうも金の點になると依然として英吉利が世界第一であつた。亞米利加人は己れの資本で英吉利の地下鐵道を興したので、頻りに金融の中心が紐育に移ると云ふやうな考へを持つて居たやうであつたが、私にはさうは思はれなかつたのである。夫れに兎に角日本の事情を能く知つて居るのは、矢張り英吉利であつたから、日本が資本の供給を受けようと思ふには、英吉利に持つて行くが一番の近路であつたらうし、且つ英吉利人の中には随分貸したがつて居たものも少くなかつた様に見受けたのである。

#### 四、模範的工業國の獨逸

倫敦から白耳義に渡つた。此國には維新前に行つた事があるので、多少記憶に残つて居る處もあつた。人口の少ない國としては富の程度も進んで居り、貯蓄に就いては一般に人民が注意して居る國であるといふ事を豫ねてから承知してゐた。人民の性質は極く穩和な國柄で、また交際には巧なと云つて宜からう。日本人に多少事業に手を著けて居る人の在つた爲めに、其等の知己の者にも面

會して、商工業の事に就いて種々の相談をした。工場としてはリエーヂの鐵工場、若しくは南部の方で硝子製造所を一二箇所見た。商業會議所の關係で日本領事の紹介によつて、アングエルスAngersの商業會議所の會頭に面會し、續いて商工業高等會議の會頭たるストラウスと云ふ人に面會して懇談した。何しろ滞在の日が僅かであつたので、是れぞと言つて申上げる様な記憶も持つて居ない。

次に獨逸に這入つたのであるが、獨逸の商工業の盛んな事は亞米利加に亞いで驚くべきことであつた。世界の大陸で最も盛大を極め、尙幾多の發達を思はしめたのは、どうしても亞米利加と獨逸であつた。獨逸の盛んなる事は漢堡の港を見た時直ぐに解つたのである。此港は海潮の工合が誠に良く、天然の良港である處へ種々改築を加へ、其の設備が益々完全になつて居る處から當時では大きな船が随分倫敦へ寄港せず、直ちに漢堡に來る有様で、貨物の集散は實に非常なもので、或ひは倫敦の繁榮を奪ふかと思はるゝ位であつた。其他獨逸の商工業は勿論、鐵道、船舶等を見ても、獨逸が當時如何に盛んであつたか云ふことの一端を窺ふことが出來たので、爾後歐羅巴中で獨逸が一番盛んな國になりはせぬかと想像した様な譯である。特に獨逸の進歩は秩序的にいつて居たから、基礎は堅い様に思はれた。

私はエッセンに於いて、彼の有名なるクルップの鐵工場を參觀した。クルップの鐵工場は一個人



の所有であるが實に盛大なものであつた。工場主のクルツプと云ふ人は其時が三代目であつて、祖父が此の鋼鐵事業を始めたのである。二代目のクルツプといふ人が餘程秀でた人であつたので、斯かる盛大を成すに至つたのである。當代のクルツプが經營して居た有様を申上げると、先づ事業の方に就いては大抵人に托して、自身は専ら職工の保護とか、教育とか云ふことに従事して居た。私は丁度クルツプの宅に開かれた宴會に招かれて家人にも會ひ、一家の有様をも窺ひ知ることが出来たが、富に於いても徳望に於いても高くなつて居たのみならず、彼は家庭に於いても甚だ敬慕すべき軀裁を備へてゐた。

特に目に着いたのは、エッセンの工場に附屬する職工の寄宿所で、此の寄宿所に居る職工の總數が一萬人ばかりと云ふことであつた。元來クルツプの工場は各地に五六箇所あつて、其の使役する處の人數は二萬四千人ばかりで、其の職工の家族を合計すると八萬人以上と聞いた。而してエッセンの工場に屬する職工の寄宿所が、エッセンの近傍に市街の如くに作られてあつて、萬事非常に行届いたもので、決して他工場の如き有様はなく、殆んど高尚なる小別荘のやうにしてあつた。また其の住居する職工も、よく其の命令を守つて綺麗にして居た。而して職工は此のクルツプを神佛のやうに敬ひ、所謂幸福を君に祈る堯舜の民が、唯帝の側にこれ従ふと云ふやうに見えて、一覽して

も眞に心持が好かつた。其の市街の中には寺もあれば學校もあり、俱樂部もあれば又病院もあつた。何故斯ういふ風にしてあつたかと云ふと、どうしても總ての職工を安樂に住はせなければ、例のストライキのやうなものが起る恐れがあつたからで、クルツプは先代より斯ういふ方法にして居たのである。自然此様に取扱が厚ければ工場費用が多いかと云ふに、さうではない。其の理由はクルツプが職工を待遇する費用は、皆自家の經濟から支出してゐるから工場の費用には全く關係しないのである。此の方法によつてクルツプは一面に貧富の懸隔をも防ぐと云ふことに力めて居るのである。之れは獨り獨逸のみではなく、英國、亞米利加等の政治家も最も此點に注意を拂つてゐた。殊に獨逸皇帝は深く心配せられて、地方制度若しくは中央制度に於いても、此の勞働者の保護獎勵をなされつゝあり、皇帝若しくは皇后陛下は毎度クルツプ工場の職工寄宿所に臨御になつて、種々の御言葉を賜はると云ふ話であつた。此の寄宿所の一家屋に一つの窓があつて、皇后陛下が臨御なつた時此窓から外を御覽になつて、誠に景色が美しい、ベルビュー即ち美景の窓であると云ふ御言葉を下された。これは獨逸の一つの名所となつてゐる。また陛下が俱樂部に臨御になられて、料理人の部屋に於いて鍋の蓋を取られて、芋や大根を御覽になつた事があつて、其繪が俱樂部の一室に額になつてゐた。此の一事を以て見ても獨逸が如何に勞働問題に注意を拂つて居たかと察せられたのであ



る。

伯林に止宿したのは四日許りで、時日の短い爲めに、重なる経済界の人々に面會しても、工業談等に就いて十分に談ずる事が出来なかつた。

## 五、思出深いフランス

私はハンブルグを出立して九月三日一旦倫敦に歸り、七月に倫敦を發してそれから佛蘭西に入つた。佛蘭西に於いては、銀行では佛國中央銀行及びクレーチ・リオネーの二つを見たが、クレーチ・リオネーの主任者ジェルマン氏に獨逸人シーボルト男の紹介に依つて面會し、事務取扱上の模様を見た。ジェルマン氏は七十近い老人で、私は銀行に就いて、此人と話をし又向ふの意見をも聞いたのであつたが、随分尤なことを云つてゐた。ジェルマン氏が常に調査してゐた統計と云ふものは實に驚くべきもので、各國の財政に就いても、又經濟事情に就いても精密なる調査をしてゐた。此人が日本の經濟界の事を彼是と批評し、又日本の財政に就いても評論してゐたが、其の評言は随分思ひ切つたことを云つてゐた。段々話をして行く内に私は、

『英吉利では日本の公債が賣買されて居て、随分澤山所有してゐるものも見たり聞いたりしたが、

佛蘭西では英國の様に日本公債の取引をしたり、之れを所有してゐると云ふことを見ることも聞くことも出来ぬ、之れはどう云ふ譯であらうか？』

どの問ひを發して見た。するとジェルマン氏は、

『夫れは持たぬのが至當である、日本の財政を見る。』

と言はぬばかりの調子であつた。そして、御前は嘗て三十五年前に佛蘭西に来て居つた縁故もあるし、遠慮なく打解けて話をしようと言ふことであつたから、私も遠慮なく日本の經濟界、日本の財政に就いて評しようと言つて色々な事を話したのである。ジェルマン氏は

『日本の經濟界が進んで居ると云ふことは世界に隠れない事實であるが、併し財政の事に至つては實に驚かざるを得ない。先づ日清戦争後支那から得た償金其他の五億圓と云ふ大金を、僅々數年間に使つて仕舞つたらしいが、勿論金高の多少もあらうし、年月の長短もあらうが、歐羅巴各國何處でも斯程に短い間に、斯程の金額を使つて仕舞つたものは殆んどあるまい。』

と云ふやうな評言をした。詰まり斯う言ふ事實に依つて想像して見ても、日本の財政状態が思ひ遣られる次第で、日本の財政は窮乏してゐるのではないか、と言ふやうな意味合ひに私には取れたのであつた。夫故私は



『自分は經濟界には身を委ねて居るが、財政の局には自ら當つて居るものでないから精しいことは解らぬが、併し親しく財政の事情を見たり聞いたりした處に依ると、他の人が見る程にまで日本の財政の基礎が薄弱であると云ふことは決してない。併し斯く言へば自分が日本の公債を募らうと思ふのではないかと云ふ疑があるかも知れぬが、現に日本の目下の財政状態は、外國債を募る必要がないと云ふことも知つて居る位であるから、決して日本財政の將來はさう氣遣ふべきものではない。』

と云ふ事を、十分に辯明したのである。又日本はどうしても露西亞と戦争をすることは避くべからざる勢ひになつてゐる、開戦の機が間近に迫つて居ると世間の人が氣遣つて居るやうであるが、どうかと云ふ話もあつたから、否夫れも大變な誤解で決して左様な事はあるまい、全く一の杞憂に過ぎないことであると懇々と辯明して、兎に角自分の思ふには日本政府が公債の裏書をして如何に爲替相場の變動があつても、日本の金貨は佛蘭西の金貨にして是丈である、日本政府公債の額面は佛蘭西の金貨にして是丈であると云ふことをチャンと極めて、夫れを支拂ふと云ふことにしたら、佛蘭西の人が十分に信用してゐる國の公債を扱ふ程にはゆかぬかも知れぬが、昨今の様な安い相場で賣買取引をするやうな事はあるまいと言つたら、夫れは御尤な説であるけれども、何分日本の財

政は、どうも眞面目でないやうに思はれるし、戦争をすると云ふ懸念も容易に去らぬやうであるから如何なるものであらうかと云ふ意見であつた。既に各國の財政經濟の事情を詳密に調査し、統計を明かにして居る人が右の様な意見を持つてゐた處から見ると、當時の佛蘭西人が日本の財政經濟を見く如何なる感を抱いてゐたかと云ふことは、自ら想像するに難くないと思はれた。

私は三十有餘年前に半年程滞在してゐたから、巴里の市街には處々見覚えのある處があつたが、併し三十有餘年前とは大分變つて居る處もあつた。先づ當時は交通機關は馬で曳くものゝ外はなかつたが、此度は電氣鐵道に變つて居た。夫れからチュイレー王宮が、ナポレオンの繁昌の時分には大層立派であつたが、一千八百七十年の亂で焼けてしまつて今は邸園になつてゐた。またグラン・ド・オペラは巴里に於いて最も自慢される建築物で、政府が力を入れて居る國の一つの名物とも謂ふべきものであるが、昔日私が滞留した時分には未だ建築中のものであつたのが、立派に落成して而も演劇興行中であつたので、幸ひに夫れを一覽することが出来た。演劇が國風觀察に就いて一の話柄となるのはちと浮いた話のやうに聞えるが、佛蘭西の劇場は國の道具として持つてゐるやうであつた。ゴブランの織物とか、セーブルの陶器とか、又は此の劇場などは政府が最も注意して、外國に誇りとして居る一の治國の要具である。此の劇場杯の繁盛な處が十分落成して居たから、其處



等は大分變つた所があつたが、其他有名な市街又は建造物に於いては餘り變つたことはなかつた。彼の地は市内に總て煙を出すことを嫌うて、工場は多く市外に在る爲めに常に市中は清潔にして黒い煙は見えないので、爲めに工業繁昌と云ふ方は大いに趣きを異にして、住居して居心持の宜いと云ふことは云へる。尙種々なる娯樂所は三十有餘年の進歩で、總ての裝置設備が何も後も整頓して居る様であつたから、若し長く遊んで居て且つ私の年をして今二三十年若からしめたならば、此の娯樂に耽つたであらうと思ふ程である。不幸にして老境にある私には、唯眼だけの樂みを取つたばかりであつた。

## 六、歸朝して感あり

それから私は伊太利を経て印度洋を渡り歸國したが、右の様に歐米諸國の視察で、扱私が商工業者として、自國に於ける有様は如何と回想した時、成程三十四五年前に比すれば、大いに商賣人の頭も擧げ得るやうに成つて、其の昔私が旅行する時分には誰も知らぬ有様であつたが、此度の旅行の場合には多少何か效能ある事を見て來いと、商工業者以外に官途の人までが、或ひは送別會を催して種々な待遇をされたと云ふ有様で、幾分か商賣人の位置も進んで來たのである。其の商賣人として

彼の國々の有様を見て、何と譬へて宜いか、眞に心細いやうな感じもし、口惜しいやうな念慮も起り、此内心の懊惱は綺麗な言葉で解り易く述べる事は出來ないのである。要するに他の國々と比較して見ると當時の日本はどうしても敵はぬ、外國の實況は商工業に對して政治なり學問なり十分に其力を加へて、其の進歩を助けてゐるのに、日本は言論に於いては其の通りに成つた様であるが、事實が亞米利加、英吉利などと同様に進んで居たかどうか疑問で、是れは商工業者自身の働きが悪かつたからであると他の方面の人々は言ふであらうが、或ひはそれもさうであつたかも知れない。併し商工業者から言ふと、他の協力が少なかつたから、商工業の働きが伸びなかつたのだと言はざるを得ない。其昔政治を執る者は商工業者を殆んど蛆虫の如く待遇してゐたのであるが、己に商工業者の位置も進んで來た時代であるから、假令商工業者に不十分の點があつたにせよ、之れに協力せずして其の伸びざるを責めることは、我々はどうも敬服出來ないのである。總じて日本では政治と云ふものが總ての基本であつて、一番の原動力と云ふことは争ふべからざる事實である。故に此の商工業に對する發達を謀り、擴張を努めると云ふことも、此の政治上から單に便利を與へると云ふのみでなく、精神に於いて之れを重んずることが、他國と同様にあつて欲しいと云ふ觀念を起さざるを得なかつたのである。是れと同時に、どうしても我々商工業者自身の方面からも、心を用ゐ



て勉めなければならぬことは、商賣人の人格をもう少し高くしなければならぬと云ふ事であつた。物の一致せぬとか、種々なる背徳の聞えがあるとか、或ひは苦情物議が起き會社が混雜をするとか云ふことは、何處の國にも多少あるのであるが、併し其の有り具合が殘念ながら、日本に於いては英米と同様であつたと言ひ得られないのである。即ち概して日本の程度が大に卑いと云はなければならぬのである。故に物の一致も出來ず、人の力も伸びぬので、彼處に問へ、此處に妨げられ、始終此の妨害の爲めに進歩が見られないのである。私は日本人の智慧、氣力が歐米人と伍し得られないと云ふことはないと思つてゐたので、これは全く從來の行掛りの状態、政治上の保護が満足でなかつたのと、商工業者自身の人格が進んでゐなかつた爲めに、斯かる有様を呈して居るのである、若し十分に改良し得たならば、敢て歐米人に負けることは私は考へないから、大いに奮勵努力の必要な事を痛感したのである。

最後に前後兩回の歐米旅行に就いて比較して見ると、餘程不思議な觀念を私は惹起した事を申述べ度いのである。其の昔旅行をした時は殆んど二十四五の血氣壯んな時で、一向學問も無く單に攘夷黨の一人であつて、所謂燕趙悲歌の士であつた。それが不圖一橋の家來になつて數年にして、まだまだ攘夷の夢は決して醒め切らぬ間に、海外行を命ぜられて旅行に出たのであるから、どうも其

頃は兎角に歐米諸國を目して夷狄禽獸と云ふことを大きな聲で云つてゐたから、此の海外行に於いて、眼に觸れることは必ず憤激扼腕のことが多く、終には怒髮衝冠と云ふ位にまで成行きはせぬかと、自らも思ひつゝ旅をしたのであつた。然るに此の旅行の間に段々と軟化し、上海へ行くとき少し軟かになり、夫れから向ふへ行けば行く程恐入つて、もう巴里邊へ行くと迎もと云ふ觀念が起つて、もう是れからは仕方がない、己達は一生懸命學ぶ外無く、夷狄禽獸と思つた考へは失せて、迎も吾は勝てぬのであるから之れを師として學ぶ外はないと斯う云ふ風に軟化したのである。又其の初めは醫學は盛んであらう、砲術も巧みであらうが、他の事は一向敬服せぬ所謂仁義道德など云ふ物は取るに足らぬと思つて居たが、彼の地へ行つて見ると人の交道と云ひ、人の守るべき主義と云ひ總てのことが餘程届いて居り、又發達して居る様子であつた。自國の方は人民に階級があつて、百姓町人は一生涯頭が擧らぬと云ふ制度であるが、これに引換へて西洋はそんな階級は無い、夫れだけでも大層敬服した。故に特に砲術若しくは醫學と云ふものゝみならず、敬服する箇條が多くなつて、鐵の製造に敬服し、船の構造に敬服し、公債證書に敬服しなければならぬと云ふやうに、段々軟化して昔の強い骨は一つも無くなつた。年はどうだと云ふと三十前後の血氣盛りで、夫れこそ一本の刀で黒船をも斬卷くる了見で居つたのが、左様に軟化したのである。これに引換へて此度は私



も六十三歳の老境の旅行であつたから、前回の唯一人で大勢の世話をして、殆んど小使兼書記役と云ふやうな有様であつたのに比すると、反對に通譯もあれば書記もあり、會計の世話をする人もあると云ふやうな旅行であつたのである。處が、今回の旅行には日に増して其の憤慨の念が強くなつて、もう殆んど亞米利加からして、英吉利其他を回つて見れば見る程其度を増し、見るのも嫌になつるやうに慷慨悲憤で到頭歸つて來た有様で、昔日とはまるで反對であつた。是れは餘程奇妙な話である。私の智恵がさう増した譯でもなく、唯年を取つて全く境涯が違ふと云ふに過ぎなくて、決して知識が違ふと云ふのではない。私の性質は昔日は寧ろ血氣に逸る方であつたのに左様に恐怖心を起さしめたが、今回は幾等か老成して綿密に行届く性質になつてゐたと思ふのに、反對に殆んど西洋人の面を見るのも嫌になるやうに憤慨心を惹起したと云ふことは、蓋し全く時勢と境遇とに由るものと思はれたのである。但し此の憤慨心は唯目前に起る憤慨ではなくて、全體に關する憤慨であつた、故に私は此の憤慨心を消耗せぬやうに力めて、此の憤慨心と熱情とに依つて、將來日本の事物の進歩擴張を計つて行き度いと決心した次第である。

## 三六、私の大患

丁度明治三十六年の九月頃であつたと思ふ。私はインフルエンザに冒されて、度々發熱したが、多忙なる際とて満足に療治も行き届かず、十分に保養する餘暇も得られなかつたのである。處が十一月になつて又中耳炎を併發し、是れは極めて危険なる病氣であるから、切開しなければならぬかと一時は非常に憂慮して居たのであるが、賀古博士、佐藤博士、ベルツ博士等の御手當によつて幸ひに手術はしなくとも恢復するを得たのである。

其後醫師の勧めによつて國府津に轉地保養する事になつたのであるが、國府津に於いても時々發熱するので、高木兼寛博士を東京から聘して診察を受けて見ると、肺炎の恐れがあると云ふ診斷であつたから、三十七年の四月急遽王子の邸に引き上げたのである。歸京すると早々高熱を發して、高木博士の診断の通り潜伏して居た肺炎が現はれて來て、一時は非常な重體に陥つたのであるが、高木博士、土屋學士等の毎日の懇切なる御手當を受けて、藥餌其の效を奏し漸く快方に趨き、徐ろに褥上に坐して庭園を眺め、食餌も粥位は啜れる様になつた。



恰も私の病氣の事が天聴に達して、畏き邊りより病氣御尋ねとして御菓子を賜った。私は天恩の有難さに熟々感泣し、床上に起き上つて禮服を取寄せ、恭々しく拜受した次第である。



トルベツ歌

明治三十七年六月澁澤子爵の病狀天聴に達し、特に御使を以て御菓子一折を賜はつた。實に異數の事であつたから子爵は至尊が斯くまで我が商工業に宸襟を勞させ給ふかと感泣し、左の一首を詠じて親戚家人に示し、窃に感謝の意を述べられたのである。(編者)

「ことし春の末つかたより再び病にかゝりてほどく命もあやうきはかり煩ひけるかやうくをこたりさま

になりける程六月九日ゆくりなく侍從職より御使にていどうるはしき御菓子一折のたまものにてそへて畏き仰ごことによりさつつけさせらるゝ旨幹事岩倉朝臣の御書ありこは微臣の煩ひぬるよし 叙聞に達せしよりの御事なりこそそもやむことなき官にある人々はしらす野にある身のかゝる大御恵を蒙るは誠に例少き事にてこは全く常に實業の發達につきてそゝかせ給ふ深き大御心の施

て微臣の身にも及ほせる御事なるへしとかしこくもはた喜はしく忝くおもひつゝけて、

伏屋もるうめきの聲の思ひきや

雲の上まできこゆへしとは」

澁澤子爵が畏きあたりより病氣御尋ねとして御菓子を下し賜はるや、大倉鶴彦翁は直に左の一首を詠じて子爵に贈つた。(編者)

いたつきの枕もかろくなりぬらめ

君のとはれし重きはまれに

而して翁は子爵が此の恩命を拜せられしは實に男爵(當時)の光榮のみならず、我が商工業界全般の榮譽なれば、東京商業會議所會頭の地位よりも、一首喜びのことはなかるべからずとて、次ぎの一首を以てことほいだ。

友鶴の聞きたにうれし雲井より

とほせたまひし君のほまれを



澁澤子爵の病狀及當時の時勢に就いては、三十七年五月龍門社春季總會に於ける阪谷男爵の講演が詳細に報告してゐるから左に之れを採録する。(編者)

偕て今日社長(澁澤篤二氏)の差支へました理由を申し上げますのは、本社の本尊である所の澁澤青淵翁の病氣がよくございませぬ。社員諸君に向つて甚だ不幸なる御報告を致さねばならぬ次第で御座います。其爲めに今日社長は王子へ参りました。又今日御演説下さる筈の高木兼寛氏も青淵翁の診察の爲めに同所へ参られ、ベルツ博士も参られ又穂積博士其他龍門社員の重なる人の多くは同所へ参られましたので、私は御断りに出席致しました次第で御座います。今日は別に演説の趣向とてもございませぬに依りまして、澁澤翁の病氣の経過を御話し致し度いと考へます。澁澤翁は先年歐米漫遊後至つて身體が健全でありまして深く喜んで居つた次第で御座いますが、昨年の九月頃インフルエンザに胃かされまして、一時發熱せられました。其れ以來多忙なる人でありますが故に、始終十分なる療治が届いて居りませなかつた、詰まり病後の保養を十分にする暇がなく、國家の爲めに盡瘁せられて居つた次第であります。其故に其後度々發熱したり風邪を引かれたりして、引籠られることがありましたので、我々も深く心配致して、十分なる療治をせられんことを忠告したこともありました。然るに昨年十一月廿二日は澁澤翁の御本家、即ち埼

玉縣大里郡血洗島—今は八基村と申します、字血洗島の御本家に法事が御座いました。其の翌日同郡の備前堀と云ふところの石碑、其の文章は、澁澤翁が撰文せられ其書も揮毫せられたのでありますが、法事に其の石碑の落成式を兼ねて参られる筈でありましたが、兩三日來風邪の氣味にて少々發熱せられました、遂に法事にも又落成式にも参られなかつた。所で其熱が甚だ宜くない熱であつて、即ち耳の奥所謂中耳の部分に炎を起したのであります。是は甚だ危険な病氣であります。それに就きまして、耳の方の専門家では賀古博士が主任となりまして、それに堀井、土屋と云ふ兩醫師が補助せられ、又佐藤三吉博士、ベルツ博士も加はつて始終手當を盡されましたが、幸ひにして、此の中耳炎の方は或ひは切開しなければならぬかと云ふ憂も一時あつたのでありますが、それは切開をせずに癒りまして昨今では、耳の底に少し唯だ、鳴りが残つてゐる。ゴーと云ふ音が幾分か残つて居ると云ふ位になりました。其他身體に異狀が無く段々経過が宜くなつたので、此の鹽梅で行くと、春にでもなつたならば、無論、又再び國家の爲めに盡瘁せらるゝところの澁澤翁の顔を、我々が見るの喜びを得るであらうと信じて居つたのであります。其後胃腸に異狀を生じまして、之れが爲めに一ヶ月許り惱んで居られました。是れも左程重いことではなかつた。腸胃の方が癒りましてから、段々暖かくなるし、一つ何處へか轉地せられた方が宜いで



あらうと云ふ醫師の話で、意を決して今年三月六日國府津へ行かれましたことは諸君の御承知の通りであります。

國府津へ行かれましたから時々熱が出る、甚だ是れは心配な事でありますから、高木博士に診断を受けたがよからうと云ふので、高木博士を東京から聘して診察を受けられました。所が今別段異状を認めぬ、併しながら何分昨年のインフルエンザの後を十分療治してないから、皮膚と云ひ、腸と云ひ、其他喘息と云ひ、種々の部分が未だ十分に癒つてゐない。是れは打棄て、置くのは宜くない、それに今一つ肺の方に少し濁音が聞こえる所が一部ある。自分は長いこと澁澤さんの體を診察しないから老年になられた爲めに、或は肺部に變化を生じたかも知れないが、どうも自分が今より四五年前に診察した時とは少し異様の音が聞こえる。之れは注意すべき點である。即ち高木博士の心配は、或は肺炎でも潜伏して居ないかと云ふ所から、土屋、堀井の兩醫師に注意せられて、國府津に居られることは、氣候も暖かになつたから、最早其の必要もあるまい。一應東京へ歸られて、是迄不完全に修復してあつた身體を、十分に修復した方が宜い、自分も目下の時局であるから、國府津へ屢々御見舞申すことが出来ない。東京ならば都合が宜しいから歸られたら宜からうと云はれるので、今から一週間程前、即ち四月廿四日に翁は東京に歸られた。歸

られてから二日許り宜かつたが、又熱が出た。其熱が下らなくつて、一昨夜からの熱が甚だ面白くない状態を呈して、三十八度九分許り上つて、下熱劑を用ゐても下らない。而して高木博士が心配せられた濁音が十分現れて、所謂伏在して居つた肺炎が現れて來た。斯う云ふ徴候になつて來ました。そこで今朝高木博士とベルツ博士が立會はれまして、十分手當を施すことになりました。(中略)

信てそれに就きまして尙ほ申上げたいと思ひますのは、『歳寒而知松柏之後凋』と云ふ語がありますが、昨年十一月以來、我帝國の時局は實に容易ならざる有様に陥つたのでございます。昨年の暮になつて露國の回答が甚だ満足でない、遂に十二月廿八日緊急勅令を以て財政上の非常處分をせられると、愈々日本政府の決心が堅くなつて來たと云ふ場合だから、最早平和の望は薄弱になつて參つたのであります。併しながら日本帝國の皇帝陛下は勿論、露國皇帝陛下に於かせられても熱心に人類の社會の爲めに平和を御希望あらせられると云ふ事は、我も人も堅く信じて疑はぬ次第でありましたから、兩國の局に當る所の方々が相當なる協議を盡されたならば、必ずや血を流し又世界の商業を傷け、實に人間社會の不幸なる状態を、二十世紀の今日に於て現出すること無しに濟むであらうと信じて居つたのが、不幸にして此の二月上旬に於て平和は愈々破



裂となつて、砲煙彈雨の間に相見ゆるに至つたのであります。是に就きましては、昨年以來我帝國の商工業社會に於て幾分の警戒心を抱いて居つたが故に、總て商工業は不活潑を呈して居つたのでございますが、既に談判破裂と相成つて以來は、益々此の不活潑の度が強くなつて参りました次第であります。而して一方財政の方に於きましては、此の大戦争を斷續して行くが爲めに非常なる準備を要すると云ふ時代でありまして、所謂財政經濟の上に歳の寒い時代に遭つて來たので、そこで松柏の凋むに後れたるを知ると云ふ人が無くてはならない。即ち今日の時局に當りて澁澤翁の腦力と腕前を利用することの出來ぬと云ふのは、政府も不幸、民間も商工社會も不幸、實に是は一大不幸であると云ふ事を斷言するに憚らぬのであります。是は私一個の言ではない、皆様も御同様の事であらう、而已ならず、澤山耳にする所の言であります。ちよいとした事が起りましたも、澁澤さんが居られたならと云ふ言を常に聞くのであります。是は甚だ残念に考へます。御當人の残念は勿論の事、又我々青洲翁の薰陶を受けた者として残念なるのみならず、國家の爲めに甚だ残念に思ふのでございます。併しながら澁澤翁の歴史を繰返して見ますと、何時でも戦争には極く縁の遠い人で御座います。

抑も澁澤翁が、志を懷いて此日本の政治社會に現れたのは、恰も御維新前後の兵馬倥傯になら

んとする少し前のことで、鳥羽伏見の戦争の時には、既に佛蘭西に居つた。それから青洲翁が横濱へ歸つて來た時には戦争は函館に移つて居る。朝廷と幕府の間の勝敗は明かに決定せられて、唯だ函館の一隅に、戦争の残りの分が繼續せられてあつたに過ぎないのである。故に御一新の戦争には翁は關係しなかつた、若し翁が居つたならば必ず一方の旗頭でなくてはならぬ人である。即ち慶應元治の騒動は、必ず京都に於て端を啓くに相違ないと云ふ翁の活眼からして、態々民兵を編制して京都で其準備をして居られた。私の家と澁澤の家と懇意になつたのは民兵組織の爲めで、民兵組織の爲めに私の郷里備中へ翁が見えて、其時初めて私の父と澁澤翁とが懇意になつたのであります。そこで相當なる兵隊を募集して、翁は京都へ上つて爲すあるの日を待つて居つたのですから、日本に居られたならば、無論戦争に加はつて死んで居るか生きて居るか。必ず一方の旗頭になつて働いてゐる人が、丁度戦争に加はることが出来なかつた。それから明治十年の西南戦争、此時には丁度上海へ行つて居られた、急速に日本から呼戻されて歸られたから、戦争中の事柄には盡力せられたに相違ない。けれども戦争の始まつた途端には日本に居られなかつた。それから明治二十七八年の戦役の時には瘡を患つて居られて、病中指圖はして居られたけれども自分は殆んど加はられなかつた。此度の日露戦争に就きまして、翁は又戦争の事に加はる事が



出来ない。併ながら必ずや此戦争後の經營に就きましては、翁の腦力、翁の敏腕に國家が期待する事の多いと云ふことを私は疑はぬのであります。殊に朝鮮半島の如きは、翁の手腕に依つて今日我商工業の發達を來して居るのでございます。朝鮮半島に於て何が爲されたか、今日まで日本人が何をして居るか、僅に京仁鐵道、京釜鐵道、第一銀行、金山等の事業であります。其事業の殆んど九分九厘は、皆翁の指揮監督の下に成り、又成りつゝあるのであります。是よりして滿洲、或は支那全國に對して及ぼさんとする所の、日本の商工業の經營發達は、矢張此人の力を以てすると云ふ事が最も必要なることを信じ、又必ず左様あらうと信じます。そこで澁澤翁は今日病氣であります、どうか此の龍門社に關係の諸君に於きましては、此の翁の平生の薰陶指導を十分に服膺せられて居ることありますから、大に國家の爲めに、今日並に今後盡されんことを希望するのであります。

此度の戦争は、國民の負擔は容易でない。決して容易でない。又戦争は決して短日月の間に結了するとは考へられない。既に事の開けた以上は名譽ある平和でなくては我々は希望せぬのである。併ながら、人類、社會の爲めに平和を希望すると云ふことは勿論である。勿論であるが、其の平和たるや、必ず名譽ある性質のものでなくてはならぬ、と云ふことは我々の決心して居る所

である。其決心を遂行するに就いては、實に非常なる費用を要し、又非常に商工業の上に困難を來すと云ふ事はどうしても覺悟せねばならぬ。三百年以前の我々の祖先が朝鮮征伐を企てた時には十萬の兵を十有餘年の間海外に曝して、其不完全なる船舶、不完全なる武器を以て明軍と戦ひ、朝鮮と戦つたのである。不幸にして我帝國の内に内亂の萌があつて、此雄大なる計畫を貫徹することが出来なかつた。即豊臣大閑亡びて徳川家康之に尋で起つて、國內の不和の爲めに國內の平和の擾亂を防ぐが爲めに、止むを得ず、外征の計畫を中止してしまつたのであります。今日に於ては其當時に比較すれば、船舶も完全になり、武器も完全になり、國內は徹聖文武なる 皇帝陛下御統治の下に於て、舉國一致、十年は愚か二十年の戦と雖も堪ふことが出来るのである。唯だ、其堪ふるに就ての困難をよく凌がぬと、商賣も不景氣になりませうし、租税も重くならうし、公債も増して來るであらう。併しながら勝ちさへすれば、此結果は必ず大に酬られる、又此度の戦争は、清國の保全、朝鮮の獨立を保持するの目的に出でたものであつて、詰まり朝鮮、支那、滿洲、是等の地方に於ける商工業を平等なる有様の下に置き度い、と云ふ精神に外ならぬのである。我日本人が獨り之を恣にするに云ふ意思は毫もない。固より露國人をして之を占有せしむると云ふ事は毫末も許さぬ、又何國の人と雖も朝鮮、支那、滿洲に於て、或特殊の權利を



有つ所の、所謂門戸開放に反對したことは、決して許さぬ。然し我日本人は、或利益を壟斷する者では決して無い。世界平和の爲め、世界の商業の爲めに爲して居る戦争でありますから、それは毫もない、併しながら戦争を開いた日本人は、どこまでも朝鮮の開発、滿洲の開発、支那の開発を以て任じなければならぬと云ふ事は明白である。即ち此戦争の困難に堪へ、十年二十年或は三十年掛つても、必ず名譽ある平和を以て結了して、帝國の國威を大に宣揚することを希望しなければならぬ次第であります。

斯う申しますると、澁澤翁の今日病氣であると云ふ事を甚だ残念に思ひ、随つて又諸君の奮發を大に望まなければならぬと云ふ事に歸着する次第であります。私の今日の役目は澁澤社長の代理として開會の辭を述べればそれで責は終るのであります。澁澤翁の病氣の事からして種々なる感想が胸中に浮びまして、不知不識申す事が甚だ冗長に涉りました次第で、諸君の御清聴を忝うし、深く感謝致す次第であります。

大患後私は休養の必要を感じ、それが爲めには私の關係事業を減省しようと思つた。當時私の關係事業は八十餘種もあつて、其の約半數を辭任したのである。東京商業會議所の會頭は後進の道を

開くため、世間に意外の衝動を與へたが、思ひ切つて辭したのである。



### 三七、演劇の改良と音楽

私は是れでも音楽は少しは解る方である。藝者の唄つて居るものを聴いても、直ぐ拙いか巧いかの見當はつく。若い時分には藝者から教へられて、少しは自分で唄ひもしたもので、義太夫、長唄常盤津、清元、一中節ぐらゐの別は知つて居るのである。就中、義太夫の方ならば、之れに就いての話も能きれば、又少し自分で演れもする。身を入れて稽古したら、一段ぐらゐは語れぬでも無からうと思ふ。私が斯く義太夫を多少理解し、少しぐらゐは語れるといふほどになつてゐるのは、郷里の血洗島と申す地方が、大層義太夫の流行る土地で、亡父も大變義太夫を好き、田舎義太夫ではあるが、兎に角相當に語れたものだから、慰みに其處此處と語つて歩いたりなごしたので、自然幼少の頃より其の感化を受けた結果である。

今の帝國劇場を創立するのに、私が多少骨を折るに到つたのは私が藝事を解するからでもあるが其の趣意とする所は帝國ホテルを設立するに盡力したのと同いで、外國貴賓の來朝せられた際に、其の觀覽を仰ぐべき演藝の場所がないから、之れを利用して得られる建物の一つ設けて置きたいと思つ

たのと、又一には之れによつて演劇改良の道を講じたいと思つたからである。素と演劇改良論は風俗改良會から起つたもので、福地櫻痴などが切りに之れを唱道し、當時福地は私に勧め自分は技藝方面を擔當するから、お前は經營やら事務の方を受持つてくれと云ふ事であつたのである。私はそれも可からうといふのでその氣になつてゐる中、福地は自分で歌舞伎座に關係し、俳優や興行師とも密接の間柄となり、全く芝居道の人になつてしまつた。それでは演劇改良事業に福地を親しく關係さしては却つて面白く無いからとの事で、この事業も一時沙汰止みに成つてしまつたのである。

然るに福澤諭吉氏が其の發頭人に成つたわけでもあるまいが、福澤捨次郎氏其他慶應義塾出身の人々が意見を纏めて、明治三十九年頃、伊藤公の許へ押しかけて行き、是非演劇改良の事業に力を添へてくれよと相談を持ちかけたのである。其の結果築地の瓢家で會合し、色々話を進めたのだが、會合の當日私は折悪しく箱根に行つて出席しかねたものだから其の罰だといふので、席上委員を選んだ際に、私は委員長を仰せ付けられたのである。東京に歸つて伊藤公より此の趣を聞知し是非それを受諾せねばならぬ事になつたので、帝國劇場の設立に力を盡くすに到り、資本金を百萬圓として始めたのだが、最初はオペラ懸つたものを上演する豫定であつたにも拘らず、それでは迎も經營がでかかねるからといふので西野惠之助氏が最初の専務取締役となり諸事を切り廻し、結局今



日の如き状態に落着いたのである。幸ひに昨今では帝國劇場も、經營上に左までの困難を感せぬやうになつたから誠に仕合せに思つてゐるが、外部の形式だけは進歩しても内容の進歩之れに伴はず、豫期の如く之によつて演劇改良の實を擧げ得ぬ憾みが無いでもない。併し設備其他に於いて多少なりとも帝劇が日本の演劇改良に貢獻した所はあると思ふ。

## 三八、韓國に第一銀行支店を開く

### 一、支那將軍に貸金して立案

元來第一銀行が韓國に事業を開いたのは、今日から考へると何か先見の明でもあつた様に強辯し得られるかも知れぬが、私の不敏、又行員の不束、決して明治十一年頃に左様に遠大な考へを持つて居た譯ではなかつた。其の時分の銀行の經營は一向筋道が分らなかつたので、バンクと云ふ文字が腰を掛けるものであつたか、金を取扱ふものであつたか、能く分らぬ位の時代であつた。

丁度明治十年私は大藏省から命せられて、第一銀行の名を以て支那に金貸に行つた事がある。其頃支那の壯部に於いて左曾棠と云ふ人が、大分勢力を振うて居る時分に、其の部下に金順と云ふ將軍があつて、其人が支那の陝西、甘肅二省の征伐に就いて金が要ると云ふことから、日本に之れを借りに来た。其の時分は私も、今でも或る場合にはさうであるが、若い時分であるから一層突飛であつた。當時の大藏卿であつた大隈伯も突飛。突飛が寄合つて遂に支那に向つて金貸に行くこと云ふ事になつたのである。それは誠に一場の滑稽談に終つたのであつたが、益田孝、其時の銀行局長



岩崎小次郎、福原和勝などと云ふ人が相連立つて行つた。そして初めて支那、朝鮮に銀行の手を延ばしたいと云ふ觀念が起つた。それが抑々朝鮮に支店を開く原因であつたのである。續いて支那にも支店を開くと云ふ考へを持つたのであるが、併し支那へどうして手が延びなかつたかと云ふと、斯う云ふ理由があつたのである。其頃日本に御雇となつて居り、後に倫敦のパーズバンクの支配人になつたシャンドと云ふ人が、内地一般の人を得意とする銀行と、海外の爲替事業を主とする銀行とは、英吉利では全く兼營することは出来ぬ。第一銀行はこれを主義とする積りであるか、其の目的を明かにせぬと、大なる間違ひを惹起すると云ふことを八釜しく言はれた。私は

『固より内地の金融を専ら開かうと思ふのだ。續いて海外の金融も十分指導しようと思へる。』と答へると、シャンド氏は

『いやそれはいかぬ。さう思ふのが素人の考であるけれども、英吉利のエキスチエンジ銀行と、それから内地を主とする銀行とは劃然と區別がある。法律では禁じてないけれども一緒には出来ぬ』

と云うて其時に紙數三四十枚もあつたらうか、翻譯したら一冊の書物になる位の理由を認めた書面を寄こした。それは十一年の春であつたか秋であつたか、何でも十年の戦争が過ぎた後であつた

と思ふ。そこで朝鮮には支店を出したけれども、支那に向つては手を伸ばすと云ふことを遣らなかつた。

それならば朝鮮も止めるかと云うて見たけれども、朝鮮へ支店を出した時に、内務省と大藏省とに御願ひして、何でも三萬圓であつたか、五萬圓であつたか、確か五萬圓と思ふが、五箇年賦六分位の利息で拜借出来る特典を得た。其の特典に依つて、折角出した支店だから先づ五年の間は繼續して見ようと云ふので維持したのである。既に支店を出した以上は、朝鮮位はシャンドの持論に背く譯でもなからうから持續しよう、持續するには朝鮮に對して何か工夫もがなと種々心配した末に、十七年に至つて幸ひに朝鮮の海關税を取扱ふことを一手に任せられる事になつた。それが朝鮮に對して第一銀行の手を伸ばし得る端緒であつたのである。其の初めは釜山と京城だけであつたけれども、引續いて仁川、元山、それから鎮南浦、平壤に手を伸ばすやうに成つたが、さて二十五年までは唯僅かに關税を取扱ふだけで、些細の貿易の媒介者になつて、金融機關といふのも恥かしい位の仕事をして來たのである。明治二十四五年頃に於いては如何したものであらうか、寧ろ面倒だから止めたら宜からうなどと云ふ説もあつた位であつた。然るに二十七年の日清戦争が大いに朝鮮に影響を與へたのである。朝鮮の諸事業がそろ／＼伸びて來て、引續いて銀行業務にも影響して來た。



其後二十八、九年、三十年と追々に銀行業務ばかりでなく、社會上の事柄にも種々なる關係を生じて來るし、又銀行業務も從つて伸びる。普通の事務の伸びるのみならず、政治關係の仕事に多少手を出さねばならぬやうに成つたのである。朝鮮の政府に對して相當の機會があつたら貸金でもして幾らか手足の伸びるやうにと云ふことは、戰爭の前後から少しは思つて居たのであるが、漸く二十七年に井上侯が公使であつた時、初めて此の朝鮮政府に金を貸して遣つたら宜からうと云ふことで、公使が中へ入つて要求された。二十五萬圓であつたか三十萬圓であつたか、金融をせねばならぬやうなことが生じて來た。右の様に少し手の伸び掛つて來た時に、二十八年の變から却つて政治上の關係が後戻りをすると云ふやうなことになる、折角伸びようとしたのが果して順好く進んで行くや否や期し難いと云ふやうなことゝなつた。併し其頃に京仁鐵道を日本人の手で經營したい、亞米利加人の手に渡つたのは残念であると申して、私は銀行外の方面から頻りに相談に與らねばならぬ場合も生じて來て、追々に其事が進んで來るに従つて、銀行の望も見えて來たから、私は初めて三十一年の四月に朝鮮に向つたのであつた。

行つて見ると、銀行事業も僅かに維持はして居たけれども、折柄二十七年の大戰爭の後に露韓銀行が出來る、京仁鐵道もまた米國人の手にあるといふやうな有様で、私は或る場合には實に残念だ

と感ずるやうな事も屢々あつたのである。幸ひに其の露韓銀行も稍々中止の姿であつて、日本も唯手を縮めて仕舞はねばならぬと云ふ様でもなかつたけれども、行く末どうなるかといふ疑ひを持つたのである。併し京仁鐵道は幸ひに米人モールヌから日本人の手に引継ぐことになつて、其の鐵道が未だ亞米利加人の手で工事中に私は行つたのである。元來國際上の關係から考へても、又民間の經濟上から見ても、所謂一葦帶水の對岸にある韓國を、斯かる有様に置くのは如何にも残念であるし、到底何時までも此儘置き兼ねるものであると云ふ様な念慮が益々強くなつたに就いて、遂ひに京仁鐵道に止めず京釜鐵道も是非共日本人の手に依つて創設したい、どうか今日の場合に行けるだけ廣めて行き度いと微力ながらも實に腦力を費し、力のあるだけは盡した積りである。其頃から段々我が政府に於いても朝鮮に對する經濟上の關係に深く心を注ぐやうになつて、三十三年の秋であつたか、金融上第一銀行をして韓國政府と一種の契約を結ぶことを内々命せられるやうな運びに到つた。將に其の計畫が成らんとすると、突然其事が蹉跌して、俄に又そんなことをしては相成らぬと云ふことに變化した。

扱、右の様な譯から色々心配をした末に、韓國の當局者と約束まで濟ます事が出來た後であるから、實は第一銀行としては穴へでも入り度い様な感がした。折角手を著けかけた事も是非無く止め



ることになつたのである。現に明治二十七八年頃から苦心經營して、大いに手を伸ばさうと云ふ場合に到つたときに、そんな事をしたら大變だといふので止めねばならぬやうになつたのであるから、據ろ無く其事は止める事にしたが、朝鮮人ばかりなら未だ宜かつたけれども、其の當局者といふのは英吉利人のブラオンと云ふ人であつた。此間に立つた第一銀行の困難は實に名狀し難いものであつたから、其年の冬、再び私は朝鮮に行つて今度は官に關係せぬ一方法を案出し、朝鮮政府と第一銀行との間に於いて一の金融を圖ることを考へて、ブラオン氏と色々相談して折角それが稍緒に就くと、朝鮮政府の官吏の間に猜疑心が生じて、種々なる故障を入れた爲めに、折角假契約をした程のことも又破れてしまつた。

斯様な有様で、餘儀なく三十四年に到つて、今度は銀行だけの力で一覽拂の手形を發行して、それを以て融通を裨補して大いに朝鮮の發達に資すると云ふことにした。其年に大藏省の許可を得て銀行券を發行したのである。併し是れは内に於いては大藏省の許可を得たけれども、朝鮮政府の方から承認を得ない爲めに、發行の後二度ばかり急激なる取付に會つた。併し其の金額は澤山出して居なかつたから、手配さへ届けば何にも心配はなかつたが、何しろ常に正金を朝鮮に備へて居る譯ではないから、スハと云ふ間に合せる爲めには、大いに胸を突くといふ様な事もあつた、殊に運送

が間に合ふや否やと云ふ心配は一通りでなかつたのである。斯様な事もあつたが段々と時を経て、其中に三十七年の大戦争があり、引續いて三十八年に目賀田君が財政顧問となつて行かれて、茲に初めて朝鮮の眞正なる中央の金融機關となり得たかと思ふやうになつたのである。

## 二、實際上の中央銀行となる

第一銀行が其の組織を更めて中央銀行の位置に立つと云ふことは、或ひは後日又法制上の必要から、直ちに變更があるかも知れぬと云ふことを恐れた。若しさういふ時には否の應のと云ふことは甚だ見苦しいことである。私は智慧もなし、さう云ふことも豫知することは出来ず頗る困るから、此事は御免蒙つたが宜くはないかと、丁度三十七年には私は大病後僅かに出勤して、其事を聽いて餘程躊躇したのである。併し私かに窺ふと、目賀田財政顧問の御考へとしては、成るべく速かに朝鮮の財政を釐革しなければならぬ。第一に貨幣の整理、第二に國庫金の取扱ひと、斯う云ふ方針から手を著けて行くには、是れから拵へるものではない、さうか有るものを利用して行らせ方が宜いから、是非第一銀行に之を任ずるといふ方が一番宜からう、といふ御考へであると伺つて見ると、朝鮮の財政改革の爲めには、誠に御尤千萬なる方法と深く其の政策に敬服したので、



それで自分が病氣恢復後其事を承つて、第一銀行としては御免を蒙りたいとか、或ひは斯うなつてはいかぬから斯様にして欲しいといふやうな我儘なことは一切申さぬが宜い、唯國家の爲めに服従すると云ふ心が無くてはならぬぞ、と云ふことを申したのである。

併し第一銀行は自己の利益を度外視した譯ではない。本旨としては朝鮮の金融機關たること、朝鮮の財政に對して多少の貢獻を爲し得れば足れりと云ふことを主としたのである。それが丁度三十八年御用を仰付けられる時の大主眼であつた。併し其時には直ぐ二年、三年とは思はなかつたが、越えて四十年の確か八月と覺えて居るが、故伊藤公爵から、

『時代の必要上、折角骨を折つてしたことが、銀行制度を別に設立しなければなるまいと思ふ。』といふ御話を承つた私は一言で御請をした。

『如何にも御尤、さういふ御沙汰であれば決して異存は申しませぬ。必ず都合好く終局するやうに致す積りでございます。併し第一銀行としては自己の利益を思はぬ譯には参りませぬから、それに就いては宜しく御諒恕の程を願ひたい。決して其の事柄に對して情け無いとか、一年しか経ちませぬとか云ふやうな、愚痴は申しませぬ。』

と御答した。それから其の引繼方法に就いて種々協議をして、遂に四十二年十一月に到つて、韓國

に於ける第一銀行の經營せる十四箇所の支店、出張所の事務を全部韓國銀行に引繼いたのであつた。

——朝鮮に於ける支店出張所は、明治十一年六月釜山支店の開設に始まる。尋で同十三年五月元山津に出張所を設け、同十五年十一月更に仁川に出張所を置き、同廿一年九月之を陸せて支店となし、十月京城に出張所を設け、同廿七年六月日清戦役の開始に先ち日本銀行と金庫出納事務取扱代理約定を結び、仁川、釜山の兩支店及び京城出張所を以て臨時中央金庫派出所となし、我國の金庫事務を代理して軍用金の保管並に其出納事務を取扱ひたり。爾來業務益々隆盛に赴きしが、元山出張所のみは收支償はざりしを以て、明治廿九年九月長崎第十八國立銀行の元山支店を本店の代理店と定め、元山の海關稅取扱を委託して之を閉鎖したり。

日清戦役後、我が國の勢力が朝鮮に伸張するに及び、明治卅一年十月先づ木浦に出張所を開き、同卅七年三月日露戦役の初に當り平壤に出張所を開設せり。日露戦役の進行すると共に本行の經營も亦著々として進歩し、同卅八年四月平壤出張所を支店となし、同月大邱に出張所を設置し、また元山出張所を再興し、六月城津、安東縣に、七月開城に出張所を開き、同卅九年二月咸興、馬山に出張所を設置し、卅八年五月京城支店を以て韓國支店となし、朝鮮に於ける一切の支店、



出張所を統率し、中央金融機關としての任務に従事せしめ、翌四十年四月更に鏡城に出張所を設けたり。

明治四十二年十一月、韓國銀行の設立せらるゝに及び、朝鮮に於ける一切の業務を擧げて同銀行に譲渡し、尋で同四十三年二月釜山、京城の兩支店のみを存置して一般銀行業務を取扱はしめ、其他の四支店、十出張所を一時に廢止したり。第一銀行五十年小史

## 三九、京仁京釜鐵道

### 一、京仁鐵道創設の經過

韓國時代に京仁鐵道が、何う云ふ經過で出來上がつたか云ふと、丁度京仁鐵道の始めの起りは米國人より日本人へ引受けたのである。是れは明治三十年の二月頃より話が起つて、契約したのは五月であつたと思ふ。其の始めは京釜鐵道の創設委員連が談判を始めて、米國人モールズと數回會見し、先づ此位が相當と思ふから此の價格で我々が引受けよう云ふ處まで話が進んで居たが、扱此の資本はどうしたら宜からうかと、創設委員等は種々協議をして當時の外務大臣大隈伯に此話をしたのである。處が、大隈伯から早速京濱若くは大阪の重立つた資本家を集めて相談をして頂いた。其の理由はどうも此の鐵道は必要と思ふ、一方には京釜鐵道と云ふ話もあるが、其の成立は期し難い。今京仁鐵道を米國人の手に依つて成立せしめると云ふのは實に残念である。政府も相當なる補助を與へるであらうから、何れ議會の協賛を経なければならぬが、何と云へても日本人の手でやる事が必要であるから、各々方は十分力を盡して呉れ、其の補助に就いては相當なる相談もしよう、



兎に角組立てることを努めて呉れ。尙ほ此事に就いては、京釜鐵道に關係して盡力して居る人に就いてよく聞いて呉れと云うて、京濱、大阪の有力家を勸誘された。さうして其の人達は又別に合同評議して始めて、利益は無いかも知れぬが、外國人の手に任せるのは遺憾であるから、銘々巨額の



モルース氏

出資は出来ぬが、少し位の金を出して日本人の手でやりたい。併しこれは普通會社の制度にも依れぬから、シンヂケートを作らうと云ふことになつて、それから私が海外にあるシンヂケートの規約等を取調べ、其の連中に諮つて見た處が、京釜鐵道の委員が残らず加入はし難いから、二三人加名しよう云ふことになつたのである。

そこで私も京釜鐵道からシンヂケートへ加入して、總員は十六人であつた。斯くてモールスとの契約も出来たが、其後モールスから種々苦情を言つて來る爲めに、最初の契約通り履行が出来ず、それと同時に内地のシンヂケートの連中も懸念して寧ろ止めてしまはうと云ふので、殆ど廢滅に瀕したのである。處が折角斯う云ふことになつたのであるから、何とかして繼續して貰ひたいと大隈伯より説諭を受け、其後伊藤内閣となつても種々政府と

引合を重ねて結局百八十萬圓だけ政府が金を貸して呉れることになつたのである。最初二百萬圓でモールスと約束致したけれども、之れを完成するには少くも二百五十萬圓は要するであらうと云ふので、其時は二百二十萬圓程金が支出されて居たが、橋梁等まで悉皆落成すると、丁度尙ほ二十萬圓許りの金を出さなければならぬと云ふ譯になつて居た。而して政府から貸與された百八十萬圓は、先づ當分無利息で借ることとなり、追つて營業上利益が擧がつたならば、——出資者が出した金に對して五分以上になつたならば、其の餘分は政府に納め、其の納めた利息が五分以上になつたならば其分は最初の出資者に再び配當せよ。而して其の年限は五年と限る。五年間に株式會社に變更し、株式を賣却して政府に返金せよ。若し五年の間に出来ぬと云ふ場合には、又其時に特別の詮議を以て年限を延ばしてやらう、大體斯う云ふことになつたのである。其事が都合三度の内閣で極つたので、最初は大隈伯の時に百萬圓貸與の事を決せられ、次に三十一年に伊藤内閣になつてから、八十萬圓の金を増して貸與することになり、それからまた山縣内閣になつて、三十二年一月に始めて百八十萬圓の金を議會の協賛を経て支出して貰ふことになつたのである。又鐵道の方も、最初は組合で成立つたのであるが、三十二年五月から合資會社とした。營業の點は仁川港の西方の海濱を埋めて一萬七八千坪の停車場が出来、當時其の停車場から漢江の傍迄廿一哩だけ營業をして居たので



ある。

最初は營業上如何なる有様になるかと痛く懸念して居たが、開始後の模様は思つたよりは良好であつたのである。未だ京城迄聯絡が付いて居なかつたから、謂はゞ途中開業で、京仁と言つても日本の東京と横濱の關係のやうではなく、途中は至つて寂寥たる所であつた。それに仁川と云ふ所は韓國の都會ではなく、唯港になつて居ると云ふだけであつた、又漢江は舟が通ふと云ふ丈であつたのである。故に此の鐵道に對して利益が如何であらうかと懸念したが、當初は二回の往復で始めると一哩五圓位の利益があつた。それから六七圓に進み、三回の往復にして到頭一哩十圓迄に収入が進んで来た。併し十二月から二月までは寒氣も強いから甚だ結果が悪く、殊に一月二月は韓國に於いては休む時であつて、それに非常に寒いので河は氷の爲めに荷物を出すことが出来ず、又、旅客も随つて減じた爲めに八九圓迄に収入が下つたが、三月からずつと進んで、十一圓餘りの平均を得るやうになつた。其後漢江の橋梁も出来上がつて、明治三十三年七月には、愈々全通する事になつたのである。

私も其の開業式には臨場した。區々たる小鐵道の工事落成に對して態々出かけたのは、其の態度餘り仰山に過ぐるの嫌ひあるも、假令其の里程は僅か廿六哩、工費二百五十萬圓、殆ど我が内地の

一小鐵道と同じき觀あるにもせよ、二年以來本邦人の經營、殊に本邦人のみの手一つにて毫も外人の助力を藉らず、首尾能く而も外國に鐵道を敷設することを得て、韓國の交通に至大の便益を與へ、彼等の貿易に非常の利便を供し、外國の人々を載せて自由に往來せしめ、自分等日本人も之れに乘り往來するを見るに到つたのは、其の物質上の成功便益等の外、偉大なる一種の快感腦裡に澎湃たるを禁ずる事が出来なかつたのである。之れは事の經營に當つた私共のみの感情に非ずして、日本人たるものは皆同一の快感を懷いたであらうと思ふ。京仁鐵道開業式當日は天氣快晴であつて、其の開業式の狀況は鐵道の小なるに比して意外に盛大なる光景を呈し、中にはこんな小鐵道には不權衡なる開業式などと冷評を加へる位盛大且つ愉快なる舉式であつた。是れは一つは外國で日本人が初めて鐵道を經營したる記念でもあつたが、其の重なる意味は將に成らんとする京釜鐵道に聲援を與ふると、猶ほ之れが株式募集上に於ける必要より斯くは開業式を盛んに舉行したのであつた。

——朝鮮鐵道の起原は明治二十九年米國人「モールス」なるもの韓國政府より京城仁川間鐵道敷設の特許を得て線路工事中、明治三十二年十一月濫澤榮一氏の組織に係る京仁鐵道引受組合と「モールス」との間に工事竣成後同線を引受くるの契約を締結し、三十二年一月更に右契約を變更し、



工事の竣成を俟たずして組合に引受け、同年五月組合を變更して京仁鐵道合資會社となし引續き  
工事を進め、同年九月十八日仁川鷺梁津間二十哩餘の運輸を開始す。是を以て朝鮮に於ける鐵道  
運輸營業の嚆矢となす。續て三十三年七月鷺梁津西大門間五哩餘の工事竣成し、茲に京仁間全線  
の運輸營業を開始せり。(朝鮮地誌)

——京仁鐵道引受組合はモールヌに對する當初の契約を變更し、工事未成の儘之が引繼を受け専  
ら殘工事を施行するの運びに至り、已に韓國政府の承認を得たるを以て組合組織を改めて合資會  
社とし、三十二年五月十五日定款を作製し、同時に從來の組合委員澁澤榮一を取締役社長に益田孝  
及び瓜生震を取締役に選任し、同十七日會社設立の登記を経たり、資本金は七十二萬五千圓、社  
員は從來の組合員十五名にして組合の權利義務並に總支配人以下の職員は擧げて之を會社に引繼  
げり。

是より先、澁澤社長は韓國に渡りて親しくモールヌの工事を視察したるに、其の經營方針に幾多  
の缺陷あり、就中韓人夫を虐使するの弊甚だしく、會社の將來の信用に惡影響を及ぼすのみなら  
ず、對半島扶植の大義に悖るべきが故に、會社が工事を施行するに當りては斷然此の如き弊害を

廢絶せしむるの必要を感じ、足立支配人を任命するに當り、第一に韓人夫の傭役に意を用ひ、彼  
等をして能く恩に感じ安んじて業に従ふを得しむるの決心ありやを確むる所あり。足立支配人は  
亦其趣旨を體して事に當りしかば、従事員は何れも悦服して職に努め從來の弊風を一新するに到  
り。(朝鮮鐵道史)

## 二、京釜鐵道會社の創業難

京釜鐵道敷設の事は、明治二十七年頃の日韓暫定條約に起因したものであるが、吾々發起人が此  
の事業を企圖したのは明治二十九年の七月であつた。當時百三十八名の發起人が集會し、其の發起  
人會で八名の委員を選定した。其の人名は前島密、尾崎三良、竹内綱、大江卓、大三輪長兵衛、中野  
武營、井上角五郎で、私も亦其の一人に加へられた。そこで其の委員中尾崎三良、大三輪長兵衛の  
二名を其年の秋韓國に派出して鐵道敷設の請願に盡力せしめ、我が公使に於いても種々助力せられ  
たが、終に其の許可を得ることが出来なかつた。越えて三十一年九月に至り、漸く其の請願が許可  
せられて、漸く京釜鐵道敷設に付いて十六箇條の合同條約を締結するに到つたのである。併し其の  
鐵道線路は、曩に暫定條約締結の際我が政府に於いて踏査せられたるものに據る積りであつたが、



翌明治卅二年春、委員大江卓を線路踏査の爲め韓國へ派出して、京城釜山間の山川を跋渉し、會て政府に於いて踏査せられたるものは考案を少し變じ、丁度京城から忠清道を南へ全羅道へ入つて全州から東へ折れるやうにして、更に慶尙道へ出て靈山、大邱などを通り、釜山に達すると云ふ大體の方向であつたのである。是れは朝鮮半島の胸腹を貫通する大幹線であつて、其の交通機關は韓國中最も人口稠密にして、農産物の豊饒なる三南地方を網羅し、最も有望なる線路であるが、何分三百哩餘の長距離の事故、其の成立を見るのは却々容易の業ではない、如何にして失墜する事無く此の事業を全うせんかは發起人の非常に苦心した處であつた。

然るに此の會社の組立を種々と考へて見たが、奈何せん其の資金は少くとも二千五百萬圓を要するのである。而して何分初めての仕事であつて、且つ中には殆んど無人の境とも謂ふべき所もあつたから、逆も通常の營利事業としては世間が十分に認めて呉れなかつた。故に政府に對して相當なる補助を請はない以上は、成立させる事は甚だ困難であつた、其故吾々も種々頭を悩まし思を勞したのである。此の事は日韓の貿易上甚だ必要だと云ふことは、商業會社が考へる點でもあるが、又一方には政治觀念からも其の希望が強かつたので、明治三十三年の春に至つて議會に於いても建議案が出で、又法律案も出で、速成を期すると云ふ事は大多數を以て殆んど政治社會では決せられた

のである。さりながら、政治上の觀念で此の事業の速成を期すると云ふ如く、商業社會が踏込んで來ないのは前に申すが如き事情で、差向き利益が有るか無いかと云ふことが分らず、また其の事業は初めての事であるから困難であらうと云ふ氣遣ひがあつたからである。それで、私共は政府に對して是非斯様な方法にして此の鐵道に補助を與へられたい。即ち第一には鐵道會社は内地であること私設鐵道條例若しくはまた商法の制限を受けなければならぬのであるが、其の順序には從ひかねるから其の範圍を外して總株二千五百萬圓の中、五百萬圓の募集が出来たならば此の會社は成立した者として、あとは追々に株を募つて行き度いと考へる。また此の會社が社債を起す爲めには、他の會社より其額を多くし即ち二千萬圓だけは之れを募ることを許可して戴き度い。更に此の會社の株金が定まつた以上は、それに對して三分だけ政府は補給して戴き度い。若し社債が都合よく出来れば宜し、萬一出来ぬ場合には、此の社債の募集に對しては政府は特別なる方法を以て募集の出來得るやうに十分御助成を蒙りたいと、それらの廉々を趣意書に書き列ねて出したのであつた。

斯く營利會社としての組織が到底成立し難い鐵道ならば、結局は國家的事業として成功を期する外あるまいと云ふやうにも考へられたが、日本の經濟上から考へて見ると、是等の事は是非決行せねばならぬことで、且つ決して不利益な仕事ではないと考へられたのである。何となれば韓國はあ



の通りの農産國で、其の農産物は、大抵日本で買つて居る、此の農産物の價を韓國に於いて安くさせると云ふのが、韓國の富を増すと云ふことに成るのである。其の富を増すと云ふことが、何處に利益があるかと云へば、日本製作物が多く賣れる。是れはどうしても他の國ではさうはゆかぬので、日本が一番好き地位に居たのである。此の點に就いては、第一に韓國の生産物の重なるものは日本が最も望む所の米穀であり、而して使用する工藝品は日本の製作物が一番適當であつた。當時英吉利なり、亞米利加なりが、木棉若しくは金巾其他種々なる物を以て競争しつゝあつたから、決して油断は出来なかつたけれども、私は斯く信じて居た。之れはどうしても買ふ品物と聯絡して、良い製品を賣り出す事が出来る以上は、韓國の貿易は日本が他國の人に負けることはない。彼の國をして農産物を安くさせると云ふことは、我が製作物を多く賣込む手段であると明言し得られたのであつた。其の農産物を安くさせるには何が主たる原因を爲すかと云へば、運輸交通を便にすることであるとは、經濟思想の貧弱な人と雖も異論のない處である。前にも申し述べた通り、此の鐵道を架設する處は三南と稱へ、韓國總體の人口が千二百萬とも云ひ八百萬とも當時言つて居たが、其の人口の七分は三南にあると云ふ位で、随つて又殖産も一番盛んであつた。先づ韓國八道中の富饒な地と云つても宜い、此の場所に大聯絡を付けるのである。若しも此の鐵道をして少しく未來の夢を

論することを得せしむるならば、義州から奉天府に向ふ鐵道——之れは當時佛國人の手にあつたが未だ着手されて居なかつた。之が成立するものとして是れへ繋いで行くならば、歐羅巴に向ふ大鐵道となること云ふことは強ち夢さばかりは申されなかつたのである。此の未來の空中樓閣は第二に措いて前に申した様な日韓貿易上の關係から見ても、實に必要な事業であつたのである。日本にも二十八年頃から種々なる事業が勃興して、其弊は延いて影響する處大きく、或ひは金融逼迫であるとか輸入超過であるとか種々の事から百般の事業が踏阻逡巡の姿であつて、甚だ行惱んで居たが、それ等の事情の爲めに、此の大關係のある鐵道をして此儘に成立し得られぬやうにしてしまふこと云ふことは如何にも残念と考へたから、吾々は及ばすながら力を盡したのであるが、どうもさう云ふ事情であつたから、市場に於いて此の鐵道會社の株式の望人が多いと云ふ事は到底期し得られなかつたのである。依つて前に申す如く、幾らか國家的觀念と云ふことから多數の人の頭腦に染込ませ、國民全體が受持つと云ふ様に進めて行くより他に策は無からうと思つた。さればと言つて危険なる趣向では望人がなからうと考へたから、政府に相當の保護を請うたのである。

幸ひにして明治三十三年九月に至り、普通鐵道敷設法並に商法の外に外國に於ける鐵道敷設に關する特別の法律の制定を見、同法律に依り本會社は資本金に對し十五箇年間は年三分の利子補給の



命令に接し、且つ尙ほ資本金は二千五百萬圓なるも其の五分の一即ち五百萬圓で會社が成立をすることを得、又初め二千萬圓ほどの社債發行を爲し得るのみならず、社債に對しても亦年六分の利子補給ある譯で、其の特例一二に止まらなかつたのである。以て本鐵道の如何に重要な關係を有したかを知る事が出来るであらう。

——明治二十七年以來の懸案たりし京釜鐵道契約も漸く成立を告げたるを以て、翌三十二年二月發起人委員大江卓は技師久野知義等を隨へ、線路踏査及び沿道旅客貨物集散の狀況を視察せんが爲め渡韓し、政府當路の諸大官に交渉して、踏査及び視察の便宜を與へんことを沿道各地方長官に訓令せしめ、技師等と共に各地を視察し（參謀本部よりは陸軍中佐大澤界雄出張せり）大江委員は四月を以て歸朝せり。同年七月踏査報告書、線路圖、建設費概算成りたるを以て、此に發起人は會社創立の方針を定め資本金の募集に著手せんとせり。然れども當時我國經濟界の狀況は巨額なる資本の募集に困難なりしのみならず、海外の狀勢未だ一般に知られざりし爲め、進んで外國に事業を開かんとするの調印の日より三年以内に起工せざれば無効に歸するの虞あり。既に其の過半を経過せるが故に發起人は政府に對し會社設立に關して屢々特別保護の請願を爲し、或は貴衆

兩院の有力者に謀る所ありしが、偶々京釜鐵道計畫を以て日露の國交を害するの虞れあるものとし、或は我國經濟界の悲境に沈み内地に必要な鐵道すら之が建設を延期せる有様なるに、屢々内亂の危險ある韓國に於て鐵道を敷設せんとするが如きは、無謀冒險の甚だしきものなりとの非難を生じ、議容易に決せず、茲に於て委員等連署して山縣總理大臣に請願し、一面第四十四議會の開會に先ち兩院議員に懇請した結果、遂に兩院に於て京釜鐵道速成に關する建議案出で、何れも大多數を以て採擇せられ、政府は直に外國に於て鐵道を敷設する帝國會社に關する法律案を提出し是亦大多數を以て通過せり。（朝鮮鐵道史）

京釜鐵道株式會社は愈々工事を進めて、明治三十六年には京仁鐵道の一部を買收して、朝鮮の鐵道を統一する端緒を開いたのである。處が丁度此頃日露間に搖曳した風雲漸く急を告ぐるに到つたが、今迄露國の鼻息を伺ふやうな態度を採つてゐた伊藤公や井上侯等は非常に心配せられて、千葉縣に避暑してゐた私をワザ／＼電報で呼びつけて、國家の大事であるから、軍事上必須の朝鮮鐵道を速成するやうにと云ふ命令を傳へられたのである。そこで井上侯等の心配で金錢上では十分に援助を得たので、三十七年の十一月には殆ど全線の開通を見るに到つたのである。



——京釜線は明治二十七年八月日韓兩國間に協定せられたる暫定條約及び三十一年九月締結の京釜鐵道合同條約に基き、且つ三十三年九月發布の法律及勅令に準據し、三十四年六月を以て成立したる京釜鐵道株式會社に於いて同年八月工を起せり。而して三十三年十月京釜鐵道株式會社は、京仁鐵道の一切を買收して朝鮮に於ける鐵道統一の端を開けり。尙ほ同年十二月日露兩國間の形勢切迫せるに當り、政府は京釜鐵道速成に關する命令を發し、大に其工を進め三十七年には南北の各區間に於て百十三哩に涉り便乗載の取扱をなすに至り、同年十一月末には全線二百三十七哩餘を竣成し、三十八年一月運輸營業を開始せり。(朝鮮地誌)

## 四〇、政界人と財界

### 一、實業界と政界

歴代内閣に關する感想、就中經濟上より見たる歴代内閣に就いての感想を述ぶるに方り、永い過去を振り返つて見ると種々の事が思ひ出される。私自身としても多少興味ある事であるから、記憶のまゝを概略申し述べる事としよう。尤も私は明治六年官を辭して以來、徹頭徹尾實業界に終始し來たつたのであるから、政治、法律等に關する感想はぬきにして、主として私の立場たる經濟上の方面に就いてのみ述べる事とする故、其點は豫め御含み置きを願ひたい。

抑も我國に於ける内閣制度が採用されたのは、明治十八年十二月の事であつた。其の以前は古い大寶令から採つた太政官制に據つて居つたのである。然るに時勢の進歩に伴ひ太政官制では遺憾の點もある處から、海外先進諸國の制度に準據せる新官制を採用する事となつたが、それが即ち現今の如き内閣組織の實施となつて現はれたのである。之れは雖て憲法が發布されて議會開設となり、衆議によつて國政を運用し、法律を制定する事となつたので、國政を司る上に於いても斯くの如く組



織を革新したものである。

さて内閣組織となつてから殆んど四十餘年、議會開設以來三十餘年、其間銀行制度、各種諸工業、養蠶製絲等を始めとして、我國實業界の進歩の跡を見るに、殆んど隔世の感あるほど長足の發達を遂げた。然るに翻つて政治方面を観るに其の進歩が之れに伴はぬ様に思はれる。尤も内閣官制の制定以來、各省の仕事は數倍大きくなつて居り、省の數も増し新事業も非常に殖えて居るが、實業方面の様に面目一新といふ事は出來ないのではあるまいか。帝國議會は開設以來既に五十回以上を重ねたが其の現狀は果して怎うであらう？ 特に衆議院の如きは動物園といふ酷評さへ出てゐる程である。此の一事に徴するも、義理にも政治界は進歩して居るとは言へまいと思ふ。私は歴代の内閣に對して、民間實業家の一人として或時には苦情も申し、或る場合には援助も受けたが、幸ひに所謂政商とはならず、純然たる一實業家として自己の独自の立場に於いて働き、自分で申すのも可笑しいが、多少社會的にも貢獻した積りである。何分内閣官制實施の當時は我國の實業界は頗る微々たるものであつたから、政治界は勿論、一般社會から頗る輕視されたもので、學校出の秀才などは悉く官途に就くといふ有様であつた。

現在の東京商科大学の前身である一橋の高等商業學校は其頃は東京府の經營であつたが、實業教

育などはそれ程必要なものでないとの意見が多く、遂に府會に於いて經費を削除され、將に廢校されんとしたのである。私共は大いに之れを遺憾に思ひ、實業界の人々を始め關係筋の人が非常に骨を折つたので、幸ひ廢校の運命だけは免れたが、此の一事に徴するも如何に實業界が不振であつたかを推察する事が出來ようと思ふ。

## 二、歐化主義の失敗と紙幣兌換の實施

第一回の内閣は伊藤博文公が首相であつた。同内閣は大いに女子教育に力を注ぎ、女子教育獎勵金を出し、英國よりは女子教育の經驗家カルクスといふ人を聘して女子教育の指導を仰ぐと共に婦人連をして外國風に馴れさせようとした。それがため一時極端な歐化主義を採用し、女學校を創立したり、舞踏を獎勵したり、鹿鳴館に貴顯紳士や婦人を集めて夜會を開いたりして、此の方面には大分盡力したものである。之れは凡ての事物に就いて歐米の長所を採用するといふ、極めて眞面目な方針でやつたのであるが、少しく其度を過したと、其間に誤解や中傷を生じて反動を惹起し、折角大した意氣込みで始められたのであるけれども中途で頓挫するの餘儀なきに到つた。

是れより先き政府は明治維新匆匆發行した大政官紙幣と稱する不換紙幣を、正貨と兌換する事の



出来るやうに兌換紙幣制度に改むる事に決し、第一次伊藤内閣時代である明治十九年から銀で兌換する様になつたが、之れに就いては松方正義公が特に盡力された。明治二十二年頃になつて其の影響は經濟界の活氣となつて現はれ、鐵道事業、諸工業、紡績事業等が速かに發達した。一方金融界方面に於いては、日銀總裁川田小一郎氏が同行の擴張刷新を圖り、各銀行との聯絡もとれる様になり又兌換制度も實施さるゝに到つたので、金融界は著しく發達を來たした。處が好景氣の反動として明治二十三年には金融の逼迫を來たし、殊に折角物興の機運にある大阪の紡績事業などは頗る苦境に陥つたので、之れが善後策を講ずるの必要に迫られ、川田日銀總裁が大阪に出掛けて行き、次いで私と安田善次郎氏とが相談のために大阪に赴いたが、種々協議の結果「見返品」といふ便法で救濟の道を講ずる事とした。此の見返品といふのは所謂擔保附手形であるが、それ以來此の便法は廣く金融界に用ゐられる様になつたのである。此時の財界不況は「過度の進歩は自から反動を起す」といふ經濟界の法則から來たものであつて、誠に止むを得ぬ次第であるが、併しながら一面に於いては時の山縣有朋内閣の財政策が放漫に失した嫌ひなしとせぬのである。其後明治二十四年から二十六年頃までは經濟界も落つて、至つて穩健な發達をした。尤も二十三年からは議會が開設せられ民權主義が盛んに唱へられて居つた時代なので、政府當局と議會との論争衝突などもあり、或

ひは院外の政治運動、或ひは政府の極端なる選舉干渉などがあつて、此の方面に於いては仲々喧しかつたものである。

### 三、日清戦争と金本位制の確立

第二次伊藤内閣の時に日清戦争が勃發した。何しろ日本にとつては實に容易ならぬ國難であるから、軍事に將た政治にすべて完全にやらなければならぬといふので、國民は殆んど上下一致して蹶起したのである。吾々實業家は後に述ぶるが如く伊藤公の勸説と委囑とに依り五千萬圓の募債に骨を折つた。

戦争の結果は幸ひにして國民の一致なる奮闘努力に依つて我國の勝利に歸したが、戦後例の三國干渉があり、國民は所謂臥薪嘗膽時の到るを待つより外はなかつたのである。而して此の戦争の爲め朝鮮に對する鐵道計畫も金融方面のことも一向に手が伸びず、殊に明治二十八年に起つた閔妃事件が大いに妨げをなして、折角扶植した朝鮮開發の事業も一頓挫の形を呈し、其間に乘じて金融方面ではロシアが手を伸べて露鮮銀行を興し、鐵道はアメリカが利權を握るといふ風で、日本の勢力は殆んど伸びなかつた。そこで之れではならぬと吾々實業家が大いに發奮し、政府の後援を得て



明治三十年即ち松隈内閣時代に、漸く仁川と京城及び釜山と京城間の鐵道敷設權を得たのであつた。此の時代松方正義公は大藏大臣を兼攝して居られたが、非常なる決心と大英斷を以て、支那の債金を本として従來の銀本位制を金本位制に改めた。此の問題に關しては朝野の間に非常に議論が闘はされたもので、賛否兩論共に相下らず、殆んど其の歸趨に迷ふ有様であつた。私共も金本位採用には時期尙早を唱へた一人であつて、松方公の反對の立場に立つて盛んに運動をしたものである。然るに松方首相は勅裁を仰いで斷乎として金本位制採用の果斷に出でられたのであるが。後日になつて考へて見ると、松方公の英斷は實に其の時機を得たものであつて、其の功績は特筆大書しなければならぬ。此の金本位制を採用したお蔭で、日露戰爭當時日本が如何に有利であつたかは、少しく經濟界の事情に通ずる人の熟知する處であり、今更喋々するまでも無い事であらう。

#### 四、海運の獎勵と朝鮮鐵道問題

元來、我國の紡績業は明治十五年頃から起りかけたものである。併し其の原料は我國にはないので、明治二十二年大隈重信侯が外相時代に時の通商局長佐野常樹氏を綿業調査の爲め印度に派遣し、序でを以てジャワに於ける砂糖の調査をさせた。其の結果に基き明治二十五年頃にして日印貿

易の端緒が開かれたが、之れが我が海運の發達を來たす動機となつたのである。日清戰後政府は海運業の發達を期する爲め、海外航路に對して補助金を與へ又造船に對しても補助金を下付して其の獎勵を計つたので、大いに日本海運を盛んならしめ且つ海外貿易を促進するに到つた。之れは伊藤内閣の時勢に鑑みたる機宜に適せる政策であつて、十年後の日露戰爭に於いて、兎も角輸送が間に合つたのは全く此の時代の海運獎勵に負ふところ大である。

明治三十一年頃には經濟界が餘り進み過ぎた反動で不景氣を來たしたが、金本位制採用を斷行した松方内閣は三十一年に挂冠し、次いで所謂隈板内閣が組織されたが、之れは極めて短命に終り、山縣内閣、第四次伊藤内閣を経て、三十四年の末に桂内閣が組織された。此の當時吾々は朝鮮の鐵道完成促進の爲め外資を輸入する計畫を樹て、私共數名は三十四年歐洲へ外債募集に出かけたのであるが、朝鮮に對する政府の方針が内閣の更迭する毎に變更して、吾々も大いに仕事に仕難くかつたのである。例へば山縣有朋公や桂太郎公は産業發展の爲め朝鮮に我が勢力を扶植する事に賛成され、陰に陽に援助を吝まれなかつたが、伊藤博文公や井上馨侯などはロシアと衝突する事を懼れて之れに反對された。殊に伊藤公の如きは一部の人々から恐露病者と稱せられた程で、吾々の朝鮮鐵道促進の計畫に對しても、餘りに思慮がな過ぎると言つて居つた位である。然るに明治三十六年頃に



到り、露國との衝突は殆んど避くべからざる状態となり、朝野共に早晚露國と衝突する事を覺悟せねばならぬ様になつたので、急に朝鮮の鐵道が大いに必要となつて來た。そこで從來私共の計畫に反對であつた井上馨侯が、明治三十六年の夏、病後静養のため房州に居つた私を呼んで、是非朝鮮の鐵道を至急に完成して呉れる様に盡力されたいと懇談され、軍事上同鐵道が大いに必要である事を熱心に説かれたのであつた。私は病後なほ健康が恢復せぬので、實際の衝に當る事が出来なかつた爲め、古市公威男が京釜鐵道の社長に就任して専ら其の衝に當り、此の鐵道を完成する事を得たのである。

## 五、日露戦後の我が財政の膨脹

日露戦争中は諸工業勃興し、經濟界は非常に活氣を呈した。幸ひにして戦争は我國の勝利となり米國大統領ルーズヴェルト氏の斡旋によりて媾和條約を結ぶ事となつた。我國は此の戦争の爲め十七八億の外債を募り、而も戰勝國であるからロシアから償金をとる事が出来るものと一般に豫想して居つたが、此の見當が違つたので三十九年に到り經濟界が頗る不況を來たし、加ふるに戦後軍備擴張の爲め軍費が著しく増加するに到つた。斯かる事情の爲め商況沈滞し、且つは例の軍事公債と

鐵道國有との爲め經濟界の不況甚だしく、鐵道公債の如きは一時七十圓臺に暴落した程である。併しながら桂首相は財界に對して相當に理解があり、能く當業者と接觸を保つに努めて居つた。

明治三十九年、桂内閣に代つた西園寺内閣は、一體の遣り方が穩健であつて品のよい内閣とも言ふ可きであらう。併し其の財政經濟に對する方針も積極的ではなかつたし、且つ西園寺首相は桂公のやうに特に經濟界の人々と接觸して意見を交換するといふ風もなかつたので、財政々策の方面からすれば、先づ可もなく不可もなしとでも申すべきであらう。次いで四十一年第二次桂内閣成り専ら公債の整理に力を注ぎ、其の恢復に努めたが又社會政策上にも相當意を注ぎ、恩賜財團濟生會を創立したのも此の桂内閣時代であつた。尙ほ明治四十年頃日米問題が起つたが、小村壽太郎侯の外相時代に國民外交の必要が提唱され、商業會議所を中心として對米國民外交の運動を起す事となつたのであるが、爾來私も今日まで此の國民外交については終始微力を盡して居る。

大正二年山本權兵衛伯が内閣を組織した當時は、相當國民の期待を受けたやうであるが、彼のシメンス問題が起つて短命に終り、其後を承けて時局を收拾したのは大隈老侯である。大隈侯とは明治初年以來の舊知の間柄であるし、政治家と實業家であるからお互ひに立場は異にして居るが、其所は舊知の關係で屢々隔意のない意見の交換をしたものである。併し忌憚なく申すと、大隈内閣



には財政經濟方面に關しては徹底した政策がなかつたと謂ひ得る。又對支關係等に於いても其の遺り方を誤つて居りはしなかつたか？ 政治上に就いては門外漢であるから、此の方面からの觀察は別問題として私の關係する經濟的立場から觀察すれば、二十一箇條の對支要求の如きは確かに不得策であつたと謂ひ得ると思ふ。支那の排日熱が其後特に熾烈となつたのは、主として是等に原因して居るのではなからうか？ 尤も支那の排日に就いては背後に無智なる國民を煽動する一派があると稱されて居るが、私は從來の持論として對支方針に關しては恩威のみを以て臨むことをせず、是非誠意と人情とを以て當る様にしなければならぬと信ずる。

## 六、積極主義の大隈侯と保守的の寺内伯

大隈内閣は前にも述ぶる如く財政經濟政策に關しては徹底を缺く憾みがあつたけれども、大體に於いて積極方針であつたから、經濟界の人氣は相當にあつた、併し何處かに絀りが足りない點があつた様である。大隈内閣の成立した翌年、彼の歐洲戰亂が勃發した。其の影響を受けて我が輸出貿易の大宗たる生絲の市價が暴落したので、政府が五百萬圓を投資して帝國蠶絲會社を創立し、生絲市價の維持に努むる處あつた。然るに帝國蠶絲會社の力ばかりではないが、兎に角生絲の相場が漸次騰

貴するに到つたので、僅か一年計りの間に帝國蠶絲會社は百六十五萬圓ばかりの純益をあげる事が出来た。そこで私共の意見としては此の利益金は全く特殊收入であるから、此際一般歳入に繰り込まず別途積立金として蠶絲保護、蠶絲改良等の用途に充てる様にせられ度いと建言したが、此の建議は遂に採用せられず、一般歳入に繰入れられて仕舞つた。之れは敢て失態といふ事は出来ぬけれども尠くも策を得たものでなかつたと同時に、縮括が口程でなかつたものと謂ひ得る。尙ほ支那、米國等の關係に就いても、私は屢々大隈侯まで愚見を述べたが、大正四年に私共が渡米したのなども、日米國民の融和並びに通商上に於いて多少の好影響があつたと思ふ。

次ぎの寺内内閣は大隈内閣の積極方針であつたに反し、専ら緊縮方針を採つたので、恰かも夏から急に冬になつた様な感じのするのを免れなかつた。従つて經濟政策に際して格別取り立て、申し述ぶる様な印象はないが寺内正毅伯は露骨に言へば少し鎖國主義的の傾向があつた様に思ふ。鎖國主義的と申せば聊か言葉が穩當を缺くかも知れぬが、兎も角餘程頑固な保守的思想の所有者であつたらしく思はれる。丁度寺内内閣時代の事であるが、アメリカの富豪へボン氏が東京帝大に寄付金の申込をなしたので、其の希望によつて新たに米國に關する講座を設けるといふ議が起つた。此の講座の新設は私共から申せば大賛成だつたのである。何故かといふに新たに東京帝大に設けらる



可き講座は、米國の建國の歴史、憲法、法律等を講義するのであるから、米國の實情を明かにし、兩國民の誤解を解くに足り、至極結構な事と考へられたのであるが、寺内伯は之れに全然反對であつたのである。此の一事に徴するも寺内伯が餘程保守的の考へを持つて居つた人である事が推察されるだらうと思ふ。斯ういふ事に對しては寧ろ進んで助成する様でなければ、日米國民の眞の握手といふ事は言ふ可くして行はれ難いではあるまいか。

### 七、不言實行主義の原敬氏

寺内伯の後を襲うた原内閣は、日本に於ける最初の純政黨内閣であり、原敬氏は最初の平民首相であるが、原氏は身體もよく、記憶もよく、勉強もするし、大體に於いて立派な人物として敬服に値するけれども、只白河樂翁公式の人ではなく、公人として聊か物足らぬ處があつた様に思ふ。原氏は一面には非常に剛直な處があつたから、如才ない人と計りも言へまい。藤田東湖先生の句に『道理骨髓に徹する』といふのがあつたが、さういふ風の人とは申上げ兼ねる。忌憚なく言へば、黨を愛するといふ觀念が餘りに



伯 毅 正 内 寺

強過ぎはしなかつたか？ 之れがため或る場合には黨のために重要國事を第二にする嫌ひがあつた様に思ふ。之れと同時に事の成敗に拘泥し過ぎはしなかつたらうか？ 私をして言はしむれば自己の本能を今少し強め、其の最良と信する所に對しては、世の毀譽褒貶に關せず之れを飽くまでも貫徹するに努め、若し事ならずんば潔く玉と碎けるの覺悟、即ち玉碎主義があつて欲しいと思つたものである。

元來原敬氏は議論よりも實行力に富んで居り、事を成就させる點に於いて卓越して居つた。すべてに敏捷で物分りが早く、歐米の事柄でも東洋の事情でも論理的には伊藤博文公でも大隈重信侯でもよく分つて居り、話も上手であつたが、何處かにコダワリがあつて實際上には遺憾の點があつたものである。けれども原敬氏は飾り氣のない言語ではあるが、事實を觀破するに鋭敏であり、實際の仕事は非常にテキパキして居つた。此點に於いては歴代首相中原敬氏が第一であつたらうと思ふ。尙ほ一般施政方面に於いては、之れを絶對的に評すれば聊かクサビが縮り足らぬ様な感じがされたが、財政經濟事情にも通じて居り或ひは米穀法、或ひは借家法等を始めとして諸種の施設をなしたのであるから、其の功績の認むべきものも尠くない。歴代首相の個人々々に就いては此外に種々の感想もあるし、私との因縁話もあるが、經濟上より見たる歴代内閣の諸公に對する思出や感想は、